

---

# ゼロの使い魔 楽しく転生

風鳴刹影

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔 楽しく転生

### 【Nコード】

N7242M

### 【作者名】

風鳴刹影

### 【あらすじ】

不幸かどうか知らないが“某ハチャメチャ魔法学園のゴスロリ天使によく似た”自称・天使様によって転生させられたオリ主。彼女はゼロの使い魔のハルケギニア、トリステインがヴァリエール公爵家、史実では存在しないルイズの双子の妹として生を受けます。

そして、ハルケギニアの死亡フラグ満載な歴史をルイズと一緒に歩いて逝っちゃいます・・・。

不定期連載です

## 楽しく転生01（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公は現代日本からの転生者で、テンプレのごとく特殊能力やアイテムを手に入れます。他のSSと比べるとそこそこなチート力・・・のはず。

## 楽しく転生01

気がついたら、俺は いや、私は新しい人生をこの世界で歩き始めていた。

私は就職確定率100%を蹴り、大学に進学した。  
物を作るのが好きで、もつと学生と言う自由の聞く立場で行動したかった。ただそれだけだった……。

ケチが付き始めたのは、恐らくこの選択をした時から…… そう思いたい。

大学に進学して直ぐに世界恐慌が席卷し、手の平を返したような就職氷河期の到来……。留年できないからと、何とか大学を卒業したまではよかった。だが就職はできず、周りからは春先からニートの仲間入りだと言われた。ニートか。

だから、何とか就職できないかとハローワークに通う毎日だった。そう、そう言う日々だったはずなんだ……。

『新しい可能性を見て見たくない？』

それが聞こえた時、世界が……代わった。

\*

「おお！ カリーヌ、よくやったぞー！！

元気な女の子だ！ それも二人だ！」

金髪のいかにも（悪い意味ではない）貴族だという格好をした男が私を覗きこんできた。そんなに顔を近づけないでくれと手を伸ばすが…… あれ？ なんでこんなに手が小さいんだ？

「ええ、アナタ。」

……でも、四人とも女の子と言うのは少し残念ですね。

今回、男の子が生まれれば……」

「なにを言っているんだいカー！又。」

君はこんなにも頑張ってくれて、二人も可愛い女の子を産んでくれたじゃないか？

それにほら、君がそんな事を言うからこの娘達が泣いてしまったじゃないか」

「ふふ、そうね……。」

なら、この娘達をリッパに育てて、最高の旦那様に巡り合える様にしましょう」

「うんうん……。」

そうだ、この娘達の名前は何とかしようかカー！又？」

「そうですね……ふふ、女の子なら私が、男の子ならアナタが名前を付ける取り決めでしたね？」

「ああ、だが……。」

「分かっていますよ。」

さすがに、二人も生まれてくるなんて思ってもいませんでしたから……そちらの娘の方の名前を付けてくだらないかしら？

その娘に合ったよい名前を付けてくださいね？

アナタは、どこかネーミングセンスが悪くて……」

そんな会話をする二人に、優しく“母”の胸元で抱かれている私達、

『これは一体……なんだ？』

先ほどから声を発しても『アヴー』だとか『ダアダア』と言ったような声にしかない。いや、そもそも私は180センチはある長身で、不摂生のせいで体重も少しレッドラインに指しかかっている程だったはずだ。では、いま自分が置かれている状況はいつたいなんなんだ？

ガチャ。

「「お母様！」」

ドアの開けられる音と共に現れたのは、長い金髪に目筋と雰囲気が少しキツイ女の人と、これまた長いピンク色の髪に優しそうな雰囲気を携えた女の人だった。

「カトレア、起きて大丈夫なのか？」

それにエレオノール、今日はアナタ、家庭教師の先生と御勉強をしているはずじゃ……」

「はい、今日は新しい家族が増えるからなのか朝からすこぶる調子がいいんですよ母様、それにお父様」

「なんだか体調が悪そうだな……本当に大丈夫か？」

「きよ、今日の授業は先生が急遽全部自習と言って……帰ってしまったわれました」

「……はい分かります。急遽自習にしちゃったんですね？ アナタが、

「それで、赤ちゃんは……二人！？」

「こらお前達、そんなに騒いだら母さんの身体に障るかも知れないぞ？」

「ふふ、すみませんお父様。

でも、二人も家族が増えたんですね。

こっちの娘はお母様や私に似てピンク色、目元とかお母様によく似るかもしれませんね？」

「ふ〜ん（プニプニ……カプー）って、噛んだ！ この娘、私の指を噛んだわよ！？」

「ふふふ、それはエレオノールお姉さまの指をお母さんのオッパイと勘違いしたんですよ」

「ああ、そうなの？ って、吸わないでよ〜なにも出ないから」

「それで、こっちの娘は……あ」

「どうしたんだいカトレア？」

「いえ、この娘の髪や肌、それに眼が……前に医療について載ってた本で見たアルビノと言うのによく似ていて……」

「ああ、それは私も気にしていた事だが……」

「……お母様よろしいでしょうか？」

そう言ってカトレアが、私を抱き上げる。そして、静かに目を閉じると……ユックリと暖かいナニかが私の仲に入ってくる気がした。「……大丈夫。この娘は、私なんかよりもずっと、ずっと強く生きてくれます」

よくは分らないが……ん？ あそこにあるのは姿見って言われている大きな鏡だな。そして、その鏡に写っているのは、たぶんこの人だな。なら……その両手に抱きかかえられているアレはなんなんだ？

『それは、君だよ？』

突然、その声が頭の中に響くと、次の瞬間には世界がネガ反転し、誰一人として動かなくなってしまった。

いや、

『新しい始まり、おめでとうございます\*\*\*さん』

ソコだけが、私達を写していた姿見の向こう側だけが、普通の色合いを保ったまま……だが、まったく別の誰かを写していた。……

…なんか、某魔法使い達の学び舎に出てきたゴスロリ黒天使にとてもよく似ている気がする（アレは翼まで黒かったか？）が、気のせいだろう。

『アナタは？』

『ん……詳しい説明をスツカリゴツチャリドツチャリと省いちゃいますが『まで！』、アナタは不幸にもこの私の手によって死んでしまったのですチャンチャン『おい！』……なんですか？』

『いや、訳が分からない』

『ああ、いきなりの事に混乱しているのですね？』

まあたしかにガソリンを満載したトレーラーでひき殺された挙句、

積載していたガソリンが引火してドカン！　だもんね。普通はなにが起こったか分からないのは当然か。

……いえね、ただ単にアナタの死んでしまった事を無かった事にして蘇らせても、何の面白みも無いでしょ？　だから、出血大サービスでアナタを元の世界とは違う、異世界に転生させてあげました。ワッイ、パチパチパチ……」

『……』  
『もう、そんなに白い目で見ないでくださいよ。あ、私の事は天使様と呼びなさい！』

でね、ただ単に転生させただけで後はシランプリってのは悪いと思って、いくつかですが特殊な能力をアナタに付与させてもらいました。どんな能力かは……これからの楽しみとして起きましよう。それに、どのような力が手に入ったのかはすぐに理解できるでしょうし詳しい説明は省きますね。

外見は私の趣味のかな？　性別？　ああ、ムサツ苦しかったから女の子に変えといたよ？　え、何で　タナリにしなかったって？　ふふふ、それは後のお楽しみ　』

『いや、聞いてない』

『あ、そうそう、アナタ個人の寿命とかに関しては気にしないでいいよ。何万年だって生きられるからね』

『いや、あの』

『アナタが転生した世界は“ゼロの使い魔”でお馴染みのハルケギニア、その可能性の一つです。』

分かりやすく言うと、アナタの持っていたTRPG、アルシャー・ドガイアとかで説明されているリーフワールド。本来の“枝”となる世界に付随する“葉”の世界です。

……と、もう時間がありませんね。

それじゃ、私のためにこの可能性をかき乱してくださいね　G

o o d l u c k ! S e e y o u a g a i n ! ! 』

『ちよ、ちよっとま……』



そう言つと、自称“天使様”は鏡の中から消え……世界が元の姿を取り戻した。

「そうだお母様、この娘はなんて名前になさるのですか？」

「そうそう、こっちの娘も、どんな名前にするんですか？」

ピンク色の髪のお姉さまと金色の髪のお姉さまが“母”に私達の名前を聞いている。

……はて、そう言えば先ほどから聞き覚えのある名前を言い合っているみたいなんだが、

「そうですね、こちらのピンク色の髪の娘は……ルイズ、ルイズ・フランソワーズとします」

……さっきの“自称天使様”の話しがホントなら、“ゼロの使い魔”で“ルイズ”ってのは、まさか！？ いや、そんなはず……コレもあの“天使様”の仕業なのか？

「それでアナタ、その娘にはどんな名前を着けてくださるのかしら？」

まあいいか、物語の主人公と姉妹でも……。それよりも名前だ。ヘンテコな名前を付けてくれたら、思いっきり抗議するぞ！？

「うむ……もうちょっと待ってくれ。」

いま、いい名前が……アルヴァスは男の子っぽいし……カナリアは鳥だな……うむ」

本当に大丈夫か？？ カトレア姉さまやエレオノール姉さま、それにカリーヌ母さんも心配そうだ。

「そうだ、ルーティア……それと、ルシエル……ルーティア・ルシエルというのはどうだろうかカリーヌ？」

「……はあ、アナタにしてはまだまともな名前ですね。」

後は、その娘が気に入るかですが……問題は無いようですね？」

「おお、ルーティア、気に入ってくれたか？」

うんうん、なんていい子なんだ」

まあまあいい名前だぞ、お父様？

……そう言う事で私、ルーティア・ルシエルは、本来の歴史では存在しないはずのヴァリエール公爵家の第四女として、私は二度目の生を歩く事になったのだった（チャンチャン）。

……私、大丈夫か？

## 楽しく転生01（後書き）

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生02（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公は現代日本からの転生者で、テンプレのごとく特殊能力やアイテムを手に入れます。他のSSと比べるとそこそこなチート力……のはず。

## 楽しく転生02

さて……自称“天使様”のおかげで、私は赤ん坊に成ってしまったわけなのだが、

『なんにも、できない……』

そう、とにかく最初の2〜3ヶ月程度は何もできない。

なにせ私たちは、未だ十分に首が座っていない赤子。だから自由にハイハイもできない。

まあ、それはしかたない。とにかく動ける様になるまで我慢だ。

「ルーティアお嬢様は、よくお飲みになりますね〜」

うむ、腹が減っては戦は出来ん。カリ〜又母さんからもオッパイを貰っているが、ルイズの面倒や貴族としての仕事も有るみたいで、乳母役のメイドさん（もと貴族らしい）からご飯を貰っている。

って、痛い！ ルイズ、割り込んでこないで。アナタにはそっちのオッパイがあるでしょ！？

「あらあら、お二人ともケンカしちゃだめですよ〜」

とまあ、そんな感じで過ごしていた。後は寝るだけ。赤ん坊の仕事は寝ることだからな。

もつとも、私はただ寝ていた訳ではない。

自称“天使様”の与えてくれた特殊能力の一つ、自分が寝ている間だけやって来る事のできるとのできる場所“夢幻書庫”だ。

某魔法少女に登場した無限書庫と名前が似ているが、それとは違うぞ？

この書庫には様々な本が収納されている。使えるかどうかは分からないが各種科学、政治、経済に関する書籍のコーナー。様々なマンガやラノベ（私好みの物ばかり）のコーナー。さらに『この先R18指定だよ』なんて書かれて扉の向こうには……う〜む、コレはまた（ニヤリ）。

この書庫で、私は有意義な時間を過ごしている。なにしろココは

無重力感覚で移動ができ、好きな本を読むことができる。さらに本だけではなくアニメのDVDなんかもある為、かなりいい環境だ。パソコンとDVDデッキはどこかなあ？

#### 閑話休題。

ちなみに“ゼロの使い魔”の原作もある。ただし、18巻までだ。この書庫の性質、蔵書物は2010年4月までの発行物までしかなく。今後数年は更新されない。ただし、私が読んだハルケギニアの本は、新しく蔵書される。以上がこの“夢幻書庫”仕様らしい（注意書きがあった）。

それから数日が経ち……、やっとハイハイが出来る様になった。

コレで行動範囲が広がるZE！！

「ルーティアお嬢様は、もうハイハイが出来る様になったんですね」

「ええ、ルーティアが出来たんです。ルイズもすぐにハイハイ出来る様になりますよね」

お世話係のメイドとカリィ又母さん、それとルイズが戯れているが、私はそんな事は……羨ましいけど、今は一刻も早く私の行動範囲を広げることに専念するんだ！

って、お母様！ ボールを投げないで！ つい条件反射で飛びついちゃうじゃないか！ ああ、メイドさんそんなオモチャで私の気を引こうとしないでください！

#### 閑話休載

まったく……そうそう、ルイズはまだハイハイできないし年相応（？）な感じだ。なので私はひたすらハイハイをして足腰のトレーニング。たまに壁などのつかかりに捕まって？まり立ちにも挑戦するが……むむむ、まだ無理か。

「ルーティアお嬢様、頑張ってください！」

うん、まだなただけだ。もう一度……。

まあ、結果だけ言うるとルイズがハイハイを始めて頃にはもう自力で歩ける様になりました。

周りからは「ルーティアお嬢様は、育つのが早いんですね」なんて言われたりもした。

「ルイズ、こつちこつち」

そうそう、私が最初に発音できた言葉は「ルイズ」です。次に自分の名前、母とお父さん……。まだ上手くしゃべれないルイズと比べるとあまりにも発育が良過ぎるが、すぐにルイズも追いつくだろう。だって、

「キャツキヤ、ジュー」

うん、ルーて呼んでるんだね。ルイズは必死にハイハイして私に近寄って来る。さらに私に？まって膝立ちまで出来るように……。つて立ち上がったちゃった。

「る、ルイズお嬢様も!？」

えーと、とりあえず引つ張ってみる。そのままルイズはついてくる。もつと引つ張って見る……。そんな事をしていたら、とうとうルイズは一人で歩き出してしまった。

……。私の苦勞を返せ!

「お、奥様。お嬢様方はとても発育が良いようで……。もう御二人とも歩いちゃってああ（ボタン）」

「ああ、ルイズにルーティア。

二人とも偉いわね」。

そのメイド、この倒れたメイドを部屋に連れて行って、代わりのメイドを呼んできなさい」

「は、はい!」

うーん、頭をそんなに撫でないでください。キャツキヤと笑っているルイズはとっても幸せそうだな……。……。

でも、メイドさんにはもっと優しくしてあげてよね、お母様?

そんなこんなで二人とも歩ける様になり、たどたどしくだがしゃべれる様になった。その為、教育係のメイドや母さんにお父様、それと体調がよい時にはカトレア御姉さまにエレオノール姉さまが、言葉を教えようと躍起になってくる。

「あれ？ ルーティアちゃん、なにを見ているのかなあ？」

「ん」

ベランダから外を見ていた私に、カトレア御姉さまが何を見ていたのか聞いてきた。私は指を刺して見ていたものを答える。

「ああ、鳥さんですね」。

ルーティアは、鳥さんが好きなんですね」

うーん、ちよつと違うんですカトレアお姉さま。

私は首を横に振ると、また大空を自由に飛ぶ鳥を見つめた。

私は、飛びたいのだ。魔法使いに生まれた私は、この先四大系統の内のどれかの魔法が使える様になるだろう。でも、どんな魔法よりも私は“フライ”が使いたい。

「ルーティア！？ 危ないわ！」

つとと、いけない。いつの間にかベランダをよじ登って、飛んできる鳥に手を伸ばしていたみたいだ。

「もう、そんなに手を伸ばしても、鳥さんはやってきませんよ」  
うーん、手を伸ばしたかったですゴメンナサイ。

それにしても、私の能力ってアレだけなのかなあ……？ プラスアニマ（獣魂付加）とかあったら、クローミみたいに翼が欲しいなあ。

「さあ、ルーティアちゃん。部屋の中で遊びましょうね」

むう、この部屋の中だけじゃツマラナイんだよ！

「きゃ！？」

私はカトレア姉さまの手を振り解くと、他のメイドやエレオノール、それにルイズには目もくれずに扉のノブに飛びつく。

ガチャ。

そして、一目散で部屋から出て行った。

「つ、捕まえてー！ 誰か、ルーティアお嬢様を捕まえてー！！」



後ろからそんな声が聞こえるが、私のログには何も残ってはいない！

ひたすら赤ん坊の歩みで遁走する。後ろからメイドさん達が追いかけて来る。

逃げるー！　って、歩く幅が決定的に違うから追いつかれてしまっじゃないか！　な、なにか手は！？

キューピーン！

メイドさんに捕まる。そう思ったその時、私の未だ秘められていた能力が開花した。

み、見える！　私にも、見えるぞ！

っていや、ニュータイプ化じゃないよ？　擬音が似ているかもしれないけど、違うからね？

「捕まえ……あ、待って！」

私は、開花した能力を利用して咄嗟に左に飛んで、メイドさんの手から逃れた。次は右、その次は屈んで、後ろから挟み込んできたメイドさんはそのままゴツンコさせる。

「イッターイ！？」

「ほら、早く追いかけないと見失うよ！？」

「私は、こつちから回りこむね！」

「分かった！」

うん、そつちから……そう来るか。周りの状況が手に取る様に分かる。

「さ、お嬢様もう逃げられ……はれええ！？」

「わ、私を踏み台に！？（ガク）」

前後で挟み撃ちされそうになるも、足が纏れた振りをして、後ろから来るメイドさんの手をターンで回避。そのまま前のメイドさんに突っ込んで行ってもらいながら、このメイドさんを踏み台にして立ち上がるメイドさんを飛び越した。と、それに巻き込まれた他のメイドさん達がクラッシュ事故を起こし始めている。

「ゴメンニヤシャーイ！」

とりあえず謝っておく。

結局、私とメイドさん達との追いかっこは、待ち伏せしていたカリィヌお母様の『レビテーション』五連撃を回避できずに捕まる事で一応の終わりを見せた。私が空中でジタバタするが逃げ出せず、そのままお母様にカルーク、本当に軽く叱られただけで終わった。

……ちなみに、

「……っ、捕まえてー！ 誰か、ルーティアお嬢様とルイズお嬢様を捕まえてー！！」

その終日後、私の遁走劇にルイズが加わり。ラ・ヴァリエール邸はメイドさん達の姦しさで終始賑やかだったとか……………。

「キヤー！？ ルーティアお嬢様、階段から飛び降りてはダメですー！！」

「ルイズお嬢様、確保しましたー！！」  
御後がよろしいようで。

## 楽しく転生02（後書き）

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

### 楽しく転生03（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

### 楽しく転生03

「はいルーティアちゃん、今日は大人しくしましょうね」

「うう……分かりましたカトレアお姉ちゃま」

仕方ない、カトレアお姉さまに抱きつかれて動けません。病弱なお姉さまを振りほどいてまで逃げたりしませんよ。

「ルー、ルー、あしよぼーおいきやつこしよ」

「ダメですよルイズお嬢様。また屋敷の中で追いかけてこんなてしたら、奥様になんて言われるか……」

「ふふふ、ごめんなさいね。」

まさか、ルーティアちゃんがこんなにも元気に駆け回るなんて思わなくて……ちよつとうらやましいかな」

大丈夫ですよカトレアお姉さま。私が新たに目覚めた能力“蒼き第三の眼”<sup>サード・アイ</sup>の力で治してあげます。

“蒼き第三の眼”の力は、気や魔力の流れを感知し、さらにそれらを利用する能力だ。簡単に言うとザ・サードの火乃香のサード・アイの様に“気”の流れ（魔力とかも）を見る事ができ、その流れを操っちゃったり出来るのだ。ただし、私の額にサード・アイ（第三の眼）は象眼されていない。

メイドさん達とおつかいっこも、この力のお陰でどの方向からメイドさんたちが仕掛けてくるのが分かったのだ。さらに小太郎がネギに教えていた瞬動の真似をして、回避の速度を一瞬だけだが加速させている。もうちよつと訓練を積みば虚空瞬動も出来るかもしれないな……。さすがにカリーヌ母さんの『レビティション』五連撃は、見えたけど避け切れなかったんだけどね。

#### 閑話休題

現在、カトレアお姉さまに抱かれながらお姉さまの中のスキャン中。むむむ、なんだお姉さまの中……気の流れがこんがらがる？ それにあっちこっちにシコリが出来てるし……。

「で、こうして悪い魔女は旅の神官さんに退治され、町に平和が訪れてのでした」

「ふ〜みゆ〜……」

そうそう、ただ抱かれているわけじゃなくてカトレアお姉さまが本を読んでくれている。

しかし……お姉さまの読み方は美味い。でも、絵本の内容があまりよろしくない。王道を付いているんだけど、いまいちな内容だな。もうちょつと裏事情とか、魔女が何でこんな事をしなきゃいけないかったのか……って、赤ちゃん向けの絵本にそんな事を求めるほうが変でした。すいません。

「カトレアお姉さま」

「？ なにかしらルーティア？」

「魔女さんには、悪い魔女さんしかいないんですか？」

一方的な悪者、子供向けの物語で絶対悪を演じてくれるキャラ達だが、そちら側に属していながら物語の主役として扱われている物語はないのかな？

「え？ ……ん〜、良い魔女さんは、お姉さん見た事ないな〜」

「そうなんですか？ ……じゃ、なんで魔女さんたちは箒に乗って空を飛んでいるんですか？」

「え、え〜と、魔女さんは、皆箒で飛ぶのが風習だからかしら？」

ほら、私たち貴族は、伝統でマントを着るわね？ それと一緒になのよ、きつと」

「ふ〜ん、そうなんですか〜」

ちなみに私たちは現在生後1年過ぎ位……普通に会話できるレベルにまでなってるって、ちょっと発育がよすぎるかもなあ。

「じゃあカトレアお姉さま、私も箒に跨ればお空を飛べるのですか？」

「え？ う〜んどうかな〜」

「え〜」

「え〜じゃないわよちびルー？」

誉れ高きトリステインの貴族、それも公爵家である私たちが、何が悲しくて卑しくて卑屈で邪悪な魔女の真似事なんかしなくちゃいけないのかしら!？」

「いふあい、いふあいです」

「ほら、ちびルイズも」

「ぴぎー!」

エレオノール姉さまが乱入してきて二人してホッペを摘まれる。うゝむ、油断した。

\*

「で、ルーティア。何か言う事はないかしら？」

「はい、箒に跨ってもお空を飛べませんでした」

「こ、この、おばかー!」

「いちゃゝい」

いや、もしかしたら飛べるんじゃないかって思って（そう言う能力があるかもしれないじゃないか）、箒に跨って屋敷の三階のベランダから飛び降りて見ました。一応命綱を腰につけて飛び降りたよ? 「感謝しなさいよ? アンタもしかしたら痛いなんて感じられなくなっただけじゃないんだからね」

「うゝ、ごめんなしやい」

「……ルーティアちゃんは、なんでこんな事したのかな?」

カトレアお姉さまがやさしく覗き込んでくる。うゝそんなやさしい眼を向けないでください。全部言いたくなっちゃうじゃないですか、

「……お空を飛びたかったから、です」

「そっか、でも、もうこんな無茶なことはしないでね?」

「……はいです」

確かに、心配をかけたらダメだよ。

……でも、あの時、空に飛び出した時に、何かを感じた気がするんだ。

「ん、あれは何だったのかな」

夜になり、暗くなった自分たち（ルイズと私だ）の眠る部屋で、どうしてもあの時の感覚が忘れられずにベッドの中で悶々としていた。ルイズはグーグー寝てるね。寝顔が可愛いよ。

「……やっぱり、私の周りに何かある」

そう、違和感があるのだ。私の周りに、私と私以外を隔絶するような何かがある気がする。

……うん、試して見るか。

ベッドの上に転がっていた玩具を手にとると、それをそこに押し込んだ。

フッ……。

すると、空間に波紋を残して今まで手に持っていた玩具が消えてしまった。

「……“<sup>カグヤ</sup>月衣”？」

“<sup>カグヤ</sup>月衣”、夜闇の魔法使い（ナイトウィザード）たちが身に纏う、超常にして非常識の摂理。そして、彼らを守る結果。

「なるほど……なかなか良い能力ですね」

少なくとも手品には使えるだろう。

つと、いかんいかん。玩具を入れっぱなしはいけないな。カグヤの中に手をつ込み玩具を……、

「あれ？」

こんなブレスレットしてたっけ？ いつの間にか自分の左手首に七つの宝石が嵌められた白いブレスレットが着けられていた。

「って、もしかしてコレって……“アイン・ソフ・オウル”？」



### 楽しく転生03（後書き）

オリ主の能力は微妙だったが、チートなアイテムを渡して見ました。でも、私は後悔してません！

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれませんが。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生04（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

主人公無双も悪くありませんが、その強さに見合う相手がないとお話が盛り上がらないので全体的に強化補正をかけてみます。

## 楽しく転生04

お、起こったことをありのまま話すZE。

私は、ベッドの上で新しく目覚めた能力“カグヤ”の発動を確認した。

それで、カグヤの中に入れた玩具を取り出したら、“七徳の宝玉”が嵌った“アイン・ソフ・オウル”が出て来ちゃいました……。

えーと、私が“アイン・ソフ・オウル”を持つてるって事は……私はシャイマールの転生体？ い、いやいや、何かの間違いだろう？ ……でも、この腕に嵌っているブレスレットは、

「アイン・ソフ・オウル、展開……」

私がそう言うと、ブレスレットだったアイン・ソフ・オウルがバラバラになり、私の周囲に七つの白い羽が広がる。

「本物……ですね？」

それぞれの羽に嵌っている宝玉は、“慈愛”に“賢明”、“剛毅”に“信頼”、“節制”に“正義”、そして“希望”。人間の七つの美徳を表し、それぞれがその名に相応しい力を司っている宝玉……だったはず。

「こ、これはこれで、ものすごくチートな力です」

実質的に自分がチートなバグキャラになるのは分かっていたが、魔王の力ですか……。まあ、詳しい能力の解析は明日にしましょう。

「夜更かしは、お肌の天敵ですう……ぐう」

\*

で、次の日の朝、朝食を済ませるとそのまま遁走。瞬動（未完成）を使って追いかけてくるメイドさん達を一気に引き離す。

「る、ルーティアお嬢様!？」

さらにメイドさん達から見えない場所に移動すると、“信頼の宝玉”の効果、はつつど〜!

“信頼の宝玉”の力は、要約して説明すると認識への干渉だ。そこに在るモノを無い様に、または存在すらしていないモノをあたかもそこに在るように認識させる。この能力を発動させる事で『私はココには居ませんよ〜』って周囲に認識させている。メイドさんから見たら光学迷彩で見えなくなった上にどれだけ足音を立てても気づかれる事はないのだ。まさにMGS!（笑）。

「ルーティアお嬢様を探して! 屋敷をひっくり返しても良いから!」

「ああ! 奥様にこの事が知られたら……」

「取り乱している暇があつたら、さつさと探さない!」

え〜と、ごめんなさい。後でちゃんとフォローしないとね〜。

とりあえず、人目の無い……屋上がいいかな? もともと砦としての機能も兼ね備えていた屋敷なので弓兵用の広い回廊や、そこそこの広さを持つ広場のような場所もある。

「……ココが、ちょうどいいですね」

今は衛兵も居ないようだ。でも、念には念を入れて、“信頼の宝玉”の効果範囲を拡大……あれ? こんな事もできるの?

「う〜ん、試して見る価値はありましょね」

その辺に在る適当な物、この樽でいいか。コレをコアに設定して

「“条理を隔絶せしは紅き月”」

機動キーワードを詠唱。次の瞬間、世界は紅く染まった。

「<sup>ゲッコウ</sup>月匣”ですかあ……本当に魔王」

『正確には違うんだけどね』

！

『そこ、MGSな擬音を出さない』

ああ“某魔法学園のゴスロリ黒天使似の自称天使様”だ。

『そう言う言い方だと某から名前みたいじゃない。』

まあ、あなたはシャイマールじゃないからね？

でも、ファージ・アースに行くと、アナタは魔王としても認識されるから気をつけてね』

「なるほど……で、アナタはそれだけを言いにココに？」

『いや、このままルーティアが成長していくと、あんまりにチートすぎてツマラナイから……。』

だから、ちよつと世界修正をかけてハードルを高めました〜パチパチ』

「“正義の宝ぎよ……”！」

『わゝ、待った待った！』

アイン・ソフ・オウルの構えを解く、

「ふじやけた事を言わないでください。

私に迷惑をかけるのは、いつこうにかまいましえんが……いえ、本当はそんな事されたらたまりませんが……」

『ああゝ、いや、このまま君がチートすぎるとね、この世界が耐えられなくなくなりそうなんだ。』

まあ、世界全体が原作よりも強い感じに……まあ“世界丸ごと強くてニューゲーム”みたいな感じになるから、それでバランスを取るんだ』

とんでもない事をサラツと言ってくれちゃうね〜。

「つまり、原作よりも悲惨な事になると？」

『んゝそれはルーティアしだいかな？ 世界は在るべき姿へと成ろうとするからね。』

全力で、この世界に挑戦しなよ？　じゃないと……一生後悔する事になるかもだから。

それじゃ、バイバイ』

手を振りながら霞のように消えていく“天使様”。後悔しない様に一生懸命……か、

「上等です。　やってやろうじゃないですか！」

そうと決まれば、まずやるべき事は……自身を鍛える事、そして原作介入を行って戦争を回避、または被害を最小限にする事だ。　　つと、もうすぐお昼だ。メイドさん達が心配するだろうから戻らないと……。

で、お昼を食べ終えたら、今度は屋敷中のメイドさんによる包囲網で囲まれて抜け出せない。さらにカトレアお姉さまと「私をおいていったああ」とぐずるルイズに捕まって、身動きも出来ない。

む……、まあいいか。

“賢明の宝玉”の力と“慈愛の宝玉”の力を使い、カトレアお姉さまの体の中の不適格な流れの修正と回復を行いましょう。いきなり回復すると体とか、いろいろと負担をかけそうだからユツクリジツクリと……。

## 楽しく転生04（後書き）

アイン・ソフ・オウル、絶対にチートアイテムです。

能力はアニメ・小説が混ざってたりします。

ただ、UP主はNWのルールブックを持っていません。ですので、  
ファージ・アースの魔法は使いません。 or z

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生05（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。



## 楽しく転生05

さて、あれから数週間が経った。

毎日エレオノールお姉さまにホッペを抓られたり（ルイズはものすつこく嫌がついていたが）、カトレアお姉さまに抱きかかえられながら“慈愛の宝玉”を行使したりしている。

たまにメイドさん達との追いかけてこをして、カリィ又お母様とお父様に怒られたり……まあそんな感じでけっこう平和に過ごしている。

そうそう、能力<sup>チート</sup>に気を取られていたが……私ってハルケギニアのメイジ熟成国家（？）のトリステインの公爵家に生まれたんだよね。

まあ、ぶっちゃけて魔法使いの卵なんだよ。だから、

「もう、ダメよ？ ルーティアちゃん、杖は玩具じゃないんだから」カトレアお姉さまの杖を握っています。魔法仕えないかなあ……。

「カトレアお姉さま、魔法がでましえん」

「あら、ルーティアちゃんは魔法が使いたいの？」

「はいです」

「ん〜でも、まだルーティアちゃんやルイズちゃんは、杖を持つにはまだちょっと早いかな」

「む〜〜！」

ダダをこねて見ます。赤ん坊や子供だけの特権です！

\*

Another side

「ルーティアが魔法を？」

「はい、お母様。ルーティアちゃんが魔法を使いたいって、私やエレオノールお姉さまの杖を振り回しちゃうんですよ」

「まったく、メイジの杖は玩具ではないというのに……」

「まあまあ、ルーティアは魔法が使いたい。だけど、ルーティアは自分の杖がないから二人の杖を使おうとしているだけじゃないか」

「お父様！ メイジにとって杖は誇りです。ルイズなんてルーティアの真似をして私の杖を後ちよつとで折りそうに……」

「まあまあエレオノール、落ち着きなさい。」

ルイズまだまだだが、ルーティアは成長が驚くほど早い。もう私たちと普通に話したり、簡単な字なら一人で読んで……最近は色々な本を与えておけば屋敷の中を走り回る事もなくなった。

魔法に対する関心も、お前たちは5歳くらいか？ それくらいから持ち始めたのに、ルーティアは“空を飛ぶたい”からと箒に跨って飛び出すくらいだ……」

「それは、私も聞いた時、目の前が真っ暗になりましたわ……」

「ああ、それで相談なんだがカリィヌ。ちよつと早いかもしれないが、ルーティアに家庭教師をつけようと思うんだ」

「それは、一向にかまいませんが……それならば私が直々に」

「ああ、カリィヌ、ルーティアは馬車を使つての外出以外は、この屋敷にいる使用人とししか会っていないな？」

私としては、色々な人とも会った方がいいと思うんだ。うん、それがいい」

「……まあいいでしょう。そろそろ貴族としての嗜みを教えるべきだと思っていました。」

ですが……」

「杖の契約か？ さすがにあの歳で魔法を使つたら、精神力が不足してどんな事になるか分からないから、それはさせないさ」

\*

次の週、私はお父様に家庭教師の先生を紹介された。

遊びたい盛りの赤ちゃんに早くも家庭教師ですか、お父様？

「ルーティア、今日からお前の家庭教師をすることになったミス・アリシエルだ」

「キティ・ド・アリシエルです。ルーティアお嬢様」

「ルーティアです。よろしくお願いしますです」

一応挨拶はしないとね。挨拶は基本だって言うし。

家庭教師のキティ先生は、後ろで二つに束ねた銀色の髪を揺らしながら私と視線ありを合わせてきた。けっこう幼い顔立ち、ってか童顔な先生だな。いったい幾つなんだろ？

「こらこら、そんなに不満そうな顔をしないでおくれルーティア。

それではミス・アリシエル、後は任せたよ」

「はい、ヴァリエール公爵」

その後、お父様が将来私のために用意してくれていた部屋でお勉強、

「アリシエル先生、これでいいですか？」

「う、うん……正解です。ルーティアお嬢様」

数えて2歳の赤ん坊が解くには難しい数式の問題に、語学のテストを解いている。

最初は恐ろしく簡単な足し算に文字の書き取りだったが……さすがに一応前世で大学を卒業した事のある（成績的にギリギリだが）

赤ん坊相手には分が悪かった。

「公爵様、私は何を教えばいいのでしょうか？」

あゝさすがに遣り過ぎたか？ 途方にくれているアリシエル先生は余りにも不憫だ。

「アリシエル先生、コレよりも魔法を教えてください」

「そ、それはダメです！ 公爵様に教えてはダメだと……あ」

「……そうですか、お父様が……酷いです」

教えてくれてもいいじゃないか、ケチンボ！

「ああ、えっと……杖を使って実際に魔法を使わない、座学としての魔法なら教えられますから！ ですから、先ほどの事は公爵様に内緒にしてくださいお嬢様！」

ふむ、勉強は出来るけど魔法は使わせないか、

「それは、なぜですか？」

「……公爵様は、まだ幼いお嬢様が魔法を使うと、精神力がなくなつて倒れてしまうのを心配して……」

「なるほど、だからですか。それじゃ、先生は杖の契約方法を教えられるせんね」

「はい、そうなりますお嬢様……」

「じゃあ、私が質問した事に首を振るのは……」

「私が教えた事がばれたら、明日から住む場所がなくなりますお嬢様ああ！」

うゝん、どうやらこのキティ・ド・アリシエル先生。貧乏貴族の出で領地もなく（もうほとんど平民状態）、なんとかこの仕事を成功させないと弟さんと自分の住む場所とご飯が食べられなくなるのか……。

「分かりました。アリシエル先生のために座学で我慢します……」

「わかつて頂けましたかお嬢様？」

なるほどね、なら今は座学で我慢するか……。

教えてもらえないなら仕方がない。自分で見つけ出します。

それなら全然問題はないですよね？

私は、こっそりとエレオノールお姉さま持っているの本の中から初等魔法教育の本等を幾つかを失敬する事にした。

そして、意外にも早く杖の契約方法を見つける事ができたのだった。

「ふむ……つまり、杖としての触媒はある程度の魔力が宿ったモノ……霊木の類で作られた杖がポピュラーなわけですか」。

それで、杖に刻まれている魔力の波長を術者本人の波長と合わせる作業を“杖との契約”と呼んでいるのですか……」

なるほどなるほど……つまり、ある程度のモノなら発動媒体としての役割を担えると、

「なら、このアイン・ソフ・オウルも一応は発動媒体として使えますね」

なんせ、これも一応はウィザードの筈だからね。とりあえず簡単なコモン・マジックを使って、馴染ませる作業からですね」。

## 楽しく転生05（後書き）

杖に関してのうんぬんはオリ設定です。

元ネタが判らないと言う指摘がございましたので、今回から作中の能力やアイテム等の紹介をしていきます。

先ず最初にアイテム、アイン・ソフ・オウル（以下000）の紹介です。

このアイテムの元ネタは、F E A R 製 T R P G 『ナイトウィザード』のアニメで、ヒロインの一人、志宝エリスが使用する魔法の筈です。

普段の000の形状は、六角形のプレートを7つ繋げたブレスレットです。戦闘時は分離、巨大化、ファンネルのように飛ばして相手にぶついたり、合体させて巨大な盾にしたり、乗って空を飛んでみたりと……色々と役に立ちます。

これだけ聞くとぜんぜんチートじゃないように思えます。が、000に嵌っている慈愛、賢明、剛毅、信頼、節制、正義、希望の七つの宝玉、通称『七徳の宝玉』が000をチート化させます。

七徳の宝玉の能力について、まずこの二つから簡単に説明。

慈愛の宝玉、防御と癒しの能力を持っています。アニメでは、エリスの頭痛を直したりしています。このSSでの使いい方はもう殆ど決まっていますが……。

信頼の宝玉、認識へ干渉できる能力をもっています。アニメでは、島一つの存在を完全に世界から消し去ってしまいました（ただし、ウィザードには認知されていた）。

ちなみに、000と宝玉の能力に関してはアニメと小説『柊蓮司

と宝玉の少女』を混ぜて使用します。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生06（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。



## 楽しく転生06

貴族が習うべき事は沢山在ります。

語学や数学は基より、領地を治めるために必要な帝王学や経済学

……そして、魔法。

「こ、公爵様あゝ私はルーティアお嬢様に何を教えればいいのでしようか？」

弱弱しい声を上げて床に手を付くアリシエル先生。いやゝさすがに夢幻書庫にある数百年も先を行く現代地球の知識と、“賢明の宝玉”の力でブースとされた私のインテリジェンス（INT）は、さすがにこのハルケギニアではチート（反則）すぎますねゝ分かります。

「せ、先生の教え方がうま……」

「私、何も教えてましえん……」

「あうう……」

まあ、ぶっちゃけて先生の出す問題やら何やらをほとんど教えてもらってないのに、スラスラ解いちやったのは不味かったかな？

テーブルマナーやダンスなどの実技も教えてくれてけど……最初はちよつと四苦八苦したが、それも今は難なくこなせている。編み物や刺繍、果ては料理まで教えてもらったが……学習能力が異常です。こんな子供が複雑な模様の入ったセータを編み上げ、繕い物も刺繍でかなり複雑な絵やレース網が入られるようになった。

そして料理も、

「ははは、このケーキおいしいですねお嬢様？」

「そうですねゝ砂糖をふんだんに使うのが、リッチな感じがしましゅねゝ」

ケーキまで焼けるようになっていた。

包丁捌きも危なげなく、コック長から「お嬢様、いったいどこで包丁の使い方を習われてのですか？」と、魚を三枚に下ろす私を見

て自分の目を疑っていた。

\*

さて、アリシエル先生……自信を喪失してたみたいだけど、先日  
からルイズの家庭教師を任されたようです。

「やっつと、やっつと教えがいのある生徒に……」

などと泣いていたのは余談だ。さらに余談だが、ルイズは物覚え  
が大変良く……半年もすると殆ど先生が教えられる事が無くなっ  
てしまう。

閑話休題。

そして今、私はお母様とある部屋に来ている。

「ミス・アリシエルは『もう、私に教えられることはありません』  
などと言っていました……今日はそれを確かめてみます。良い  
ですねルーティア？」

「はい！」

ふむ、テストみたいなモノかな？

「結果によつては、アナタが欲しがっていたモノを与えます」

欲しがっていたモノ……杖かな？ うん、もし杖ならコレで  
大手をふつて魔法が使えるな。

「では始めに……」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「止め！」

くひゅううう、や、やつと終わった。座学の問題を数時間、その後はダンスやテーブルマナー、礼儀作法のテストを延々と……、

「……結果は、後日に教えます。」

今日はユツクリと休みなさい、ルーティア」

「はい、お母様！」

険しい表情のお母様に、私は笑顔で答えた。

\*

## Another side

「……ルーティアには、酷い事をしてしまったわ」

「どうしたんですか、お母様？」

「カトレア？ 起きていて大丈夫なのですか？」

「はい、なんだか最近、とっても調子がいいんです。」

「……ところでお母様、ルーティアちゃんは何か？」

「……雇った家庭教師が『もう教えられることはない』などと言ったので、その真偽を確かめるため……」

「ルーティアちゃんをテストしたんですか、お母様？」

「ええ……でも、今はやりすぎたと思っただけなの。」

あの娘がまだ2歳程度なのに、あんなに汗だくにさせて何時間もテストをさせてしまった……」

「……それでお母様、テストの結果は？」

「……文句無しの合格です。あの歳で、もうアナタ達と同等の事が出来るのなら、当然の判定です」

「まあ、それじゃルーティアちゃんに杖を……」

「いいえ、杖の契約はさせません。まだあの娘には、魔法を使うには早すぎます」

「そんな……」

お母様、お話があります」

「カトレア？」

「あの娘に、杖の契約をさせてあげてください」

「な、何を言いだすのですカトレア!？」

「はい……、ですがあの娘は、信じられないと思いますがもう魔法を使っています」

「……それは、どういうことなのです？」

「お母様、この事はココだけのお話にしてください。」

私がここで言う事は、お母様が一番嫌う“約束事を破る”行いです。

ですので、ココで私が言った事は一切他言しないでください」

「……」

「ルーティアが魔法を使っているのを見たのは、ほんの一週間ほど前の夜でした。」

ルーティアが私の部屋に窓から“フライ”を使って入ってきて……私は寝た振りをしていました。次にルーティアは“治癒”を唱えてくれて……」

「……」

「そこであの娘に事情を聞きました。」

もちろん杖についてです。

あの娘は何も手に持たずに魔法を使っていましたから……」

「!？」

「お母様、ルーティアが手に見慣れないブレスレットを着けているたのは気付きましたか？」

「ブレスレット……そういえばあの娘、見た事もないブレスレットを着けていましたね」

「ルーティアちゃんは、誰も教えてくれないから独学で杖との契約

方法を調べて、あのブレスレットを杖として契約しているんです」

「それは、本当の事なのですかカトレア？」

「はい。」

そして、この事を誰にも言わないと約束もしました。

お母様、ルーティアにはあの部屋は狭すぎるんです。

いつか、誰かが教えなくても自分の力で狭い籠から出て行ってしまえますわ」

「……………分かりました。カトレアがそこまで言うのなら考えて見ましょう」

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

お母様のテストを受けてから数日後、お母様から私専用の杖をプレゼントしてもらった。

お母様から貰った杖は、本当にちっちゃくて何の飾りもないシンブルな物だった。

「一番初めの杖は、この位の物が通例です。」

ルーティア、より一層の精進を積みなさい？」

「はい、お母様」

それから杖との契約を行い、いざ実践つと言ったところで問題が発生した。

ルイズだ。

「りゅーだけじゅりゅー！わちゃしも杖がほしーいー！」

「ルイズ、ダダをこねない！」

「いやあああ！」

ダダをこねて泣きじゃくるルイズ。……あ、お母様手を上げちゃだめ！！

「びええええええー！」

ああ、泣き出しちゃった……って、お母様追い討ちをかけないで！ 私とはつさにルイズの前に飛び出し、お母様の振り下ろした手の平をルイズの換わりに受けた。

「ル、ルーティア！？」

「……お母様、ぶっちゃダメです」

私は両手でルイズを庇う様にお母様の前に立つと、赤く腫れた頬を浮かべた顔でお母様を睨みつけた。

「ルーティア、これは我侬を言うルイズの躰です。

アナタが……」

「二度目は、必要在りませんお母様。

無理やり泣き止ませるのに、二度目は必要ありません」

「ルーティア……」

しばし母と娘のにらみ合いが続いたが、ルイズを守る壁に騒ぎを聞きつけたカトレアお姉さまが加わった。カトレアお姉さまの説得に負けたのか、お母様は月に一度だけルイズをテストし、その合否によって杖を与えと言う約束がなされたのだった。

ちなみに、ルイズがこのテストに受かって杖を貰うまでに半年程かかったが、ココでの詳しい説明は割愛しよう。

## 楽しく転生06（後書き）

今回は、杖を持つまでの間のお話がメインでした。

いったいルイズたちは何歳で杖をもてるようになったのでしょうか？

キャラの年齢が低すぎる気がします……まあ仕方ない（おい

カリィヌファンの皆さんごめんなさい。

おそらく彼女が一番原作キャラとかけ離れるかもしれません……。

それでは元ネタの解説、先ずは今回出て来た七徳の宝玉の一。

元ネタは、TRPGのナイトウィザードのアニメから。

賢明の宝玉、頭がとても賢くなりINTが上昇します。アニメだとちよつと微妙な活躍しか出来ませんでした。魔法ダメージ計算をINTで行うゲームだと既存の値の5倍か……もしくは振り切れた数値を叩き出せます（たぶん）。

この宝玉、絶対にジョセフにだけは渡したくありません。すでに超人的頭脳の持ち主なのに、神域にまで昇華しそうです。

主人公の能力、月衣と月匣

両者ともFEAR製TRPG、ナイトウィザードが出身です。

月衣カグヤとは、ウィザードなら誰もが持っている個人結界で常識が通用しなくなります

。常識に対してのみ、ATフィールド（鬼畜フィールド）見たいに鉄壁です。例えば戦艦大和の主砲を打ち込まれたとしても、この結界に平然と跳ね返されてしまうでしょう。

色々な物をしまうことが出来るとっても便利なスキルです。

月匣<sup>ゲッコウ</sup>は、一種の広域結界です。

これを簡易化したものが月衣だとも言われたりもします。

核となる触媒を選択し、ルーラー（法則決定者）が定めた法則を持つ世界を形成する能力。ナイトウィザードでは主に魔王達が使います。

私は“仮初の世界を作れる程度の能力”と解釈しています。

ちなみに、夢幻書庫も月匣の一種だと思ってください。

外見……というか、様子はリリなので淫獣が働く無限書庫や、魔法先生でおなじみの秘境・図書館島など大規模な図書館を想像してください。これはそれらを混ぜ込めたモノですから……。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。



## 楽しく転生07（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生07

お母様から正式に杖を貰って、これで人目を気にせずに魔法の練習が出来る……って考えたんですけど、ひとつだけ不安がありました。

ルイズの事です。

お父様もお母様もスクウェアアクラスの上級メイジ。エレオノール姉さまとカトレアお姉さまは今だリンクラスですが、原作ではトライアングルからスクウェアアクラスの実力にまなつています。

そして原作でのルイズは、自分の魔法の性質（どの魔法を唱えても爆発する）や系統が分からず（オオバカのブリミルのせい）、結果的に彼女の幼少期は散々たるものだったらしい。

さてココで、双子の私まで魔法が使えたら？

それもこの歳で異常なほどレベルの高い魔法を行使できたら？

その答えは簡単。ルイズは、

『出来の悪い末っ子』

ではなく、

『妹に見本を見せて上げられない姉』

と、呼ばれる事になるでしょう。

そして、それがもたらす結果は？ 彼女の心は、原作以上に深く

暗い檻に閉じ込められ………最悪の場合、自他共に巻き込んだの取

り返しの付かない崩壊へとひた走る事になるのは想像に難くない。

故に……、

「ルーティア、何度言ったら分かるのですか？ 魔法は正しい詠唱とイメージが大事なのですよ！？」

「はいお母様……『レビテーション』！！」

力ある言葉と魔力を紡ぎ、その行く末を杖の先へと向ける。ですが、杖の先にある小石はピクリとも動きません。“節制の宝玉”の力で私の魔法を発動させないように押さえつけているのです。

「……ルーティア、『レビテーション』の魔法をもう一度……いえ、出来るまで唱えなさい」

私は、魔法を使わないことを選びました。

そして、私の魔法が発動しない事にカーリーとお母様は容赦がありませんでした。

まあ、これも自分の選んだ道です。腹を括って呪文の詠唱を一日に何十回も何百回で行いました。それでも魔法が発動しない事にお母様は眉を吊り上げ、般若の様な顔で怒ろうとしますが、何かを言いたげに口をパクつかせると、

「……もう、今日はコレくらいにしましょう」

と、言って毎回魔法の特訓を切り上げてしまいます。

うむ、いったいなんなんだろう？ 烈風のカリンとして恐れられ、原作でもルイズお姉さま達にもすごく恐れられてトラウマの様な幼少期をすごさせた……はずなのだが……、

「なにか、妙ですね？」

その答えを私が知るのは、まだまだ先の事でした。

\*

「は！ はっ！」

「うむうむ、ルーティアは……なんと云うか頑張り屋だな」

なんとも複雑そうな顔で私を見るお父様を放って置いて、私は一心不乱に木剣での素振りをしています。なぜ私が素振りをしているかと言うと、単純に剣を覚えるため。

魔法に関してはこっそりと練習して、風系統ならラインからトライアングルクラスの魔法を行使できるようになっていたりする。さらに他の火、水、土の系統もドットからラインクラスでの行使が可能で、最大攻撃力だけを見ると“剛毅の宝玉”の力を込めれば、某

リリカルな魔法少女の砲撃魔法並みの威力をたたき出せたりもします。

だがしかし、必ずしも魔法が万能と言うわけではない。

使える物は何だつて使え！ 二者択一の選択肢から無理やりにも第三の選択肢を作り出すのが“魔法使い”だと、某ハチャメチャ魔法学園の先生も言っていたではないか！

と言うわけで、私は今お父様に駄々をこねて剣の稽古を付けてもらっています。

最初に剣を習いたいなんて言ったら、お父様は手に持っていた杖を落としてしまいました。お父様は、女の子が剣など覚えなくてもいいんだなど言うのです。そこで私は、烈風力リンの冒険譚が書き綴られた本を家中からかき集めてきました。そして、

『『ブレイド』を纏わせた杖を振り回して、荒れ狂う火竜の群や軍隊に勇猛果敢に切り込んでいく女の子がいるじゃないですか！』

と、お父様に突きつけます。ちなみに、烈風力リンがお母様だと言う事はカトレアお姉さまとエレオールお姉さまから聞いているので、これは確信犯です。あれ、使い方が違う？ ……いいじゃないですかちよつとくらい違つたつて！！

お母様の事を聞いたお父様は苦々しい顔をしながら、

「ご、極普通の貴族の憤ましやかな淑女はそんな事はしなくていいんだよ」

などと言つて言い聞かせようとしていました。なるほど、そう言っちゃいますか。では……、

「なるほど、ではお父様の中ではお母様は極普通の貴族で、憤ましやかな淑女ではないのですね？」

と、言いながら私はすぐ後ろのドアを開けました。そのの向こう側には……般若の様な笑顔を顔に貼り付けたカリィとお母様。いえ、烈風力リンです。

「……」

「か、カリィヌー！？ いや、それはだな……」

「……」  
「……」

お母様の無言の圧力でお父様が墜ちました。

それから武芸の一環としてなら剣を習っても良いとお母様が言い  
てくれました。

……お母様が直々に指導をする時まで言い出したが、それはお父  
様が身を挺して阻止してくれて、そして現在に至ります。

ちなみに私が持っている木剣……正確には独特のしなりを持た  
せて作った木刀（特注してもらった。なにせこの世界の木剣は両刃  
の直刀を模したのが主流だから）を両手に持って剣の稽古をしてい  
ます。

閑話休題。

「よしルーティア、素振りはそれ位にしていったん休憩をしよう。

その後、模擬戦をやって今日は終わりにしよう」

「はい、お父様！」

模擬戦などと言ってもそんな大層な物ではない。お父様が魔法で  
作った私と同じくらいの大きさのゴーレム、それも防御を中心とし  
た動きをするモノに私がほぼ一方的に切りかかると言う物です。

さすがに易しすぎるのでは？ と、思いましたが……これがけっ  
こう難しい。さすがお父様と言うべきか、防御をするゴーレムの動  
きに隙がまったくない。全ての太刀筋をゴーレムが持っている両手  
持ちの棍棒で防がれて、いまだに一本が取れない。もちろん宝玉の  
力は無しでだ。“剛毅の宝玉”を使えば防御の上からゴーレムを真  
つ二つに出来ますが、それでは意味がありません。

地道に隙を作る為のフイントや足捌き、上段下段からの袈裟切  
りや籠手狙い、さらには至近距離での打突も加えてみるも……なか  
なかその防御を崩せない。

「む、なかなか勝てません」

「ははは！ そんなに簡単に勝たれては、親として威厳が保てないじゃないか？」

む、大人気ないですね。

\*

そんなこんなで月日が経ち……、私達姉妹は数えて4歳になった。……お母様、躰はいいですが幼い子供をそんな殺気を込めないでください。

ルイズが魔法やダンス、テーブルマナーの練習を泣きながらやっている姿は 泣きながらご飯を口に運ぶルイズは 正直見るに耐えられないものでした。お母様は貴族がどうかと説教をし、ルイズが泣き出すと手を上げて泣き止ませる。

正直に言おう、アナタがまず子供の育て方と愛し方を習うべきだし、そして酷いと思うなら、本当にそう思うなら、私よ行動に移せ！ 私は自分を叱咤し、ルイズを庇うように何度も立ち塞がり、気が付いたら母さんに怒鳴りつけていた。

「ルイズお姉さまを泣かせるな！！」

最初はお母様も面食らったようにしましたが、その後は私も含めてのお説教タイムに突入します。そして、お母様が止めるか、カトレアお姉さまかお父様が止めに入るまで、この説教は続くのだ。

閑話休題。

さて、数えて四歳になって私達は自分の部屋を貰った。って、ちよつとまで早すぎるぞ？

まだ子供は親に甘えたい時期なんだよ？

そんな時期に子供を夜中一人で寝せる気か？

……まあ、部屋の外でメイドさんが寝ずの番（もちろん交代で）やってくれるから、ルイズが泣き出しても対処できるかもしれない

けど。私としては、一人で自由に使える部屋を貰ったので人目を気にせず心置きなく魔法の練習が出来る。

「……でも、さすがに部屋の中で練習するのは危ないですね」

いや、さすがに原作や二次創作でカトレアお姉さまが屋内に“動物園”なんて作っちゃう位に広い部屋だ。でもね、さすがに『ファイアーボール』とかの練習をすると屋敷が全焼しちゃうよね？ だって、床一面に足が沈みそうな位の絨毯が敷かれているんです。お掃除が大変そうですね。

こんな場所で魔法の練習は出来ない！ 仕方なく、夜な夜な誰にも気付かれないようにベランダから出て（ちなみにココは三階だ）、アイン・ソフ・オウルで誰もいない空に行くか月匠を展開してその中で魔法の特訓をすることにしました。

\*

## Another side

「アナタ……私はどうすればいいのか判らないわ」

「ルイズと……ルーティアの事かい？」

「ええ、ルイズの事もそうですけど……ルーティアが、なぜあんなにも私に反抗的になるのか」

「……泣いているルイズを庇って、じゃないかな？」

ルーティアは決まってルイズが泣いている時に限ってだけ、君に反抗するじゃないか？ 烈風と呼ばれ、畏怖された君の前にあんなに小さくても立ちはだかって、君の“気”に当たってもなお食い下がってくる。

そう、まるであの娘がよく読んでいる本に出てくるイーヴァルデ

イーの勇者みたいだね？」

「それでは、私はさしずめて可愛いお姫様をさらっていった悪い竜……と言ったところかしら？」

「……ルーティアは、本当は君に反抗したいなんて思っていないのかもしれないよ？」

ただ、自分と一緒に生まれてきたルイズが泣いているのを、ただ黙って見ていられないだけじゃないかな？」

“そう、私は……何も出来ないと諦めたくない何も出来ないのはいやなんだ。

本当は、ルイズお姉さまと一緒に母様に甘えたいのに……。”

「絶対的な強者に、自分が負けると判っていても、背中にいる“守らなきゃいけないモノ”のために絶対に引かない。我武者羅に頑張っていた若い頃の君にそっくりじゃないか」

「……本来なら私達が模範と成るべきだったのですね。でも、むしろ私が打ち砕くべき壁になってしまった……」

「大丈夫、あの娘は聡明だから、ちゃんと君が教えた事を判ってくれるさ」

「……そうね、確かにルーティアは聡明な娘ですわ。“わざと魔法が使えない振り”までして、ルイズを庇っているのですから」

「……“使えない振り”？」

「あら、アナタは何も気付いていなかったの？」

ルーティアは私達の前じゃ殆ど絶対に魔法を発動させないけど、皆が寝静まった夜中にカトレアの部屋に『フライ』で潜り込んで『治癒』をかけているのですよ？

それだけではないわ。屋敷の裏の森の中に、あれでも必死に隠しているでしょうけど……あの娘が『土』系統の魔法で作った隠れ家



があるのよ？

中をこつそり調べて見たけど、鋼鉄製の刀剣類や何か乗り物の様な模型、あとは何の用途かが判らないカラクリが置いてあったわ。たぶんあの娘が自分の力だけで作った物だと思うの」

「それは、本当かいカーリヌ？」

「ええ、コレが証拠ですよ？」

ガラクタの様に積み上げられていた中から持ってきた物で、剣と斧を両立させた武器だと私は考えています。

これはカラクリが上手く機能していないようで、半分までしか形が変わらないようですが。

ちなみに、ちゃんと形が変わる“完成品”も見る事ができたので、それがどのような物か判ったのですが」

「ふむ、この刃の部分に使われている金属は………」

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

ああ、バレていたんですね？ 私はこれ以上二人の会話を聞くのを止めて、壁からそつと離れていった。そして、アイン・ソフ・オウルを箒の形に組み替えると、そのまま夜の空へと舞い上がって行く。

「うーん、やっぱり空は気持ちいいな」

嫌な事とかも、全部忘れられそうです。

今は、本当なら凍え死んでしまう様な高度を今飛んでいる。だが、月衣の力で凍え死ぬなどと言う“常識”は通用しない。墜落して死ぬなどと言う“常識”も通用しない。そもそも、“非常識な存在”

にそのような概念があるのか？

そんな“枷”の無い夜空を、二つの赤と青の月をバックに飛びます。

そしてここは、天と地の狭間。ここなら誰にも遠慮する必要もなく魔法の練習が出来る。

現在私の実力だが……風のラインで、他の属性は全てドット程度だろうか？ そもそもランクの決め方が曖昧なため、正確に自分の魔法使いとしてのランクがわからない。まあ、他の連中からしたらスクウェアだのほざきそうな事も出来るようになったが……。

そんな無駄に高い力を使い、私専用の杖として“鍊金”を駆使して某モンハの“スラッシュアクス”の様なモノを作り出した（普段は最初に貰ったタクト状の杖を皆の前で使っている）。だって力ツコイんだもん。

最初は日本刀を作ろうかと思っただけ、あれは絶対に職人さんに作ってもらったほうがいい。『鍊金』じゃ玉鋼を鍛えられないし（それに玉鋼は『鍊金』で作るより、炉で作ったほうが早い）、成型が難しすぎてダメだ（無理やり作ったら刃が厚すぎた）。

閑話休題。

さて、そろそろ鍛鍊を切り上げて屋敷に帰ろうかと思った時、  
「ん？」

私は、屋敷へと続く道の真ん中で倒れている子供を見つけた。

## 楽しく転生07（後書き）

今回は、主に日常光景でした。  
幼少期からユルユルと行くので、バトルはもうちょっと先になります。

元ネタ等、解説コーナー！

引き続き、宝玉の説明から行きます。  
今回登場したのは、節制と剛毅の宝玉です。

節制の宝玉、能力は“封印”です。アニメでは、入手したエリスを永久昏睡状態にして封印してしまいました。ほかに、相手の能力をいろいろ下げたり出来ます。“柊力”なみに厄介な能力です。

剛毅の宝玉、主に攻撃力をUPさせる宝玉です。アニメでも恐ろしくパツとしない存在の宝玉ですが……。攻撃力UP 怪力少女化させます。

ルーの杖の元ネタは、モンハン3のスラッシュアックスです。  
形状は一番最初に手に入るアレです。

変形機構は再現しますが、属性攻撃やピンはついていません。  
その代わり、別の物が付きます。

なんでコレを使うのか？ 答えは私が好きだからだ！

今回はこれで。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれませんが。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生08（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生08

「……クラン・ベル・ド・ベルナールです」

「ふむ、ド・ベルナールか……たしかラ・フォンティーヌ領のすぐ隣の小さく、荒れ果てた領地だったな」

「して、なにゆえアナタが我が娘の部屋に居たのか、説明してもらいますよ？」

おろおろと不安げに視線をさ迷わせている女の子　クランに、

お父様とお母様は容赦なく尋問している。ああゝもう！

「お母様、それにお父様！　クランさんは、道端で倒れていたのを見つけて私がここに運んだだけです！」

まだ夜が明けるずっと前、屋敷に帰ろうとする私は、道の真ん中でボロボロになって歩いてくるクランを見つけた。

「おとうさん、おかあさん……」

虚ろな眼でうわ言の様に両親を呼ぶ子供を放っては置けず、彼女を自分のへ（もちろん窓から）運び入れ、外で寝ずの番をしていた（実際は居眠りをしていた）メイドに、

「体を洗うお湯と、清潔なタオル、それと包帯に傷薬を“だれにも気付かれないように”用意してください」

と言つて、用意させた。なんに使うのかと聞かれたが、とにかく用意しろと質問を跳ね除けた。その後、持ってきてもらったお湯とタオルで女の子の体を拭き、ボロボロになった足に傷薬を塗って包帯を巻いた（実際はお湯を持ってきてくれたメイドが全部やってしまったが）。

そしてその後、朝日が昇った少し後に女の子が眼を覚ましたので簡単な事情聴取をかねて食事を用意させたつもりだったのだが……。やってきたのはお父様とお母様、その後ろに寝ずの番をしていたメイドがビクビクと体を縮ませていた。

そして、冒頭につながる訳だ。

＊

まったく、お父様もお母様も……。

「あの……助けていただいてありがとうございます」

改めてメイドに用意してもらったスープを食べ終わると、お礼を言つてペコリと頭を下げる克蘭。だいたい私より少し年上ぐらいだろうか？

少し休めたため回復した彼女から、自分がカトレアお姉さまの領地のすぐ隣に領地をもつ貴族の子供で、なんでも眼が覚めたら屋敷には使用人も含めて誰も居なく、家財道具一式も自分が寝ていたベッド以外の一切が無くなっていたらしい。さらに枕元にラ・ヴァリエール公爵に頼るようにと言う置手紙と僅かばかりの食料が置いてあった。

夜逃げですか……。

お父様曰く、ド・ベルナーブル領は経済的に破綻しかけていたらしい。毎年のように赤字経営だったそうだ。何でも領地に平野部が殆どないため大きな街を作る事ができず、勾配の激しい山々に囲まれて天然の要塞の様な地形となつていたので守りやすいのですが……正直に言つて交通の便と生産性と特産物がまったく無いようです。唯一の生産品は、未開拓故に鬱葱と生い茂っている樹木から木材と木炭。それすらも、交通の便が余りにも良くないために運搬賃が恐ろしく高くついてしまい儲けが出ないのだとか……。さらに手入れが行き届かずに天然の迷宮に成り果てた領内では、オーク鬼やコボルト鬼などの凶暴な亜人が住みかを作っているようで、平民が暮らす集落を守るための経費も馬鹿にならなかつたらしい。

さて、そんなところに人は住みたがるでしょう？

答えは否。

少なかった領民は、最終的に現れた野生の竜種（ワイバーンの類らしい）の襲撃を受けて、全員家を捨てて逃げ出し……。

「そして、クランさんのお父様とお母様は、クランさんを残して逃げてしまわれた……と言うわけですか」

ボロボロと涙を流しながら、自分の起こった事を説明するクランさん。私は見るに耐えなくなり、彼女を抱き寄せて自分のまな板としか言いようのない胸に押し当てていました。

きつと、カトレアお姉さまならこうするだろうななんて思いながら。

泣き出したクランさんの背中を、優しくさすってあげた。

それから事実確認のため、お母様が（本当はお父様が出向く予定だったが）直々にド・ベルナール領に向かった。結果が判るまで3・4日はかかるらしい。

クランは、今は泣きつかれて寝ている。この年頃の女の子が馬でも半日はかかる距離をただ一人で歩き通して来たのだ。安らかな寝顔を見ていると心が休まるな。

「ところで、ルーティア」

「なんでしょうお父様？」

「うむ、ルーティアはこの娘をどうするつもりだね？」

彼女の言う事が確かなら、彼女は没落貴族で……」

「お父様」

「？」

お父様が最後まで言い切る前に、それを遮って私はお父様の方を向いた。

「お父様は、苦しんでいる人を見て『可哀想だ』と、哀れめば……」

『自分はその人を助けたんだ』と思えてしまう人間ですか？

可哀想だと、それだけ“思うだけ”で実際には何もしない。

思ったと言う免罪符を得る事で、自分は何もしなかった訳じゃない

いと思えてしまう……。

それは、とても残酷な事ではありませんかお父様？

そして、お父様が『金の切れ目が縁の切れ目』だなどと言う様であれば、お父様たちの言う忠義や恩義とは……。」

「ルーティア！！」

お父様は怒気を荒げて声を上げるが、それでも私は、残りの言葉を力強く言い放った。

「しよせん、その程度のモノなのですね？」

「ちがう、違うんだルーティア。貴族の忠義と義務は……。」

「なら、力ある者の義務とは何でしょうかお父様？

その力を持つてして、力無き者を虐げる事ですか？ 違うでしょうお父様？」

しばしの沈黙の後、お父様はフウッと息を吐くと、私を両手で抱き上げてソファアに腰を下ろした。

「まったく、ルーティアはカリンに似て頑固者だ。

これじゃ親である私達が、教えられることは無いではないか？」

「私は、お父様の様に賢くもなければ、お母様の様に芯が強いわけでもありません。

ただ、引けぬと……引いてはならぬと私の中で叫ぶモノがあり。それに従っているだけです」

「そうか……、それで我が娘ルーティアは、この身寄りのないミス・クランをどうしたいのかね？」

「……もし、彼女の言うとおりの場合、彼女の領地はどうなりますかお父様？」

「そうだな、唯一居所の判っている正当な後継者が未だ6・7歳の子供で……領地が実質上無人であるなら、領地は一時的に国庫に預けられる事になるな」

「そして、クランさんがこのまま路頭に迷って死んでしまった場合合は？」

「国内で領地をもてる貴族の誰かが、その土地の領主に命じられる



だろうな」

「……ならばお父様」

私が彼女にしてあげられる事は……。

数日後、クランの言っていた事が本当である事が帰ってきたお母様により知らされた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

そして、

「本日より、ルーティアお嬢様の身の回りをお世話させていただきますメイドのクラン・ベルです。」

どうぞ、よろしくお願いします」

そう言つて、白いメイドカチューシャをのせた亜麻色の頭を下げるクランが私の目の前にいます。

あれから一カ月後、彼女は私専属のメイドとしてラ・ヴァリエール公爵邸で働く事となった。

「ええ、これからよろしくねクランさん。」

でも……ちよつと硬いですよ?」

「いえお嬢様。お嬢様からいただいたこの恩義、この身に代えて……」

……」

「だから、それが硬いと言っているんです!

まったく、お母様たちの指導が厳しかったのは判りますが……公の場でない時はもっと自然に接してください」

「ですが」

「私に『命令』させたいのですか?」

私がクランさんを睨みつけると、

「……判りました」

と、やっと折れてくれた。

「ですが、これだけは言わせてください。

本当にありがとうございます。

平民に身をやつす事になりましたが、雨風に凍える事も、人買いに捕まり慰み者にされる事もなくなり、あまつさえこの様な若輩者に働く場所を与えてくださって、本当に本当に……」

最後の方はもう声にならず、下を向いてボロボロと涙を零していた。ああもう！ 私は彼女を抱き寄せると、

「泣き止みなさい、これからアナタが泣いていいのは、アナタが幸せを手に入れて、それに喜んだときです」

「いいえ、私は今……とても幸せなんです」

## 楽しく転生08（後書き）

今回は、オリキャラのクラン・ベルさんの登場話でした。

そう言えば、家庭教師のアリシエル先生もオリキャラでしたね…

…まあいつか、かませ犬見たいなキャラだし（まで

基本的、このSSのオリ主　ルーティアは青い子です。

もし能力がないただの人だったら、たぶん悲惨な道を歩くかもしれないほど青いと思います。

では、ネタなど解説コーナー！

七徳の宝玉は今回出てこなかったたので、残りの正義と希望の説明は後回しに（おい

オリ主の能力の一つ、蒼い第三の瞳の元ネタはSF小説、ザ・サードアイ

正式な名称は、“蒼い宇宙眼”でした。直すべきか直さないベ  
きか……。

中世ファンタジーな世界なんで、紅い方ではなく蒼い方を採用しました！

主人公、何でも屋の火乃香の生態器官を能力として採用。ちなみに、ルーティアの額には第三の瞳は象眼されていません。もしあったら、生まれた瞬間パニックですからね……。代わりに、気などが見える人には額に蒼い瞳の形をした文様が見えます。

火乃香は、この瞳の恩恵で気功術に似た力を行使でき、例え戦車の積層装甲だろうと自動歩兵の大群だろうと、彼女は自慢の居合いでなぎ払います。

……実際、アニメ、ザ・サードの最終話は無双だった。

身体の外と内の気やオーラと言ったモノを自在に操れるなどと書かれています。……ネギま！　で、考えると“咸卦法”が普通に出

来ているかも知れない件について、オリ主は使えるようになるのだろうか“咸卦法”？

某ハチャメチャ魔法学園、元ネタはファミ通文庫“まじしゃんず・あかてみい”です。

プチネウス可愛い。エーネさんもつと殴れ。先輩もとい先生、もつと突つ走れ、規制コードギリギリまで！

ちなみに、ゴスロリ黒天使の元ネタもココから、御前天使のガブリエル様です。

性格からなにやらまったくの別物なのは、仕様です。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生09（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生09

私は今、机の前に座り自作のボールペンを片手に机の上に広げられた一枚の紙と戦っている。

「ルーティアお嬢様、あまり根をつめてもいけません。そろそろお茶にしませんか？」

「……そうね、そうするわ」

ペンを机に置くと、克蘭さんの用意してくれたお茶を手にとつて一口、うん美味い。

「上手になりましたね克蘭さん」

「ありがとうございますルーティアお嬢様」

私たちは今、二人で秘密の工房に籠もっています。

それはなぜか？

事は克蘭が私の専属メイドになってから3・4ヶ月ほど経ったある日の事でした。

\*

「ルーティア、今からとても大切な話をします」

と、お母様とお父様、それにカトレアお姉さまが真剣な顔をしています。

「何のお話でしょうかお母様お父様、それにカトレアお姉さま？」

「ああ、とても大切な話でな……克蘭くんも同席しなさい」

「メイド風情の私めなどが……」

「克蘭さん、これはアナタにも関係のある事なの」

丁寧に断りを入れようとする克蘭を、カトレアお姉さまが止める。はて、いったい何の話でしょう？

「ルーティア、そんなに険しい顔をしなくても良い。

……さて、唯一の継承者であるミス・克蘭が貴族でなくなってしまったため、ベルナール領は空席となってしまった。

ところで、ルーティアよ家族の中でカトレアだけ名前が違うのは知っているな？」

「はいお父様、お姉さまの家名はフォンティーヌです。

体の弱いお姉さまのためにお父様が、せめてもお姉さまに領地を分け与えたと、お姉さまに聞きましたが……それが？」

「うむ、実は先日の事だが正式にベルナール領がラ・ヴァリエール領に併合される……いや、正確に言うとラ・フォンティーヌ領に併合される事になった」

なるほど、領地が増えたのですか……ん？

「お父様、いったい何が私たちにとって大切な話なのでしょう？ 聞くところによると、克蘭さんの故郷がお父様の治める領地となっただけに聞こえますが……」

「まっつて、話はこれからなの」

「カトレアお姉さま？」

「うむ、それでな……ルーティアの名をド・ラ・ヴァリエールからド・ラ・フォンティーヌとし、領主としてミス・克蘭と共にかの地を治めて欲しいのだ」

………なんですと？

「えーと、お父様……どうも私の耳がおかしくなったようですね？ お父様が私にラ・フォンティーヌの領主なるように言っているように聞こえましたが」

「ルーティア、私は確かにそう言った」

……。

「お母様、どうやら私は何か悪い物を食べたようですね？ 先ほどから幻聴のよなモノが……」

「ルーティア、アナタの耳は確かに正常ですよ？」

……。

「カトレアお姉さま？」

ニコニコと微笑まないでください。

「……ルーティア・ルシエル、どうやらアナタは性質の悪い夢を見ているのです。」

そうです、きっとそうに違いありません。

なぜなら、聡明なお父様とお母様が5歳ににも満たない子供に、領主になって土地を治めるなどと戯言を言うわけがありません。

そうです、きっとこれは夢「お嬢様」……何かしらクランさん？」

「とても信じがたい事です……現実逃避しないでくださいお嬢様」

ああ……現実なんですね？

本当にそんな滅茶苦茶な事を言っちゃったんですね？

「ルーティア、とても信じられないかもしれんが……これはカトレアからの頼みでもある」

え？ お姉さまが？

「理由は……カトレアは話してくれんし、反対するであろうカリーヌも賛成してしまう。」

かく言うワシも……“本当に何も知らない”が、二人が賛成するなら……私も賛成だと考えたのだ」

何も知らないを強調しないでくださいお父様。お母様とカトレアお姉さまに小突かれてますよ？

「イタタ……うむ、まあ、強いて理由を上げるならばコレだ」

そう言つて、お父様はマントの下から一冊の分厚い本を取り出した。

本のタイトルは、ハルケギニア語で“文明”。その上には小さく地球の文字でシヴィライゼーション。って、お父様それは！？

「うむ、先に勝手に部屋に入った事を謝ろう。」

それで、私はこのゲームは実によく出来ていると思う。政治、経済、宗教に戦争、ココまでの要素を詰め込んだボード・ゲームは生まれて初めて見た」

まあ、この世界じゃ主なゲームはチェスカランプ……それぐら



いでしたね。狂王ことジョセフさんの作った“箱庭”なんて完璧にSLGでしたが、他の人にはただの人形遊びにしか見えてなかったし……。と、言うよりも娘の部屋を勝手に家捜ししないでください！ 今度、普通の鍵だけじゃなくて磁石式の鍵でも付けておきましようか……。

「あゝ、例えゲームとは言え、その歳でこの様な難しい事をやっているのだ。領地の経営を任せて見ても良いと考えたのだ。うん、そうだ」

いや、あの、そんなにいいんですかお父様？

ゲームですよ？ たかがゲームですよ？

「ルーティアちゃん」

「なんですか、カトレアお姉さま？」

「克蘭ちゃんの事も考えると、これはとってもいい事だと思うの」

……あ、なるほど。もともとそう言う考えもあつて克蘭さんを保護したんです。

「……そうですね、わかりました。」

領主の件、謹んで拝命します」

\*

「さて、作業を再開しましょう」

現状、目下の問題は私に力がない事だ。

私個人の力なら、ある程度ある。懷にさえ潜り込まなければ何とか成ると思うし、いざとなればアイン・ソフ・オウルの“正義の宝玉”の力を解放し『滅びの翼（命名、私）』で辺り一面を殲滅すればいい。そう、エリスさんが土星の輪を破壊したように……。

だがこれは、一切の手加減が効かないうえに色々な場所で一斉に問題が発生した場合に対処が出来ない。

ほんと、

「『私がコレから言う事に“はい”か“イエス”で答えてください』……で、動いてくれる部下が欲しいですね」

「……お嬢様、いったい先ほどの台詞は？」

「ああ、気にしないでいいですよ？　ちよつと独り言が漏れただけですから」

まずは、手勢を増やす必要があります。そして、その人達が生活を送れる環境も。

前々から少しずつ考えていた事でしたが、ラ・フォンティーヌ領を使えることが出来るようになりましたので、本格的に計画を開始しましょう。

そして、私が今行っているのはお父様から頂いたラ・フォンティーヌ領で何が出来るか？　を、領地の地図と農林水産などの第一次産業や領地経営の方法を指南している書物を片手に検討しているところです。

「とにかく、使えるものが木材だけとは……」

「はい、とにかく樹木が多くしかも手入れが行き届いていないので建材としては価値が低く、木炭にして売り払おうにも……」

「運び出すコストが高くなりすぎる……と」

うーん、ここ数日地図と睨めっこしていたが良い案が浮かびません。

と言うか、地図の精度が悪すぎてどのような地形なのかハッキリと分からない。地図を元に土で領地の模型を作って見たのですが……正直に言って地図の方がまだマシかもしれないモノです。

事前に少しでも何か出来ないかと考えて見ましたが、やはり実際に領地を見てからでないとダメですね。

「農地を作るにしても平地が少なく大規模開発はムリ。後は鉱山資源か……温泉でも大量に出てくれれば観光名所出来るかもしれないですね」

でも、望み薄かもしれない。現実は厳しいですからね。

チラリと、左手のアイン・ソフ・オウルに目をやる。希望の宝玉でどうにかしようか……。いやいや、それは最後の手段であって、

「それではお嬢様、明日は領地視察の出発日です。

夜も更けてきましたので、もうお休みなられたほうが良いかと？」

「そうですね……（仕方がない、夢幻書庫も漁って見ましようか）」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

いや、淫獣ことユーノくんが欲しいと思ったのはコレが初めてではない、かな？

夢幻書庫は、地球の色々な書物や記録媒体が保管されている場所です。

ですが、ひとつだけ……本当に困った問題があります。

ガッン！

「イタ！？」

それは、

ドカドカドカ……。

「ゲホッ！ ゲホッ！？」

だれも整理整頓をしてくれないのです。

しかも、私が前世で見た事のある本などは（一応）ちゃんと整理されていたが、その他の物は一切合財整理されておらず……今日  
の晩御飯7月号と書かれた料理本の隣に理科1の教科書（しかもかなり古い）があつたり、ゾウさんの冒険などと言つ児童書のすぐ横  
に今夜から出来る夫婦愛の手引き（内容はR18か？）なんて物が  
あつたりする。

本棚に貼られているジャンル別けの札は飾りですか？？

です。この夢幻書庫では、実質的にユーノくんが過労死しそうな無 書庫となんら変わらない状況が発生しています。

「農業に関する本は……え〜とコレじゃなくて、コレでもなくて……」

しかも、だれも整理してくれないから引き抜いた本が床に積み上げられ、元あった場所に戻されてもいません。

「……はあ、もう寝ましょう」

結局、探索は諦める事にしました。さすがに精神世界でも疲れ果てたくありません。

……そう言えば、この夢幻書庫。私以外の人を招く事もできたっけ？ よし、誰かに整理整頓を頼めば……。って、ダメだダメだ！ R18コーナーにはゼ口魔の本もありました。もし通常コーナーにそれが紛れ込んでいたら、大惨事です。

「やっぱり、自力でやるしかありませんね」

## 楽しく転生09（後書き）

今回は主に日常＋でした。

5歳程度の子供に領地をあげるなんて、ヴァリエール公爵ならま  
ずありえない事でしたね。

しかも、自分が納得した理由が娘の部屋から出て来たゲームって  
……。

まあ、いろいろと事情がかみ合ってこの結果に成ったんです。

まず、ベルナール領とフォンティーヌ領の合併ですが、ヴァリ  
エール領がこれ以上大きく成る事で発生する他の貴族との摩擦を回  
避するための措置です。

まだまだ子供のオリ主が領主選ばれたのは、旧ベルナール領  
が実質的に無人（鬼亜人を住民と数えないため）である事と、ベル  
ナール領の正当な後継者であるクランさんを確保している事です。  
クランさんは、王室の書類上では行方不明（死亡）扱いされていま  
す。

カトレアさんの苗字は、相変わらずフォンティーヌです。親御さ  
んを含めて後見人のような立ち位置……かな？

「私じゃ、領地を治められないから」

と、カトレアさんなら言いそうですので、オリ主に領地を任せた  
とも考えてください。

シヴィライゼーション、元ネタも何もまんまです。ちなみに、ハ  
ルケギニア語で“文明”と言うゲームにしています。

これは、場違いな工芸品や東方からの品ではなく、オリ主が夢幻  
書庫でたまたま見つけた攻略本やガイドブックを見て作った物です。  
ジヨセフさんになれば、熱中して戦争なんて止めてくれるかもと

作ったしだいです。まあ、ムリでしょうが……。

『私の言う……』元ネタはNWのアンゼロット様の名言、もとい迷言です。

アンリエッタを改造して、アンゼ様みたく……いや、ダメだダメだ（笑）。

正義と希望の宝玉の説明をします！

正義の宝玉、能力は純粹なる破壊。アニメでは入手時に魔王を瞬殺し、守護者キリヒトの絶対防御を貫くなど、一番の活躍を見せている宝玉です。

希望の宝玉、能力は確立、可能性の操作。アニメでは、秘密公爵リオン・グンタの持つ“世界のあらゆる秘密が書かれた本”に記載されていた世界の流れを覆しました。

夢幻書庫のこの仕様ですが、知識無双オレ凄い！ から、使えねええ！ に突き落とすためのものです。

ちゃんと本はありますよ？ ただ、探索系魔法がないとやっていけませが……。

## 楽しく転生10（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生10

さて、あれから……いや、この行を常用したい訳じゃありませんよ？

処々細かい事を省くだけですからね？

「いったい誰に言っているんですか、ルーティアお嬢様？」

「克蘭さん、ルーティアお嬢様が不思議な事をするのはいつもの事じゃないですか」

ああ、久しぶりに登場したのにそれは酷いですねミス・アリシエル先生。そんなんだから噛ませキヤ、ゲフンゲフン……！

現在私達は、フォンティーヌ領（元ベルナール領）の再開拓を行っています。

実際に領地を検分して分かった事は、意外にも農業地として利用可能な平地が“確保可能”である事でした。……鬱葱と生い茂る樹海と勝手に住み着いてしまったオーク鬼等に阻まれ、十分な探索が出来ずにいた為にこの場所を見つけることが出来なかったんですね。まあ、確保可能と言っても、比較的勾配が少なくて慣らし易そうな土地という意味ですが。

「それにしても、すさまじい光景ですね……いったいどの様に為さったのですか？」

アリシエル先生は、目の前に広がっている光景を見て啞然としています。

私達の目の前、数日前までは数リーグ先まで樹木で覆いつくされていた場所が……今は、その代わりに倒木で埋め尽くされています。私が行った事は、まず指定範囲の樹木の伐採作業。アイン・ソフ・オウルと正義の宝玉の力でバツバツサと切り裂いてやりました（笑）。羽を広げて超低空フライで木と木の間を抜けると……あ不思議、次々と木が倒れていくのです。

伐採作業とか、本来は業者に頼む事で雇用を生めるんですけど……



…。私の手元には、公に使えるお金がありません。なんと、私にはコレだけの規模の伐採を行うために雇う人件費が払えないのです。ついでに切り倒した樹木の運搬費も払えません。

です……。、

「いえ、皆さんが来る前に、その……伐採しちゃいました。

どうやってやったかは、禁則事項です」

ピンと立てた人差し指を口に当て、集まってもらった人たちに確認します。

聞かないほうがいいかもしれないと、全員が肯いてくれました。いや一人だけ……、

「ルー、アンタいったいどうやったのよ……」

「ダメよ、ちいさなルイズ。ちいさいルーが教えられないって言うんだから聞いちゃダメなのよ？」

訝しそうな顔をするルイズをちい姉さまこと、カトレアお姉さまが嗜めた。

あまり深く質問されると、はぐらかすのも大変ですからね。

「では、残りの作業を始めましょう！」

そう言つて、私は空中に手を突っ込みます。そして、月衣の中から某モ ハンのスラッシュアクスを模した杖、“タケミカヅチ”を取り出すと魔法の詠唱を開始しました。

\*

R e v e r s e   t i m e   s i d e

なぜ、私がルイズ達の前で平然と特殊能力を使い、隠していた魔法まで使っているかと言うと……。それは数ヶ月前に発生したあの

事件がきっかけでした。

私の旧ベルナール領視察が終わり、どの様に開拓を行っていくかを決めていた頃の事です。5歳を過ぎた私とルイズは、周囲から見て恐ろしいほど早熟で聡明の様でした。そこでお父様が、

「二人とも、来週は王城に赴くことになった。」

そして、アンリエッタ姫殿下の遊び相手を勤めてもらいたいのだが……」

「姫様？」

キョトンとするルイズ。まだまだ歳相応の幼さがあるのですが……。って、ホッペにクックベリーが付いてますよ？

私はそれをペロリと拭き取ると、

「……お父様、決定事項なのにワザワザ確認しないでください」

「ふむ、ルーは冷たいなあ……」

いや、決定事項を言うてから確認事項って、ダメですよ？

お父様、ちよつとすねている様ですね。仕方ありませんね、ギューって抱きついてあげます。

まあ、そんなこんなで私達は姫様の遊び相手を務めることになったのですが、

「ルイズ！ そのケーキは私のよ！」

「むー！ 姫様はもう4個も食べたじゃない！ 私なんてまだ5個しか……」

「私より多いじゃないの！」

ああ、殴り合いを始めちゃいましたよあの二人。髪の毛を引っ張り合ったり頭突きをしたり噛み付いたり……二人ともものすごく御転婆ですね。

「あー！ ルーがケーキ食べたー！」

「まあ、本当ですわ！」

二人して声を上げる。

なんですか？ 私も巻き込むつもりですか？ ……とにかく逃げましょう！

ボタン！！

「「まあてー！」」

「お待ちください姫様！ それにルイズお嬢様！」

「だれか、その御三方を捕まえてください！」

ヴァリエール邸で繰り広げられた遁走劇が、姫様も加わってより巨大な王城の中で繰り広げられてしまいました。三人で城中の廊下や階段を走りぬけ、尖塔の窓からロープを使って一気に下まで降りたりもしました。

もちろん、私たちを捕まえるためにいろんな人達が追いかけてきますが……、結果は言わなくてもいいですよ？

まあ、毎回毎回そんな事になるわけではありませんよ？ 私も混ざって喧嘩した事もありましたし……。

閑話休題。

今は、私も含めて三人とも（クランは実家で別の用事を頼んでいるので居ません）王都トリスタニアから少し離れた離宮でおとなしく遊んでいます。ですが、やはり子供には部屋の中でおとなしく遊んでいなさいって訳には行かないのです。

「お外で遊びましょう！」

「わたしもサンセー！」

アンリエッタとルイズが両手を挙げて同意している。私？ うん、一日中家の中に居るのも……外は快晴で、家の中に居るのはもったいないですよ？ うん、そうですね？

あ、でも……、

「ところで二人とも、厳重な監視体制の敷かれたこの部屋から、いったいどの様にして脱出するおつもりですか？」

「「うー」！？」」

そうなのだ。私達が城の中を遁走した結果、最初は私だけ捕まえる事ができなかったのですが……。逃げる事に慣れてきたのか、ルイズとアンリエッタ様までメイドさんだけでは捕まえる事ができない様になってしまいました。そして最終的に、城内を見回っていた

魔法衛士隊の隊員までも動員しての捕獲劇……と、言う事態にまで発展してしまったのです。

その結果、私たち三人がそろって遊ぶ時は通常よりも多くのメイドさんが配置され（逃げられないように廊下を埋め尽くすためだ）、さらに非番の魔法衛士隊まで警備に駆り出されてきます。しかも今日は外に出さないようにする為か、警備がいつもより厳重です。私達がこの屋敷の外に出て遊ぶには、某蛇のコードネームで親しまれるオジサンも真っ青な潜入（正確には脱出）作戦を決行する必要があります。

「うー」

「……しかたありませんね、すみませ〜ん」

リン、リ〜ン

「はい、何でしょうか？」

ドアの向こうで待機しているメイドさん（本当は室内待機が普通なのだが、遠慮なく付き合うために外で待機させている）を呼び出し、

「部屋の中で遊ぶのに飽きましたので、外で遊びたいのですが」

「申し訳ありません、お三方を今日は屋敷から出さないようにと申し渡されておりますので」

「そうですか………だそうですルイズお姉さまに姫さま」

「え〜！」

うを！？ 先ほどから思っていました、二人とも脅威のシンク口率ですね〜。

「すみません、なにか甘い物と飲み物をお願いします。」

……あの二人のお腹を一杯にして眠ってもらいましょう。なんなら一服盛って眠らせても……」

「そ、そんな恐れ多い事は………おやつは直ぐに用意させます」

顔を真っ青にさせて下がっていくメイドさん。さて、

「二人とも………いったいなにをしているのですか？」

「ルー、見て分かりませんか？」

え〜と、シーツやらカーテンなんかを結んで長い紐状にしてるね。つて、まさかそれで窓から脱出する気！？

「……姫様、まさかそれで外に出よう？」

「ええ……。あ、ルイズ、そこはもつとがっちりと縛ったほうがいいわ」

「はい、姫様！」

おいおい、元気よく答えないうでくださいよルイズお姉さま！……

……はあ、仕方ないですね〜、

「その長さだと、下まで降りれませんよ？」

そう言いながら机の上に、

『外で遊べます。』

ちゃんと探しに来てくださいね？

BY・ルーティア』

と、書いた置手紙を置きます。

そして、二人に向き直ると、

「私が連れ出してあげます」

まあ、子供は外で遊ぶのが一番ですよ？

……などと、その時はコレが大変な事になるなどとは微塵も思っても見ませんでした。

「すごいわ！ 誰にも見つからずに屋敷の外にまでやってこれるなんて！」

目隠しを外しながら、アンリエッタとルイズは素直にビックリしています。

“信頼の宝玉”の効果で認識できないようにして、こっそりと屋敷を抜け出してきただけなんですけど。念のために『いいですか？ 私が良いと言つまで目隠しを外す事も喋る事もしてはいけませんよ？ もし一言でも喋ったり、目隠しを外したら……もう外に内緒で連れ出してあげませんからね？』と言ってアイン・ソフ・オウル

の力を見せずに済ませました。

さて、外に出て遊べるようにしたし、あの二人はお花畑で冠でも作って……いるわけがなかった。

「さあルイズ、この森を探検しましょう！」

「はい、アンリエッタひ、いえ隊長！」

なんだか愉快的な探検隊みたいな乗りで森の中に入っていく二人、あのー私は日光浴しながら寝てたいんですけど……。

「もう、ルーも早くー！」

はいはい、今行きます。

……ふむ、しかし森を探検するにしても危険が無いわけじゃない。とりあえず、

「こんな事もあるのかと！」

某宇宙船艦で馴染み深いセリフを吐きながら、毛糸を入り口の木に縛りつけ、帰りの道しるべにした。

念のために月衣の中に入れておいたのだ……。ごめんなさい、本当は編み物の後そのまましまったままだった奴です。

「はやく、置いてくわよー！」

はいはい、今行きます！

\*

A n o t h e r   s i d e

「おい、見つかったか！？」

「いや、こつちには逃げてこなかったぞ」

「まずいな。オーク鬼の群れが王都の近く、それも離宮の直ぐ側に現れるなんて前代未聞だ。」

姫様たちには申し訳ないが、安全が確認できるまで屋敷の中で…

…」

「グループ隊長！ ひ、姫様たちが屋敷からいなくなりました！」

「な？ それは本当か！？」

「はい、連絡用に屋敷に待機させていた私の使い魔を通して確認しました。」

それと、部屋の中に外に遊びに行つて来ると言う置手紙が……」

「ええーい！ 屋敷に残してきたやつらは何をやっておったのだ！？ 早く見つけねば！ もし姫様たちがオーク鬼とでも出くわしでもたら……。」

王軍に連絡を入れろ！ 直ぐさま姫様の搜索とオーク鬼の駆逐を行わねば！」

「隊長！ ここがいかに王都に近くても、部隊が到達するまで時間が……」

「馬鹿を言つな！ 我々だけでも姫様をお探しするのだ！」

「はい！」

A n o t h e r   s i d e   o u t

\*

## 楽しく転生10（後書き）

オリ主のための箱庭、建設開始です。

でもその前に、ちよつと時間を戻して姫様とのエピソードを挟みます。

時間配分とか、キャラたちの年齢が危ない（アヤフヤな）感じですが、これも仕様です。仕様ですから！

最後の部分は、ちよつときなくさめに。そろそろ戦闘描写を入れたい。

某蛇の……、メタル・ギア・ソリッド（MGS）のスネークです。彼のように、ダンボール一つで潜入できるような優秀な工作人員がいれば、宗教狂いなロマリアに対して牽制できるんですけどね。

特殊能力持ちのオリ主や転生者って、ロマリアに異端審問されそうで怖いですし、やっぱり諜報機関って大切ですよな？

あと、ヴィットーリオが教皇に選ばれるのっていつ位なんだろう？もしかして、もう代替わりしてるのかな？

ジュリオ　ヴィンダールブの召喚時期も気になるところ。もしもういるならば、何処から見られているか判った物じゃありません。特にルイズは、この時点では虚無の担い手の候補ですから……チェックされているかも。

うむ……、やはりロマリアは海に沈めるべきか。悩みどころです。



## 楽しく転生11（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

十万PV、一万ユニーク突破ああああ！  
皆様、ご愛読ありがとうございます。

## 楽しく転生11

鬱葱と生い茂る森　　と言っても、既にある程度散策が行える位に舗装された林道の探検を始めて、大体三十分位が経過したと思います。

途中、好奇心旺盛な子供であるアンリエッタとルイズが道を外れて森の中に入っただりもしましたが……今のところ取り立てて問題も発生していません。だから私も気が緩んでしまったのだらう。

そして、実際に死線を潜った事も無い子供である私たちには、森が発し始めた変化に気づけませんでした。

「さあ、どんどん行きましょう！」

「はい、姫様！」

「……」

いや、それでも第六感として機能していた蒼い第三の眼　天宙眼がチリチリと私の額が焦がして、私は正体も分からない不安を抱えていました。

だが、そんなのは気のせいだと、私は頭を振って払いのけてしまった。

そして、それは唐突にやって来た。

「え……？」

私達が林道の途中に作られた休憩所で休んでいると、のっそりと林道の脇に立ち並ぶ木々の影から外見は二本の足で立つ豚の様な……

「お、オーク、鬼？」

本来、王侯貴族のご息女達が遊べる範囲にはいてはならない存在。人肉を貪るオーク鬼が、それも一匹や二匹ではなく十匹も私達の前

に姿を現した。

「プギユアアアア！」

各々が奇声を上げ、手に手に持った棍棒やら錆びの浮いたナタの様な物を振り上げるオーク鬼達。外見こそ二足歩行の豚ですが、その身長は2メートル強もある巨体。身長が1メートルにも満たない子供の私達からして、必殺の文字が浮かぶ凶器を振り回しながら迫ってくるオーク鬼達の姿は悪魔のように映ったかもしれません。

実質、身を守ろうと杖を抜き習いたての魔法を唱えようとしたアンリエッタは、あまりの恐怖に口がパクパクと動くだけで一向に詠唱が出来ていません。ルイズにいたっては、取り出した杖を落としてしまい、ガタガタと肩を震わせながら地面に手を付いています（たぶん杖を拾おうとしてるんですね）。

私？

私も例に漏れず、ただ立ち尽くしていました。

もう眼前までオーク鬼達は迫って来ています。

でも、

動けません。

なぜ？

体が震える。

月衣が防御してくれます。

練武だってしました。

武器だってあります。

でも、迫ってくる奴らを見ているしかできない。

オーク鬼がナタを振り下ろすのを、私はただ見ているしかできない？

二人は？

死ぬ。

そんなの、いやだ。

嫌だ！

動け、

動け、動け、動け、動け、動け、動け、動け、動け、動け、動け、  
動け、動け、動け、動けエエエエ！！！！

ガツキイイン！！！！

「「「プギヤ！？」「」」

「あああ……」

あああ……

あああー！

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」  
こんな小さな体のどこからコレだけの声を搾り出せたのか、私は  
森を揺らさんばかりの声を張り上げていた。

そして、いつの間にか私の手には月衣にしまつてあつたはずの剣  
斧“タケミカツチ”が握られ、数匹のオーク鬼が振り下ろしたナタ  
を受け止めていた。

オーク鬼どもは、全身の筋力と体重を乗せて攻撃したのでしょう。  
なぜこんな子供の腕力で、どうして自分達の攻撃が防がれたか判ら  
ない、と言う顔を彼らは……しているのだろう。

体長が2メートルを超え、高い生命力を持つ彼らオーク鬼はメイジ  
ですら手こずり、ただの剣士では五人がかりでないと倒す事ができ  
ないと言われています。

もし、それが複数で襲ってきたら？

しかも襲われてるのが子供だったら？

だれもが「普通死ぬだろ？」と言う事でしょう。

それがこの世界の『常識』だから……

ハハハ、馬鹿な事を言わないでください。そんな常識は、覆され  
るんですよ！！

左の手首、アイン・ソフ・オウルが輝きを増す。発動させる力は

“剛毅”。

私は自然と口の端が持ち上がり、オーク鬼達に不適に笑い返します。そして、

「吹ーきー飛ーべええッ!!」

一息でタケミカツチを振りぬき、肉薄したオーク鬼達を吹き飛ばした。

だが、斬撃が浅かったようです。

振りぬいた一撃に押され、さらにその後ろにいたオーク鬼達を巻き込んで吹き飛ぶオーク鬼達。だが、オーク鬼に脱落者は皆無。

ダメージらしいダメージは、タケミカツチで腹部にかすり傷が出来たくらいか？ 吹き飛ばされたナタも周囲の木に突き刺さっただけで、他のオーク鬼には命中していない。

重さで叩ききる斧形態で、さらにあの体勢では、さすがにオーク鬼を一刀両断にする事は出来なかった様だ。

ならば……。私はタケミカツチの変形機構を作動させた。

ガッキン！ ガッシャン！

先端にあった斧の刃が手元にスライドし、折りたたまれていた刃金がソレとつながる。刃と刃の連結部の再結合が終わり、斧から剣の姿に形を変えたタケミカツチを正段に構えた。

「退路は私が切り開きます！」

毛系の目印を頼りに、屋敷まで逃げてください！」

後ろで震えている二人を逃がす為、私は声を上げた。視線は、体制を建て直して再び襲い掛かってくるオーク鬼へ。未だに身体のだこかが強張り、私は彼らから眼を離す事が出来なかった。

そして、私は二人が逃げ出す事も確認せずにオーク鬼に向かって行ってしまった。

オーク鬼の群れに突撃しながら呪文を詠唱する。

選択した魔法は“ブレイド”。それも普通のブレイドではなく、私の持つ知識から独自のアレンジを加えたモノだ。周囲を飛び交う電子達をかき集め、タケミカツチの刀身を中心に収束させる。某魔

砲少女（白い悪魔）の嫁のごとく魔力刃を発生させたり放電現象でさえ引き起こせてはいないが、強力な雷を刀身に内包させる魔法だ。私に合わせて迫ってきたオーク鬼達に、私は肌が触れるほどの懷まで潜り込むとタケミカヅチで薙ぎ払った。

「『プギユアア！？』」

さらに一步踏み込み、刃を返して逆袈裟に別のオーク鬼を切断する。そのままの勢いを保ったまま、今度は上段からの振り下ろし。

私が剣を振りぬくと断末魔を上げ、高電圧を纏わせた刃で切られた肉の断面が焼け爛れながら異臭を放ち、オーク鬼達は絶命していた。

「まず、三……！」

「きゃああ！！」

「ルイズ！」

「ッ！？」

自身の背後、誰もいないと思っていた後ろから絹を裂いた様な悲鳴が上がった。

私は、まだまだ未熟だと言う事を忘れていた。

本来は生態三次元レーダーとして機能するはずだった蒼い第三の眼　宇宙眼は、命の遣り取りを行う実戦の空気に吞まれその真価を発揮できない。さらに私は、まだ二人が逃げ出していない事に気を回す事ができず、数匹のオーク鬼に後ろに回られてしまうと云う失態まで犯していたのだ。

後ろを向いた眼に映ったのは、オーク鬼に襲われているルイズ達のだった。それは振り下ろされる凶刃と、それをルイズが姫様を庇う形で紙一重で回避する事が出来ていた二人の姿だった。

二人が地面に倒れ、オーク鬼が再びナタを振り上げる。

サ、セ、ル、カアアア！！

「はあああッ！」

ブオンッ！！

オーク鬼が二度目の攻撃を開始する前に、私は斧形態に変形させ

たタケミカツチをオーク鬼に向かって投げ飛ばし、

ザシュッ！！

そして、寸分違わずオーク鬼の胸板に突き刺さった。瞬動でそのオーク鬼に取り付くと、タケミカツチを引き抜きダメ押しにさらにカ一杯にタケミカツチで殴り飛ばす。

グシャッと肉と骨の潰れる様な音と共に、眼前のオーク鬼が真つ二つに潰れた。さらに返す刃で、今し方叩き潰したオーク鬼の後ろから出てきたもう一体を葬る。

コレで五つ！

残存するオーク鬼はおそらく後は五匹。振り向くと、その全部が木々の生い茂る森から障害物の少ないこの広場に現れていた。もう二人に一歩たりとも近づけさせない！

「ソード・オブ・ガーディアン」！ “ダンシング・エッジ”！  
「！」

私の声に応えて、月衣格納されていた12本の長剣達が姿を現す。

それらの長剣は、一瞬その場に留まると半数が急上昇し、残る半数は複雑な軌跡を描きながらオーク鬼達に迫っていった。

“念力”や“レビテーション”と言ったモノを浮かしたり動かしたりする魔法がある。“ダンシング・エッジ”はその応用魔法で、某機動戦士シリーズで花形装備となっているファンネル オールレンジアタックを模範した全方位から剣による斬撃。未だ完成の域には程遠く、複雑な障害物のある森の中の対象には使用したくなくった。だが、敵が全て何も無い広い空間に出て来てくれたので容赦なく使用してやろう。この機動を、お前たちは見切れるか！？

「ピュギュアアア！？」

「ピギヤ！？」

「ヒヤギュアア！？」

「ピュウウウア！？」

前後左右、さらに上から迫ってくる長剣に突き刺され、オーク鬼

達は次々と絶命していく。だが一匹だけ、剣が急所に当たらなかったのか、私たちに向かって襲い掛かってくる傷だらけのオーク鬼がいた。

「……」

私は、静かに剣を手前に引き、構えた。

最後の一体。生き残った者に敬意を評し、全力をもってこれを葬ろう。

「タケミカツチ、安全装置解除。バーストモード・セット」

音声認識など組み込んではいない。だが、これはこれから何をするかを自らに言い聞かせる為のモノ。モノに力を宿す為の、言霊だ。ガシャ！

タケミカツチが斧から剣に変形し、さらに斧の刃の部分が持ち上がり内部機構を露出させた。

そして、内蔵させた機関が風石が力を解放させはじめ、凄まじい風の力が今か今かと解き放たれる瞬間を待ちわびて唸り声を上げた。だが、まだだ。

まだ。

まだ……今！！

「はあああ！！！！」

そして、迫り来るオーク鬼に向けタケミカツチを突き刺し、内包させた力を開放した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

結果だけ言おう。

最後のオーク鬼は、断末魔を上げる事も出来ずに絶命した。



悲鳴など上げたくても上げられなかっただろう。何せ、一瞬でひき肉よりも酷い状態になって消し飛んだんだから……。

タケミカツチの特殊機構、名を雷撃砲。

風石の力を瞬間的に解放し、スクウェアクラス級の雷を強制的に発生させ、対象に突き刺さった刀身部から対象内部へとその力を解放する一撃必殺の零距离砲撃。本来は、強固な外殻を持つ竜種などを対象として取り付けていたものだ。しかも一発撃つ度に風石の力ートリッジを取り替える必要まである。

私は、ソード・オブ・ガーディアン達を集結させると周囲の警戒をした。まだ、オーク鬼達が潜んでいるかもしれないからだと、すると、

「姫様ー！」

あの声は……、たぶん搜索隊の人達だろう。林道の方を見ると、グリフォンに乗った魔法衛士やらメイドさんやら色々やって来ていたのが見えた。

私は二人に向き直ると　心なしか私を見て怯えているようにも見えてしまった　ゆつくりと微笑んで、

「ルイズお姉さま、それに姫さま、もうだいじょう……ッ!？」

安心した瞬間、私は激しい吐き気に襲われ……。そして、胃の中身を吐き戻しながら、私の意識は暗転していった。

## 楽しく転生11（後書き）

このSSで、初の戦闘でした。

例えばどんなに強力な防御手段を持っていたても、強力な攻撃手段を持っていたても、新参兵が恐慌状態になって硬直する事だつてあります。他のSSだと、何の抵抗もなく戦闘を始めちゃう事が多いですが……。やはりココはネタの使いどころ。有効に使いましょう。

オリ主が、5歳程度の子供ではありえないような動きをしています。……。仕様です。

動け動け〜咆哮。新世紀よりエヴァ初号機の暴走〜シンジ君だつて、最初の出撃は暴れました（笑）。

蒼い第三の瞳　　天宙眼は、完全に空気化してました（すんません）。

オリ主は、機関砲すら跳ね返す砂漠の傭兵や巨大毒蜘蛛がウジャウジャいるロクゴウ砂漠ではなく、極々安全で快適なヴァリエール家で育ちました。

なので、火乃香（18歳）の様に十分に鍛えられていなかったのが、今回の失敗の原因です。

あれだけ無双な彼女も、幼少期はトカゲにやられそうになりましたしね。

ファンネル、誰もが考えるであろう変体兵器（まて元ネタはガンダムですが、白兵戦専用なので、00のファンゲと言つべきでしょうか？

仕様武器名は、ソード・オブ・ガーディアン（守護者の剣）。十二本で一組の長剣です。元ネタは特になし。

魔法の名称は、ダンシング・エッジ（踊る刃）。名称は、FFXIより短剣のWS、ダンシング・エッジ。

タケミカヅチの特殊機構、雷撃砲。

モンハンの属性開放が取り付けられなかったので、この様な武装を装備させました。風石を触媒に強力な雷撃を対象の体内で爆発させる、と言うシロモノです。一発撃つのに風石カートリッジを一発使い、リロードは手動操作です。

とうとうPVが十万、ユニークが一万を超えました！  
これも皆様のおかげです。ありがとうございます！

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生12（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

一週間ぶりの投稿です。間を空けすぎてすみません。

## 楽しく転生12

\*

Another side

「姫さま！ ご無事ですか！？」

「あ、あ、あ……私は、大丈夫です。」

「それよりも、ルイズが！ ルーティアが！！」

「姫様、落ち着いてください。」

「お二方は大丈夫です。ささ、私達と一緒に早くココから離れませんか」

「イヤ！ 私より、ルイズとルーティアを！」

「それは成りません！ 私たちは姫様の身を第一に保護せよとのお達しを受けております。」

「大丈夫です、彼女達は他の隊員が必ずお連れします。」

「ですからご安心して、屋敷にお戻りください」

「……判ったわ……ヒグ、ヒッグ……」

「……よし、姫様をお連れしろ」

「「はッ！」」

「……それにしても、おい！ ルイズ嬢とルーティア嬢は大丈夫か！？」

「はい！ ルイズお嬢様は気絶なさっているだけで、目立った外傷は見当たりません！」

「こちらと同じです！ 気絶しているだけで外傷はありません。ただ、オーク鬼の返り血が酷くて……」

「詮索は後だ！ 早くお二人を運ぶぞ！」

「隊長！ この沢山の剣はどうしますか？」  
「……とりあえず全部拾っておけ！」  
「は！」

A n o t h e r   s i d e   o u t

\*

気だるげな臉を持ち上げ、私が見詰めた先には、  
「……知らない天じよ」

『僕のセリフをとらないでよ！』

……今一瞬、どこか虐めてオーラ全開の少年の悲痛な叫びを受信した気がしましたが……。まあ、気のせいでしょう。

「ル、ルーティアお嬢様が眼を覚まされました！！」  
ん??

なんだか慌しく部屋を飛び出していったメイドさんがいた様になかった様な……。その後直ぐ、ドタドタと誰かが走って来た。

「ルーティアー！」

その声は……お父様？

なんだか、とても気だるい体に無理やり力を込めて起き上がると、  
「ルーティア、身体の方は大丈夫なのか？」

もし、何か異常があるようなら……」

「……うゝん、なんだか妙に気だるいです」

その他は…… うん、気を通してみたけど身体に異常はありません。ただ、少々気だるい…… 倦怠感と言うのでしょうか、それだけです。「そうか……」

「お父様！ ルーティアの意識が戻ったって本当ですか！？」

エレオノール姉さま？ それにちい姉様とお母様も、

「えっと……、どうなさったんでしょうか？」

はて、何で皆勢ぞろいなんでしょうか？

「どうなさったじゃありません！ そんな馬鹿な事を言うのはこの口ですかバカルー！」

アンタが一体どれだけ心配をかけたか……」

「やめないかエレオノール！」

「でも！ この大バカには…… オーク鬼に襲われて、のん気に一週間も眠り続けて、どれだけ私達を心配させたと思ってるのよ！！」

スパンツ！！

頬がジーンと痛む。エレオノール姉さまが、両目に涙を貯めながら、指を揃えた手の平を振りぬいていた。

ふざけないでと、エレオノール姉さまがもう一度私を叩こうとするが、それはお父様に止められていた。

…… オーク、鬼？ …… ツ！？」

「ル、ルイズお姉さまは！？ アンリエッタ様は！？」

そうです、私はルイズとアンリエッタ姫様を守るためにオーク鬼と戦って……。そして、突然気分が悪くなつて気を失ってしまった。あの後どうなった？ オーク鬼は全部倒せたのか？ 二人は無傷だったのか？ 助けは直ぐに来たのか？ 記憶が曖昧で思い出せない。私はベッドから飛び出そうとするが、身体が鉛の様に重い。それでも身体を引きずってベッドから出ようとすると、お父様に止められてしまった。

「ルーティア、先ずは落ち着きなさい。」

二人とも怪我一つ無い、大丈夫だ」

「ほ、本当ですか？」

お父様は、私を安心させるためにニツコリと肯いてくれた。

「じゃあ、二人に……」

「今は二人ともそろぞれの自室で謹慎中だ。会う事は出来ないんだよルーティア」

「会えないじゃなくて、会う事が出来ない？ 私は嫌な予感がしてならず、顔を青くしてお父様に詰め寄った。

「会う事が出来ないって……お父様、本当に二人は無事なんですか？？」

まさか、取り返しのつかない怪我を……もしや死……！？」

「落ち着いてちいさなルーティア。二人とも本当に大丈夫よ？」

ただ、いろんな事情があって二人に会う事が出来ないの」

「事情、ですか？」

「ええ。アンリエッタちゃんは、お城の人達が二人と会わせたくないって言うって会う事が出来ないの」

……お城の人達。なるほど、おそらく反ヴァリエール派とか、私達にこれ以上王家と親密になって力を持って欲しくない人達が邪魔しているのですね？

「それでね、ルイズの事なんだけど……ちょっと言いづらい事があるって」

「言いづらい事？」

「言いづらい事って何でしょうか？？」

「うん、それは……」

「ルーティア」

するとちい姉様の言葉を遮る様に、今まで一言も言葉を発していなかったお母様が口を開いた。

「は、はい！」

「まず、何よりもアナタは私たちに言うべき事があるのではなくて？」

母さんの厳しい視線、私は、

「……心配をかけて、申し訳ありませんでした」



私は頭を垂れて、謝った。誰に、ではなく。この場に集まった全員に向かって。

「……アナタには、言いたい事も、聴きたい事が山ほどあります。ですが……」

厳しい表情のまま、お母様はそつと私の寝ているベッドに座ると、  
「アナタも無事でよかった」

お母様は、私を力一杯抱きしめた。

「お、お母様!？」

いきなりなのでビックリしました。……そう言えば、こういう風にお母様に抱きしめてもらったのはいつ以来でしょう？ この歳の子供でこんな事を思えてしまうって、やっぱりヴァリエール家の教育環境は異常なんでしょうか？

「気分は？」

「はい、大丈夫です」

「もう、立ち上がれる？」

「はい……とつと!？」

お母様に言われ、ベッドから抜け出して床に立とうとしたが、急にクラツと目眩に襲われた。ヤバイと思って踏ん張ってみるけど、ダメ……ん？

「お、かあさま？」

いつの間にか、私の側までやって来ていたお母様が倒れそうになつていた私を支えてくれていた。

「無理は、しなくて良いのですよ？」

アナタは病み上がりのような身体なのですから。

……克蘭」

「はい、何でしょうか奥様？」

お母様に呼ばれて、外で待機していた克蘭さんが部屋中に入ってきた。

「何か暖かい飲み物、それに軽く抓める物を用意しなさい」

「はい、畏まりました奥様。少々お待ちください」

クランはそう言うと、一礼をして部屋から出て行った。そしてしばらくすると、人数分の紅茶とお菓子、それから私のためにスープをカートに乗せて戻ってきた。

「どうぞ、ルーティアお嬢様」

「まずは食べる事、何をするにしても空腹では始められませんからね」

.....

お母様やエレオノール姉様、それにお父様やちい姉様の視線が痛いです。いや、痛いの意味が違うのでなんとはいえませんが……。とにかく、そんなに見られるとトモトモ食べにくいです。

とにかく、私はクランが用意してくれたスープを食べて……。いつの間にか気づいたら鍋を空にしていました。空腹には敵いません。

「お、落ち着きましたかルーティア？」

お母様が少し引いています。なんだか珍しいモノを見れた感じがして役得(?)です。

そう言えば……。このまま今までの日常復帰していいのでしょうか？ やっぱ、このまま何も無かった事で済ませてしまっのもいいけない気がします。

「.....お母様」

「なにかしら、ルーティア？」

「.....今回の件、私は何から話すべきなのでしょう？」

空になった皿とスプーンをクランに渡すと、私はお母様を真っ直ぐと見据えて聞いた。正直に言っていると怖すぎて心臓に悪い。

「そうですね」

そう一拍置くと、お母様はティーカップを置く。

「ルーティア、アナタが話せる範囲でかまいません。」

あの日、何があったのか詳しく説明しなさい」

私が話せる範囲……、

「ですが、嘘偽りは許しませんよ？ それだけは心しなさい」

「……はい、判りましたお母様」

私が今話せる事、何処まで話していいか正直に言っていると判断に困った。だけど、それでも私は“家族”に話せる事を探してユツクリと話していく。

「まずあの日、私達は三人で屋敷を抜け出しました。どの様にして抜け出したのか……その手段を今言う事はできません」

「な！？ バカルー、アナター!!」

「エレオノール黙りなさい。……かまいませんルーティア、続けなさい」

「はい、そして屋敷を出た私達は……」

それから森に目印の毛糸を結びながら進んだ事、途中の休憩所で休んでいるとオーク鬼に襲われ、私がタケミカヅチとソード・オブ・ガーディアンを使ってどの様に倒したのかを説明した。

エレオノールお姉さまは終始眉を顰めていましたが、私が使う聞きなれない単語とオーク鬼との戦闘に、

「タケミカヅチ？ ソード・オブ・ガーディアン？

アンタみたいな細腕で、どうやったら剣でオーク鬼を十体も倒せるって言うのよ！ 嘘を言うにしてももっとまともな嘘を言いなさい！」

と、食いかかってきました。

こういう場合は、実物を見せた方が説明しやすい。私は、月衣からソード・オブ・ガーディアンを呼び出し……そう言えばあの時、どの剣も月衣の中にしまっていないませんでした。

うゝん不味い。基本的に、剣は平民の使う武器で魔法衛士隊の誰かが回収してくれてくれている可能性は低い。最悪オーク鬼の持つ

ていた武器として処分された可能性もある。私がそう思っていると、  
「ルーティアお嬢様ご安心ください。すでに両者とも回収が済んで、  
こちらに……」

克蘭さんが、カラカラと 機械仕掛けの剣斧、タケミカヅチ  
と十二本一組の剣、ソード・オブ・ガーディアン、合計十三本の剣  
を立てかけた台車を押して部屋に入ってきました。

「オーク鬼の返り血が酷かったので、一旦分解洗浄を行いました。  
お確かめください」

おー、さすが克蘭さん。良い仕事です、気が利きますね。

私は、早速一番手前にあった私の身の丈よりも大きなタケミカヅ  
チを片手で軽々と持ち上げた。そして、ひっくり返したり刃の部分  
を見て刃こぼれをしていなのを確認し、

ガッジャ！ ガッシャン！！ ガッキン！！

うん、変形動作も問題無し。つて、あれ？

「……」

その場にいた（克蘭さんを除く）全員が、私を見て驚いた様に  
口を開いていました。……エレオノール姉さま、ちょっとアホっぽ  
いですよ？

「ちょ、ルーティア！？ 色々言いたい事があるけど、まずなんな  
のよそれ！？」

「先ほど説明した機械剣斧“タケミカヅチ”ですよ？」

まあ、エレオノールお姉さまが驚くのも無理はありません。この  
世界でも（もちろん地球でも）この様な力ラクリが仕込まれた剣は  
無いでしょう。エレオノール姉様はマジマジとタケミカヅチを見て  
きます。すると、

「これは、斧と剣を両立させた武器？」

「はい、重心を先端に集中させる事で集中した重さで対象を磨り潰  
す斧の形態。」

刀身を一方方向に集中させ、重心を手元に落とす事で素早い斬撃を  
繰り出す為の剣の形態。

この両者を両立させた武器です」

バーストモードの説明は省きます。あの機構を説明するのは別の意味で厄介な事になると思うので。

エレオノール姉さまは私の説明とタケミカツチを物珍しそうに見詰めて、ある事に気がついた様にこちらを向くと、

「ねえ、ルー……コレだけの量の剣を全部持ってたの？」

そう言つて、お姉さまが危なげにソードの一本を手に取ります。

確かに、それも気になりますよね？ この世界の刀剣は主に重さで叩き切る直剣、ソードの長さが私との身の丈と殆ど同じ（約80センチ）なので一本辺り約2kgだと思っています。それが十二本、合計で24kg。さらにタケミカツチの重さはソードの数倍、約10kgだと思っています。全部合わせるとだいたい子供一人分、コレを子供が全部持ち歩いていたら何て言つても信じられないですよ……、

「はい、実家を出る時からこれらの剣を全て、常に持っていました」

「嘘おつしやい。こんなに沢山、どうやって隠し持っていたつて言うのよ？ そんな事できつこないわ！」

「……出来ない。」

無理。

不可能。

そんな言葉を並べるだけでは、“魔法使い”とは言えませんよエレオノール姉さま？」

そう言つて、私はタケミカツチを待機形態に戻すと、そのまま皆の前で空中に 月衣の中に収納してみせた。

それを見て、またもエレオノール姉様が驚いた声を上げる。さらに私は、ソード・オブ・ガーディアンを浮遊させ翼の様に広げると、コレもまた皆の前で月衣の中に収納していった。

「……今お見せしたとおり、この様にして全ての剣を持ち運んでいきますエレオノール姉さま」

月衣の中に消えてしまった剣を触ろうと、消えた辺りを手探りしているエレオノール姉様。そんな事をして月衣の中には手を入れ

られませんよ？

「ル、ルーティア、一体どこに隠したの？ 正直に答えなさい」

「どこ、ではありません。ココにあるんです」

それから、タケミカヅチとソード・オブ・ガーディアンの出し入れを数回行ってみせた。エレオノールお姉さまはどうやっているのか判らず、杖を取り出してディテクトマジックをかけてみる。が、ダンシングエッジの魔力は分かってても、月衣の存在は探知できないようだった。最終的にお父様とお母様も杖を取り出してディテクトマジックをかけた。それでも結果は変わりませんでした、が、

「ルーティア、これは一体？」

さすがのお父様も驚いています。お母様もすこし顔が引きつっている気がします。

「上手く説明は出来ませんが、この力は結界の一種です」

「結界？ 風や土、火や水の魔法で作る防御の事か？」

「……一般的なメイジが使っている結界と読んでいるモノは、先ほどお父様がおっしゃったとおりの防御に使われるものです。」

ですが、私が身に纏っている結果は少し特殊で……発動させる必要がなく、常に身に纏っています。そして、今し方見せた様にモノを収納する能力を持っています」

「い、いろいろと、疲れたわ……」

エレオノール姉さまは、すっかり冷めてしまった紅茶を一口で飲み干すとそう呟いてソファに腰を沈めた。お父様もお母様も同じようにソファに腰を下ろし、とても疲れたようにしている。

やっぱり自分の娘が訳の分からない力を持っていたなんて、実際に目の当たりにしても信じきれないし、受け入れ切れない事態ですよ。ね……。

「ルーティアちゃんは、とっても便利なクローゼットを持っているのね」

ちいねえさまは、けっこう柔軟な頭をしているようです。でも、クローゼットですか……あながち間違いでもありません。ある少女は月衣を冷蔵庫か食糧庫にしていましたし、私の場合も半分は物置の様な状態だし。

「大体のことは分かりましたルーティア。」

ですが、なぜ今まで家族である私たちにですら黙っていたのですか？」

「……他人と違う力は、奇異の目を向けられます。」

そして、この様に理解できない力は教会から異端として見られるかも知れません。

そうした場合、私に関わった全ての人が不幸になると考えましたお母様」

私が言った事に、一瞬だがお母様の眉が動く。だが直ぐにそれも消え、

「そんな事はさせません、アナタは私達の娘です」

「大丈夫よルー、そんな心配なんてしなくていいのよ」

「そうね、ちいさいくせにマセタ事考えてるんじゃないわよ、ちびルー」

私は、それを聞いて顔を崩した。もちろん、皆がそう言ってくれと信じて教えたんですけど……。やっぱりそう言ってもらえるととても嬉しいです。

私のこの力については、私が教えても良いと言う人意外には誰にも言わないという事で取り決められました。こう言う事はお母様が徹底してくれるので、余計な心配をする必要はありません。

「今日のは、もう終わりにしよう。ルーティアも疲れただろう？」  
お父様がそう言って立ち上がる。

たしかに、私もずっと話せばなしで少し疲れてしまいました。それに、私の事情をそれぞれの中で消化する時間も必要です。

……そう言えば、ルイズお姉さまはいつたいてうしたんでしょうか？



## 楽しく転生12（後書き）

今回は、ルーティアが自分の異能を家族に教える話でした。

こういうイベントは、本来かなり後に入れて一悶着起こすのが定番ですが、このSSでは今後オリ主が動きやすくなるようにこのタイミングで明かしてしまいます。

娘に甘いルイズパパや、ああ見えて結構子供思いなカリィヌさんなら、幼少期のうちに異能持ちであると教えた方が後々プラスになると考えました。

ついでに、エレオノールさんも自分の妹を実験台にするとか言い出す前の段階で認知して欲しかったのでこうしました。

しかし、会話メインの話は疲れます。

遅れた理由ですが、ストックしていた作品の内容が気に入らなくなっただので、大幅に加筆修正をしていました。

会話の内容とか演出とか、色々と無理があっただんです。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想も待っています。どしどしお願いします。

### 楽しく転生13（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

### 楽しく転生13

「それでは、ルーティアも疲れただろうし、我々も休むでしょう」  
お父様がそう言って立ち上がり、他の皆もそれに賛同する。たしかに、あれからずっと話しっぱなしで少し疲れてしまった。

そして皆が部屋を出て行く中、ふと気になる事を思い出しました。  
「そう言えば、ルイズお姉さまはどうされましたか？」

私の発言に場が一瞬凍る。だけど、ちいねえさま達はそんなのは気のせいだと言う風に装って、

「ルイズは……」

「ルイズは今、別室で謹慎中です。」

しばらくの間、遊ぶ事を忘れたいほど勉強をするのだと自ら申し出たので、そのようにしています」

そうなんですか……。遊ぶ事を忘れたって、ハッキリ言ってこの歳の子供では異常ですが、それなら仕方ありません。

「解りました。それではお休みなさい」

明日の朝食にでも、ルイズお姉さまの顔を見れるといいなあ。

そう思いながら、私はまどろみに沈んでいった。

でも、なんだか胸の奥でモヤモヤとした気分の悪くなる様なモノが渦巻いている気がした。

\*

A n o t h e r   s i d e

「私は、無力ですね……。実の娘達に何一つしてあげられない。」

アナタ、私は母親失格なのでしょうか？」

「……いや、そんな事はないさ。」

それよりも、早くルイズを説得しないと……」

「ごめんなさい、私は行けません。」

私が行っても、ルイズに手を上げる事しかやり方が分からないので……」

「分かった……。カリィヌや、気を落とさないでくれ。誰にだって不得意な事はあるさ」

「ええ……。そう言ってくれると助かります」

Another side out

\*

次の日、目を覚ました私は、直ぐに寝間着から普段着に着替える  
と食堂に向かった。

ここは王都の別宅。私自身、ここを使った事がなかったので道に  
迷いそうになりましたが、蒼い宇宙眼の力でちいねさま達が集ま  
っている場所を特定し、その場所に向かいました。うん、しかもル  
イズお姉さまも一緒にいます。

私は、弾む気持ちを抑えながら歩みを進めました。……でも、何  
でしょう？ さっきからモヤモヤとしたやな感じがします。

「ルイズ、いい加減にしてここから出てきなさい！」

ルーティアが目を覚ましたんだから、顔くらい出して上げなさい  
！」

おや？ 皆が集まっているから食堂だと思っていましたが……こ  
こは廊下です。

……なんだか、いやな予感がします。

「イヤ！ ルーなんかと顔も合わせたくない！！」

「っ！？ ルイズお姉さま！！」

「ルーティア！？ も、もう起きて大丈夫なのか？」

お父様たちが、私の身体の事を心配して声をかけてきます。ですが、私はそれに一切耳を傾ける事なくルイズお姉さまのいる部屋のドアの前に立った。

「ルイズお姉さま、ルーティアです！ このドアを開けてください  
！！」

「……」

返答は無言。何の声も返っては来ない。

ギィィ……。

そして、ユツクリと僅かに飽いたドアからルイズが顔を出した。

私は、嬉しくなつて一歩前に出ようとして、その足を止めた。ドアから顔を覗かせているルイズの表情はとても険しく、まるで憎むべき敵を見ているような目を私に向けていた。私は、ルイズお姉さまが発する氣に足を止めてしまったのだ。

「ねえ、ルー！。

なんでルーは魔法使えないふり、してたの？」

そしてルイズが、誰も聞かなかった魔法を使えない振りをしていた理由を聞いてきた。

私は、

「……」

それに答えられなかった。

ただ、ルイズにこれ以上魔法が使えない事に苦しんでほしくなかった。ただ、それだけが理由なのに……。

「キラィ、ルーなんてダイツキラィ！」

ルイズはそう言つと、私を突き飛ばして再び部屋の中に戻つていった。バタンと、ルイズお姉さまによって閉められたドアがまるで今生の別れを告げる音の様に私は聞こえた……。

ペタンと、私は成す術もない様に廊下に倒れ、そのまま崩れ落ちた。

ポタポタと、何かが零れ落ちています。これは何？

「……」

「ルーティア、ルイズの事は……」

お母様にお父様、それにお姉さま方が何かを言っていますが……私の耳には何を言っているのか入ってきません。

ただ私の中では、

キライ。

ダイツキライ。

ルイズの言葉が、終わる事無く木霊していた。

その後、私は克蘭さん他メイドさん達に運ばれ、気がつくとベツドの上でした。そして、私は美味しいのか不味いのかわからなかった食事を胃に流し込むと、意識は次第に闇に沈んでいきました。

A n o t h e r   s i d e

「コラ！ いい加減に開けなさいおちび！」

もう何度目かわからない。このバ力を部屋から出す為に何度も説得したが、結局私達は間に合わなかった。

「あーもう！」

私は、杖を抜いてドアを破壊しようとする。だけど、カトレアがそれはダメだと止めてくる。

「それじゃ、ダメなの。そんな事をしても、ルイズちゃん達の為にはならないわ」

分かってる。分かっているけど……、

「それでもねカトレア、無理やりにも引つ張り出して顔を付き合わせないとわからない事もあるのよ！」

杖を抜き、硬く閉じたドアを無理やりにごじ開ける。さあ、あの  
バカには……！！？

「い、いない！？」

「なんで？ つ！？ 窓が開いてる！」

「外に出ちゃったみたいね」

「のん気な事言つてないの！！」

カトレアは、お母様とお父様に連絡して！ 私は一足先にルイズ  
を探しに行くから！」

「分かったわ」

まったく世話が焼ける妹ね！！ 変なところに行く前に捕まえな  
いと……、

「と、そのアナタ、ココをピンクの髪の子供が通らなかつ  
……ジャン坊や？」

「？ エ、エレオノール姉さんじゃないですか！ 久しぶりですね」  
グリフォンに乗っていた衛士がいたから声をかけて見たけど、ま  
さかジャン坊やだとは思っても見なかったわ。

「ええ……、そう言えば魔法衛士隊に入ってたって聞いたわね？」

「はい、自分に適正があったのか、グリフォンが懐いてくれました  
ので先週から見習いをやっています」

グリフォンねえ…… そうだわ！

「ジャン、ちよつと借りるわよ」

「は？」

呆けてないで、邪魔よ！！

私は、ジャン坊やをグリフォンから引き釣り下ろすと、乗馬の要  
領でグリフォンに跨った。

「く、大人しくしなさい！！」

グリ！！ 急に暴れだしたので、首根っこを思いっきりひねって  
やった。そしたら一気に静かになり従順になる。そう、それでいい  
のよ……！

「私の言う事を聞きなさい、良いわね？」

「ちょ、こまります！ 私はこの辺りの警邏を……」  
「アナタの婚約者が行方不明なのよ？ そんな事言っていないで探すのを手伝いなさい！」  
「ルイズが！？ ……それならグリフォンから引き釣り下ろしたりしないでください！ 僕もお供しますから！！」  
「ああ、こんなにでつかい手形まで作って……大丈夫かい？」  
「さっさと行く！！」  
「……あの娘、変なところに入って取り返しの付かない事になつてなきゃいいんだけど」

A n o t h e r   s i d e   o u t

\*

なんだか、外が騒がしい。  
私は、ぼんやりとする頭を揺さぶりながら起き上がった。  
……いつの間にか、眠ってしまっていたようですね。  
頬が妙に力サつく感じがする。手を当てて見ると、パリパリとしていました。

……そっか、私は、ルイズに『キライ』って言われて……泣いたんだ。

そう思っていると、ガチャリとドアが開いた。

「目を覚まされましたかルーティアお嬢様？」

「克蘭？ アナタ、まさかずっと？」

克蘭は静かに頷いた。

「はい、お嬢様が泣き疲れて眠られてからずっと。

もっお昼を過ぎましたが、何か口になさりますか？」

「……いえ、それよりもルイズお姉さまは？」



クランは、なにか言いづらそうに首を横に向けると、

「現在、ルイズお嬢様は行方不明です」

な……！？

「どういう事ですか！？」

「それは……」

「理由の説明は後です！

それよりも、ルイズお姉さまがいなくなってどれ位経ったのですか！？」

「今朝、お嬢様と会われて直ぐに……」

そんなに！？

それから、お父様とお母様それにエレオノール姉様達が搜索しているが、いまだルイズお姉さまを発見できていないとクランから説明を受けた。

おかしい。ルイズお姉さまがいなくなって、お母様達は直ぐに搜索を開始したと聞いた。子供の足では、貴族の別宅の並ぶこの一等地区画から別の区画に行くにしても相当な時間がかかるはずだ。例え短期間で抜けたとしても、その後、治安の悪い区画までまだかなりの距離がある。その間にお母様方が見つけれないわけがない。

「……胸騒ぎがします」

そう、とても嫌なモヤモヤとした感じがします。

なんででしょう……？

そう、もうお姉さまと合えなくなる様な……、

「っ！？」

そんな事、絶対に認めない！！ 私は、左手のアイン・ソフ・オウルを見詰めた。

「クラン、私もルイズお姉さまを探しに行きます」

「でわ、私もお供します」

「いえ、クランはちいねえさまと一緒に残っていてください。

帰ってきたら、美味しいご飯が食べたいので」

私はそう言うと、アイン・ソフ・オウルを展開した。

そして、  
「私の光よ……」

## Another side

「エグツ！ ヒグツ！」

私は、どこか分からない場所を歩いていた。  
うつん、ココが何処なのかは知っている。

ココは、王都の別宅だ。

だけど、誰にも会うことが出来ない。

「ねえ、誰かいないの？」

どのドアを開けても、誰もいない。

ちい姉様もエレオノール姉様も……。

お父様もお母様も……。

そして、ルーティアも……。

まるで、はじめから誰もいなかった様な屋敷……。そこまで考えて、私は体の震えが止まらなくなった。

怖い、怖いよ！

誰もいなかった。それが怖いのだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！」

家族なんていなくなれば良いなんて思ったりしてごんなさい！

「憎かった訳じゃないの。ただ、許せなかっただけ……。

使えない振りしていたルーが、許せなかったただけなの」

なんで、私は魔法が使えないの？

なんで、お母様は私に優しくしてくれないの？

なんで、お母様はルーにあんな優しい目をするの？

「優しくしてくれたルーが、許せなかったの。

優しくされる資格のない私が、許せなかったの……！」

優しくしてくれないお母様から、ルーはいつも私を守ってくれた。  
そして、私に懐いてくれた。慕ってくれた。  
でも……、

「なんで、嘘ついてたのよお……」  
嘘をつかれたのが、ショックだった。

あんなに綺麗なルー笑顔が、私を嘲り笑っているように見えてしまった。

だからか、私は『皆、消えてしまえ』と願ってしまった。

「……ルイズお姉さま！」

そして、一番聞きたかった。それでいて、一番聞きたくなかった人の声が聞こえた気がした。

A n o t h e r   s i d e   o u t

そこは、隔離世。現世の世界と隔絶された場所……。

「……ルイズお姉さま！」

“希望の宝玉”の力で、ルイズお姉さまの場所に赴いた私が見たのは、床に蹲り恐怖に震えているルイズお姉さまでした。

「ルイズお姉さま！」

ルイズお姉さまの肩を両手で掴み、揺さぶる。だけど。ルイズお姉さまは私の手を振りほどくと再び蹲り、

「ルーなんかと顔を合わせたくない！」

拒絶される。

それでも私は、ルイズお姉さまの肩に手を伸ばし、

「ルイズお姉さま……」

「離して……」

ルイズお姉さまを揺さぶる。

「ルイズお姉さま！」

お願いです、こっちを見てください！

そんな私の願いが通じたのか、ルイズお姉さまが顔をユックリと持ち上げて私を……虚ろになった鳶色の目で見つめてきます。

「……なによ、嘘付き」

う……、

「……確かに、私は魔法の才能を偽ってしまいました」

「なんで？」

「それは……」

「私を影でバカにするため？　いつつも私の魔法が爆発する私を見て」

「それは違います！」

違います！　そんなつもりはありません！

「じゃあなんでよ！？　なんでだましてたのよー！」

ルイズお姉さまの言葉に、私の喉の奥はカラカラに乾いていく気がします。言うべき答えは、分かっている。でも言えない。言える訳がない。

真実を教えてしまえば、ルイズお姉さまに待っているのは、二度と心から笑う事の出来なくなる未来。ただの珍しい系統で済ませられない“力”だ。

「……あの笑顔も、全部嘘だったのルー？」

「っ！？　違います！」

私が、魔法を使えないように装っていた理由は……。

……ルイズお姉さまが『妹に見本を見せて上げられない姉』と呼ばれないようにするためです」

それが、私が今出せる精一杯の答え。原初の思い、一人で辛い思いをして欲しくない。

ギリッと、まだ生えそろったばかりの歯を軋ませながら、ルイズは私を睨みつけてくる。そして、

「ふざけないでよ！ なによ！ なによ！ なによー！」

いきなり立ち上がると、ルイズは私を叩きだした。

「なにが、『妹に見本を見せて上げられない姉』よ！ ふざけた事、言ってんじゃないわよ！」

イタイ！ イタイ！

………ただ我武者羅に振り回すだけ、ただそれだけの拳は私を何度も叩いてくる。でも、私はただただ身を折りたたみ、ルイズお姉さまに謝る事しかできない。

そして、私を叩いていたルイズお姉さまは、拳を振り上げるだけの力も無くなり、とうとうその場で泣き出してしまった。

「ルーティアのバカアアア……！」

「はい、わたしはバカです……お姉さまを助けようとして、逆に傷つけてしまう愚か者です」

泣き崩れるルイズお姉さまを、私も泣きながら抱きしめた。

### 楽しく転生13（後書き）

皆様、大変長らくお待たせしました orz  
前回の更新からもう半月近くもたっていましたね……。

今回も会話がメインの話でした。  
タイトルに楽しくくと、書いているのに主人公達は泣いてばかりです。

本当はこの話でルイズと仲直りさせる予定でしたが……。気づいたらいつもの倍以上の内容になっていたので、内容を半分に切りました。ですのでもう一話ほどルイズとの和解イベントが続きます。  
ごめんなさい orz

本当は、会話だけじゃなくてバトルも考えていたんですが……。安直過ぎるかと考えてこうしました。

次の話は、比較的早く出せるかと……。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想もお待ちしております。

## 楽しく転生14（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

そろそろ、オリ主の周囲がチート力を持ち始めます。  
手始めは……。

## 楽しく転生14

「……落ち着いたかしら2人とも？」

！？

「ちい姉様??」

私達が泣き疲れ、落ち着いたところでちい姉様がそつと私たちを抱きしめてくれた。

いつの間に……と言うより、どうやってココに来たんですか??

「ふふふ、いつの間にかココに来ちゃってたの」

いつの間について、ありえませんか?? ココは、あつちとは隔離された世界。いわば異世界です。生半可な迷子スキルでは迷い込めないような場所なのに……。

「ちい姉様、その手!？」

ルイズが、カトレアお姉さまの手の平を見て顔色を変える。私もその手の平を見て見ると、お姉さまの手の平は爪が深く食い込んだのか所々から血を滲ませていた。

「大丈夫よ、コレくらいなら薬を塗っておけば直ぐに治るから」

いったい、いつから私たちの事を見てくれたのだろつ。その手は、ナニかを堪えて傷ついたように見えました。

私は、そつと左手を傷ついた手に添えると、“慈愛の宝玉”の力で傷を癒します。

「ありがとう、ルーティアちゃん。」

ねえ、ルーティアちゃん。ルーティアちゃんは、ルイズちゃんにだけ辛い思いをして欲しくなくて、自分も辛い思いをしてあげたのよね?」

「……」

「でもね……辛い思いをしている人は、その気持ちを共有して欲しいって思っているだけじゃないの。その辛さから助けて欲しいって思ってもいるのよ?」



私もそうだったから……」

ちい姉様……辛い思いをしている人は、その気持ちを共有して欲しいって思っているだけではない。その辛さから助けて欲しいとも思っている、か……。そう言えば某元908ATTの人も言っていましたね『病人は、医者と同じ病気にかかって苦しんで欲しいんじゃない。この病気を一刻も早く治して欲しいんだ』って、

「はい、ちい姉さま」

「じゃあ、ルイズちゃんにもうちよつと本当の事、教えてあげてもいいんじゃないかな？」

……なんか、ちい姉様にはめられた気がします。絶対に気づいていますよね？ 色々と。

「ちい姉様、私にだけ言わせるのはずるいですよ？」

ちい姉様は微笑むだけです。ルイズお姉様は、自分が仲間はずれにされていると怒ります。でも、なんだか、笑っているように見えました

「ふふふ。私とルーティアちゃんは、ルイズちゃんが出来の悪い子だなんて思っていないって確認しあったの」

?? と、ルイズお姉様は不思議そうに首をかしげました。

正直に言ってココで虚無の系統の事を教えるのは、今後のルイズお姉さまに悪影響を与えるだけだと考えています。だから、

「ルイズお姉さまの魔法は、完全な失敗ではありません。」

なぜなら、原因と結果を繋ぐ法則が完全に崩壊しているからです」

「それって、どう言う事？」

「魔法は、本来は失敗しても爆発はしません。」

何故なら、熱を集めて火を起こす魔法でも、制御が出来なければ熱が逃げて形になりません。

風を起こす魔法なら、空気の流れを操るだけの魔法で、操作に失敗したら見当はずれな場所に風を吹かせるだけです。

土を操る魔法も、制御に失敗しても形が定まらないか動かせないだけです。

水の魔法も、そもそも水を燃えさせるには、水を一旦油に変える必要があります。

コモンマジックに関しても、爆発するなどという因果関係が入る余地はありません。

ならば、お姉さまの魔法は、全て“爆発という結果”に置き換わっていると言っ仮説が立てられます」

「……全部、爆発に置き換わっている？」

「仮説の段階ですが、そう考えるのが妥当だと……ただ一つ言える事は、お姉さまは確かに魔法を行使しているという事です」

「……魔法は、使えているのよね？ 爆発になっちゃうけど」

「それが、ルイズお姉さまの“魔法”です。

だから信じてあげてください、自分の“魔法”を。私たちが信じるアナタの“魔法”を信じてください」

ちよつと、臭いセリフでしたね。

でも、ルイズお姉さまは戸惑っています。事実を消化しきれないのか、拒絶しているのか……。

「お姉さま方、今からまだ誰にも教えていない私の異能（力）の一つをお見せします」

そう言つと、私は眼を瞑つて深く深呼吸をした。そう、私にはルイズが魔法を使っている事を理解させるための手段があります。

「え！？」

私は今、蒼く輝く魔力の海を“蒼い宇宙眼”を通じてお姉さま方に見せています。そして、“蒼い宇宙眼”は私の額に文様として象眼されているのが見えるでしょう。でも、そんな事より、

「お姉さま方が今見ているのは、私達が普段使っている魔法を使うための力です。

試しに、杖を持って魔法を唱えて見てください」

私がそう言つと、カトレアお姉さまは恐る恐る杖を取り出し“ライト”の魔法を唱えた。周囲を漂う魔力素が術者であるカトレアお姉さまに吸収され、杖を介して固有魔力色に変換され、魔方陣の形

になって杖の先で明かりという形に収束する。

「すごい……」

「ルイズお姉さまも」

「で、でも私が魔法を唱えると……」

「魔法を完成させなければいいのです。その時に何が見えるか、しつかりと見てください」

ルイズは肯くと、少し詠唱が長い魔法を唱えた。だが、それも直ぐに止まる。魔力素の動きはカトレアお姉さまと同じだが、その際に動く魔力の姿が、まるで某魔砲少女のSLBの様にルイズお姉さまに収束していく。そして、形の定まらないボロボロで幾何学な魔方陣へと注がれて行った。

「……これが、私の使っている“魔法”」

「はい、それがお姉さまの“魔法”です」

それからルイズお姉様は、何度も魔方陣を出して自分が魔法を使っているんだと確認しました。

ルイズが自分の魔法に夢中になっている傍ら、

「さて、ちい姉様」

「なにかしら、ルー？」

「いえ、そろそろココから出て、クランさんの用意してくれた美味しいご飯を食べたいと思います」

「そうね、でもどうやって出ましようか??」

「……ちい姉様、とぼけなくてもいいですよ？ ココを作ってるのって、ちい姉様ですよね？」

私は確信を込めて、ちい姉様に聞いた。

「あら、なんでそう思ったの?」

「簡単です。先程の力で、この世界を作っている力の流れがちい姉様から流れて来ているのを確認できました」

ふふふ、落ち着ける環境さえあれば未熟な私でも“蒼い宇宙眼”

の効果を一十二分に発揮できるのです。ちなみに、ここにいるちい姉様が本物かどうかもすでに確認済みです。

「あら、もうばれちゃった」

チロツと、悪戯がばれた子供のように舌を出すちい姉様。なんだが最近、性格の方がとつても活発になったというか……。

ちい姉様は、胸元から若草色の丸い宝石の付いたネックレスを取り出すと、

「アストレアさん、セツトアップですよ」

つて、ええ??

一瞬、そのネックレスが光ったかと思うと、ちい姉様の手には姉様の身長と同じくらいの長さの杖……いえ、戦斧が握られています。

り、リリなのデバイスですかちい姉様？ 外見は、フレームで防御された若草色のクリスタルの横に刀剣の様な物と二つの筒がついた様な バルディッシュの様な格好です。色は白、青、赤のトリコロールカラーですが……。

「ルーティアちゃんが寝ている間に、こっそり“使い魔を召喚”しちゃったの。」

アストレアさんって言うのよ？」

「マスター、気軽にアストレアって呼んで下さいよ」

しかもインテリジェンスですか……。もういいです。“自称天使様”のお告げの通り、パワーUPしてます。

「だ、大丈夫ルーティア？」

「だ、大丈夫ですちい姉様。ちょっと頭痛がしただけです」

“慈愛の宝玉”で症状を緩和。よし、大丈夫です。

そうです、ちい姉様がリリカルな魔法（砲）少女になっただけです。今ピー歳なので、あと何年魔法少女をやっているか……ギョム！

「ルーちゃん、いますごく失礼な事考えてたでしょ？」

「イタイイタイイタイ！」

顔は止めてー！

「ま、いいでしょう。それじゃアストレアさん。結界を解いてください」

「イエス、ママ」

\*

それから数日が経ちました。

あの後、屋敷に戻った私たちはお父様にお母様、グリフォンに乗ったエレオノール姉様からコツテリとお叱りを受けました。でも、いいんです。ルイズお姉さまと、もう一度仲良くなれたんですから。そうそう、エレオノールお姉さまは無理やり王立魔法アカデミーを休んでいたらしく、師事している師匠に速く戻ってくるようにと言われて血相を変えてアカデミーに戻っていきました。あと、グリフォンを街中で乗り回したとかでお母様から何か言われていたようです……。

ルイズお姉さまとちいお姉さまは、お父様と共にヴァリエール領の実家に一足先に帰りました。姫様との交友の件については、後で色々と根回ししてくれるそうです。

そして残った私達は、もう少し王都の別宅で休養を取る事になりました。

「ふっ、ふっ！」

私は別宅の庭先で、仕える魔法を一通り唱えて、ソード・オブ・ガーディアンを動かして、タケミカヅチを振るいながら、どこか身体に異常がないかの確認をしていた。

さすがに数日間、何もせずにベッドに倒れていただけあって体中が鈍ってる感じがしますが……それ以外はいたって正常です。

「もう、魔法を使えないふりはしないのですね……？」

「はい、ルイズお姉さまが『必ずアナタに相応しい姉になって見せる』って約束してくれたんです。

だから、私はもう二度と、魔法が使えない振りなどしないと約束しました」

お母様にそう言うと、タケミカツチを月衣にしまい、克蘭が持つてきてくれたタオルで汗を拭き取ります。ふと見ると、心持ですがお母様が笑っている気がしました。

「ルーティア、身体の方は大丈夫ですか？」

「はい、多少鈍った感じがしますが、それだけです」  
よかったと、お母様は安心したようにする。

「お嬢様、奥様、朝食の用意が出来ております」

もうそんな時間でしたか、

「ええ、すぐに行きます」

ちなみに、その後お母様から模擬戦の誘いを受けてしまいました。

……拒否権ってありますか??

R e v e r s e   t i m e   s i d e   e n d

\*

さてと……、時間は戻ってフオンティーヌ領は再開拓地区です。

私が伐採した森の木々は、木炭の材料として売れるように枝葉を取り除き　枝葉は土と合わせて錬金で肥料を作り変えました。建材だと、歪んだりひび割れていたりして安く買い叩かれますからね。それまでの間は、地域の片隅に積み上げておきます。

でも、一本一本レビテーションで運んでたら魔力（精神力）が持ちません。なので、私はゴーレムを作りました。

「名づけて建設重機型多脚ゴーレム、クラブマン・ハイレッグです！！」

卵の様なボディーに、でっかいフォークの付いた四本の脚。そう、あのクラブマン・ハイレッグです！……判る人がこの世界にいません。

「パトレイバーですか？ チョイスがマイナーですね」  
「アストレアさんありがとう。でも、一言余計です。」

これは本物の建設用重機が用意できないので、クリエイト・ゴーレムで再現した代用品です。キャタピラ式の重機にせず四脚なのは、切り倒したただけなので未だ切り株が沢山残った平野が姿をさらしているから……。あとは、キャタピラの動かし方を私以外知らない事です。

数百本単位の切り株を手作業で掘り起こすのは重労働でしたが、  
「なるほど……これは作業がはかどりますね！」

久しぶりに登場したアリシエル先生が、面白い玩具を与えられた子供の様にクラブマンを操作しています。切り株の撤去と整地作業、怠けないでくださいね……って、

「もう、ダメです……」  
などと言って倒れてしまった。はしゃぎ過ぎて魔法を使いすぎたんですね。

その後、ぶっ倒れたミス・アリシエル先生はクランに頼んでベッドに運んでもらいました。

## 楽しく転生14（後書き）

やっと過去編終了です。

無理やり感はありませんでしたが……って、ルーティアさんタケミカツチでドツかないでください！　ごめんなさい！！

で、チート力補正です。手始めに、カトレアさんにはリリカルな魔法（砲）少女になってもらいました。もともと敵役が持っている武器として考えた案でしたが、ただやられちゃうのももったいないのです。

名前は、アストレア。レイハさんと同じくインテリジェンスなデバイスです。

形状はバルディッシュに似ていると表現しましたが、まったくの別物です。ちなみに転生者で、原作知識はありません。守備範囲外だったんです。

能力的には、ミッド式魔法が使えるようになります。

ちなみに、オプションの武装としてGNソード（柄が長いからランス？）にGNスナイパーライフル、GNバズーカにGNシールド等々のオプションと余剰パーツがあります。

そうです、ガンダムです。きつと本人は、リリなのか00の世界で暴れたかったんでしょう。ちなみに全部魔法です。

カトレアさんは、打ち落とせな……ザシュ！！

クラブマン・ハイレッグ。

元ネタは機動警察パトレイバーより、篠原重工が誇る量産機ことクラブマンです。ちょっと手を加えて、作業具を取り付けるハードポイントが追加されていますが、おおむね原作と同じ形です。



この作品中での大きさは、原作より小さめです。小型重機に足がついた位なので、だいたい三メートルくらいでしょうか？

ちなみに、普通にクリエイト・ゴーレムで作っただけなので油圧シリンダーとか重機に必要な物は付いていません。重機って呼んでいいのか？？

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想もお待ちしております。

## 楽しく転生15（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生15

「すごいわねえ……、もうコレだけの森を伐採しちゃうなんて」

素直に感心するカトレアお姉さまにルイズお姉さま。

「はい、ちい姉様。凄いでしょ？」

まだ無い胸を精一杯に張って自慢します。

用途に合った形の道具を使い、効率よく作業を行う事で作業時間は短く出来ます。

それと、魔法は複雑な事をしようとすればするほど消耗が激しくなります。ですので、単純な操作だけに絞る事で長期間の作業も可能になったため、コレだけ短期間のうちに作業が終えられたのです。そう教えると、また感心してくれます。その側でルイズお姉さまが、私が言った事のノートを必死に取っています。お勉強ですね？

そうそう、カトレアお姉さまの病気は“慈愛の宝玉”の力で完治しました。今では、こうして普通に外を歩き回ったり、領地の視察も出来るまで回復しています。そう言えば、アストレアさんも何か補助をしているようです。変な事はしていませんよね？ もしいたらお母様と私が肅清しますが……。

そうそう、このまま何事も無ければ来年には一年遅れてトリステイン魔法学園に入学する予定だとお父様は言っていました。

閑話休題。

「さてと……」

これで開拓の第一段階はおおむね完了しました。

私はクラブマンから降りて、休憩に使っている小屋に戻ります。

これまでほぼワンマンプレーでしたので、これからの作業工程を他の人と確認する必要があります。

一番最初に開拓に携わるのは、私に克蘭、アリシエル先生の三人です。ちい姉様とルイズお姉さまは一応部外者なんです。他にもお父様から借り受けた衛士達と大工など必要になるだろう人材を2

0名ほど……。私は、全員がそろっているのを確認すると、  
「お待たせしました。では、始めましょう」  
そう言って、開拓会議を始めます。

「まず、開拓範囲の森林の伐採と整地が終わりました」  
そう言って、テープルの上に乗せた領地の模型から作業が終わった範囲の木々を消し去ります。

「次の作業は、ココを流れている川の整備を行おうと考えています。  
上流にある源泉を石垣で囲い、川そのものを完全に作り変えて……」

模型の川の源泉を囲む様に石垣が築かれ、そこから石で囲われた水路が平野部に向かって伸ばしていく。さらにその一部が地上を離れると、水道橋となって川の合流地点まで真っ直ぐ伸びていきます。  
「そして……」

山間部を中心に、住宅街を模した家屋の模型。平野部には大規模な農地の模型を次々と配置していきます。

「……ココまでが、今現在私が考えているフォンティーヌ領の開拓計画の案です」

「えっと……こんなすごい事、本当にしちゃうの？」  
それを見て、ルイズお姉さまがコレが実現できる物かと聞いてきました。

「はい、お姉さま。」

治水は、火災などを迅速に消化するのに絶対に必要になります。それと、街の衛生面でも必要になります。なので絶対に必要です。

それに、この領地は山間部が多くて農作業に向いた平野部が少ないのです。ですので、この様にしないといけないと考えました。平野部で大規模な農作業が可能になれば飢える事ありません。

それと、山間部で農業をするとしてもクラブマンの様な重機型ゴーレムが使いにくくなります。なので、手作業でやらなければいけない作業が増えてしまって、人手が沢山必要になります」

「そう……でも、肝心の領民はどうするの？」

ヴァリエール領から有志を募るとかかしら？」

「いいえ。初期移住者は、ヴァリエール領からは募りません。ですが、もう移住者の大体の目処は立っています」

それを聞いて、ちい姉様はビックリしますが、直ぐに冷静さを取り戻します。

「いつの間に？」

「それは秘密です。」

それに、もうその第一陣がこちらに向かってきています。

彼女達の到着は、まだ半月程先になりますが……」

\*

それから一週間後、私達は、発注しておいた食料品や生活必需品、建材などを積んだ荷馬車を出迎えています。荷物を下ろし終わった馬車から、伐採した木を積み込む命令を出し、クラブマンたちが作業を開始していく。

あの後、私は自分の立てた計画に修正を入れました。

それは、入居者第一陣が来る前に私達は彼らが住む場所を作る必要があったのです。でも、さすがに最初っから立派な住宅街を作って住民を割り振る事はしません。私もそこまで慈善家ではないので……。

それと、いまだにオーク鬼などの危険を十分に排除出来ない事もあります。なので、一旦全員が集団で住める場所を作る事にしました。

その場所とは……ずばり、学校です。

「……お嬢様もやっぱり貴族なんですね。最初に作るのが自分の屋敷なんですから」

と、ミス・アリシエル先生が言いますが……心外ですね。

最初は、いきなり屋敷の様な物を建設し始めたのでビックリされましたが、学校を作つてると教えるとさらにビックリされた。そんなに驚く事ですか？

「学校ですか？　ですが、平民に教養を付けても……」

「無意味ではないですよ？」

先生、ここで経済活動についての問題です。

人間の生活には衣食住が必要になります。

その中で住む場所は一度作つてしまえば、それ以降に何か大事が無ければ立て直すなど事をせず、大工などの需要は生まれません。それを前提として、着るもの……これは嗜好品も含みます。そして食べる物……これは生きていく上で絶対に必要な食料を表します。さらにこれらに収入と消費のグラフを当てはめると……この様な曲線図になります」

私は、黒板を取り出すとグラフを書き込みます。

「え、ええ……？？」

「ココからが問題です。ハルケギニアの国々に住む人々は、このグラフのどの辺りにいると思いますか？」

「えっと……ここでしょうか？」

先生が指した場所は、ちょうどグラフの中心付、

「不正解です。彼らのいる場所は……ココです」

私は、収入と消費の曲線がかなり近づいている場所に印をつけました。

「こんな状態では、消費は全て生きるために必要な食費に変わって行きます。

コレでは、生活に絶対必要ではない嗜好品……例えばこの様な本は売れません」

そう言つて、イーヴァルディの勇者やノスタルディー令嬢の休日などと言つた娯楽本を取り出します。

「えっと……じゃあ、お嬢様はどの様にしたいとお考えなのですか？」

……まだ判らないんですね？

私は曲線のちょうど真ん中を指差した。

「平民達の生活レベルをこの位置にまで押し上げる。

この状態にするためには、平民に十分な教養が必要になります。

そうでなければ、このような本をいくら店先に並べても売れません。

ついでに言うと、お金の勘定も出来ません。」

「な、なるほど……」

ほんとは、もう一つ思惑があります。それは、帰属意識を芽生えさせる事です。

歴史観や道徳、文化を国民に広めていく事で帰属意識を芽生えさせられるのに、この世界のバカ貴族どもは気づいていません。本来その役目を担えるはずの教会も、ボロボロに腐ってます。だから学校を作るのです！！

閑話休題。

「さて、お話はここまでにして……作業を再開しましょう」

私は、手を叩いてアリシエル先生や一緒に休んでいた人達に作業再開を促した。休んでいた人達は、もうそんな時間かと腰を上げて自分達の持ち場に戻ります。私も杖を握り直し、鍊金を再会します。作っているのは、直径一センチ程度の鉄棒です。

制作方法は、円筒の型に鉄分を多く含んだ土を入れ、できあがった丸棒をそのまま鍊金で鉄に変えます。その後、簡単な焼入れ（精霊魔法の方じゃなくて、工学的な熱処理）を加えて固定化をかければできあがりです。

決まった形、長さの物を量産する概念が無いこの世界で、どんどん積み上げられていく鉄の棒は、アリシエル先生やクラン、それにお姉さま方の目には異様に映った事でしょう。ほとんどの人が、鍊金をしながら形状を変える作業を行います。決まった物の材質を変換したほうが楽なんです。

この要領で、クランと先生にはレンガ作りをお願いしています。型に嵌めて決まった形の土を、鍊金でどんどんレンガに変えていく

作業です。資材置き場に、おんなじ形と大きさのレンガがドントン積み重なっていきます。

#### 閑話休題。

それから、カトレアお姉さまとルイズお姉さまは実家に戻られる事になりました。本来は、数日だけの視察だけの予定だったらしいですが半月もいましたね。あと、ルイズお姉さまは向こうで色々やるべき事（覚えるべき事）が沢山たまっているらしいです。

それと、迎えに来たお母様は、ついでにと追加の大工達をヴァリエール領から連れて来てくれました。

「えーっと……」

「さすがにあなた達だけでは大変でしょう？」

それと、この辺りにいるオーク鬼などの害獣はあらかた駆逐しましたが、安全であるとはいえません。私達の領地は隣国との争いが絶えないため屈強な者達がとても多い、安心して作業を任せられますよ？」

まあ、それには一理あります。

それから大工さんたちに工法を説明し、専門家である彼らの提案も入れて、学校作りを再開しました。

それから数日後、

「いやーコレだけ早くできるとは……やはりメイジは違いますね！」  
私達の前には、レンガ作りの立派な三階建ての学校が出来上がっていた。

「いえいえ、私は作業を単調な物に変えただけですよ？」

大工さんたちが私たちを賞賛してくれます。でも、私たちだけじゃもつと時間がかかったかもしれませんね。

一見して下級貴族の屋敷の様にも見えますが、内装は地球の日本の学校を髣髴させる様な作りになっています。しかも、校舎には鉄筋を仕込んでるので簡単には壊れません。300人位なら楽に収容できそうな体育館に食堂も兼ねている講堂と、200メートルの周回コースが作られたグラウンドまで完備させた一品です。



コレだけの事が短期間に出来たのは、ひとえに大工さんたちの功績が大きい。元貴族で魔法が使える者がいたのも助かった理由の一つになります。

「皆さん、本当にご苦労様でした」

貴族が、それも公爵家の人間がただの平民に頭を下げるなど考えられなかったのですね。皆さん驚いていました。

さて、完成祝いにパーっと飲みましょう！

\*

そろそろ来るはずですが……あ、来た来た！！

「こつちですよー！」

私は、街道に立つて両手を上げ、街道を走ってくる数両の馬車に向かう場所はココだと知らせます。

馬車の方も、手を上げてそれに答えてくれました。

「お疲れ様です。皆さん大事は無いですか？」

「はい、ミス・フォンテーター嬢。

全員、病気や怪我などはしておりません」

そう言って、隊長を表す紋章を刻んだ衛士が私に敬礼します。彼らは、ヴァリエールの衛士ではなく王宮の衛士です。アンリエッタ様を助けた褒美で、衛士（見習いクラス）のレンタルが出来るようになったのです。

それから、馬車の幌のからゾロゾロと降りてくる人達……いや、子供たちを一人一人確認していきます。

皆、不安そうな顔をしている。やはり戸惑いや不安があるのでしよう。時折キヨロキヨロと辺りを見回している人がちらほらといます。

「はい、立ち止まらないでください！

馬車を降りた人は、あちらの建物に行ってください!!」

建てられたばかりの学校を指しながら、私は大きな声を上げて誘導する。

それを見て馬車を護衛してきた衛士達がいぶかしげな視線を送って来ます。だが、そんなのは気にしていられません。何分手が足りないのです!

「……もう、誰も残ってませんね?」

「はい、もう誰も乗っていません」

「はい、分かりました。」

彼らの護送の任務、ご苦労様です。

また何か用がありましたら声をかけさせてもらう機会があるかもしれません。その時はまた、よろしくお願いしますね?

では、帰りの道も気をつけてください」

社交辞令と帰路の無事を衛士達に言い馬車を見送る。

さうて、ボチボチ次の仕事を始めますか!!

気合を入れて、私は食堂へと足を運んだ。

## 楽しく転生15（後書き）

オリ主のための箱庭、フオンティーヌ領の開拓作業でした。そして、手始めに学校を建設しました。

学校って結構重要なんですよ。私は嫌いですが（おいシムシティやシヴィライゼーションでも、科学力や文化力を上げるための重要な施設です。

ほんとは、神社とか教会が積極的にしなきゃいけないのにね。ハルケギニアだと、平民の殆どが家畜扱いなのでその殆どが無教養。他国に占領されても帰属意識が希薄なので、飼い主が変わる程度にしか感じていないと考えています。

最初は、住民の仮住まいとして役に立ってもらい、住む場所を確保したら学校としての機能を果たしてもらうつもりです。

鉄筋やレンガ作りでの錬金は、ハルケギニアでは変則的な使い方だと思っています。

同じ形状を保ったまま、寸分たがわずに材質を変化させる事ができると言う設定です（あっちこっちで使われていますね）。たいいていの人は、錬金しながら加工作業をするようですが、一旦加工しやすい材料で整形して錬金する方法もありかと考えました。

なんで誰もやらないんですかね？ あ、ギーシュがサイトの銅像作りでやってたか。

さて、ルイズをどういう風にしたら原作みたいにツンデレに出来るか考え中です。うゝむ、どうやったらああいう風になるんだろう？？

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指

摘ください。

感想もお待ちしております。

## 楽しく転生16（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生16

そこは、戦場と化していた。

各々が、手渡された食器を片手に用意された食事を可能な限り己の胃に詰め込むだけの戦場……。

「押さないでください！　まだお代わりは沢山用意していますから！」

「ミス・アリシエル！　こちらの鍋が空になりました！」

「分かりました。直ぐに次を持ってきます！」

「はい、割り込まないで列の最後に並んでください！」

彼らがいかに酷い扱いを受けていたか、判る様な光景でした。

着の身着のまま、と言うよりぼろ布を巻きつけただけの人もいる。

汚れる事など気にせず、零した食事を顔中に貼り付けて……………う

くん、さすがにすごい光景ですね。最低でも途中で着替えさせておくんでした。

「あ、ルーティアお嬢様！」

「私の事はいいですから、あなたはあなたの仕事を続けなさい！」

「は、はい！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ふう……………。

私は、クランさんに全員が落ち着いたら一旦お風呂に入れるように頼むと……………あ、あと新鮮で清潔な衣服も用意してあげてください

！……………頼むと、自室に戻り次の仕事に取り掛かる事にしました

月衣に手をつ込み、びつしりと文字の書かれた紙束を取り出します。

……彼女らは、元々奴隷市で売られそうになっていた子供たちでした。この書類には、彼女らの名前や身体的特徴が事細かに書かれています。……どうやってココに書かれている事を調べたのかを想像すると、燃やしてやりたくなる様な内容の代物と言えば分かってくれるでしょうか？ 他にも彼女らが何処に売れるのか、または既に売られた先を記した 取引の契約書もあります。

私は、当初の入植者の当てとして帰る当ての無い者 経済的な理由で親に捨てられた。または、お隣のガリアやゲルマニアで起こっている権力争いで没落させられた元貴族などを確保しようとした。特に、魔法<sup>メイジ</sup>資質保有者の確保が出来ればこちらとしても大いにプラスになります。なので私は、そう言った人達を比較的多く扱っているであろう奴隷商を襲撃する事にしました。

最初は、小規模な奴隷商を捕まえて住民を少しずつ確保していくと考えました。ですが……、最初に見つけた奴隷商をこっそり尾行すると、なにやらかなりの数の奴隷商達が集まる奴隷市にたどり着いてしまいました。

そこからは、あまり語る必要はありません。語りたくもありません。

いえ、彼らがあまりにも外道だったのでつい……。

……月匣を展開して、その場にいた奴隷商全員をフルボッコにしなければです。

その後はもちろん、金目の物と身包みを全部引っぺがして最寄の街の衛士詰め所に貼り付けにして差し上げました。後は、治安を預かっている衛兵の仕事です。煮るなり焼くなり、好きに処理してください。

ちなみに、あの奴隷市はかなり大掛かりなグループだった様で、かなりの額の売上金や彼らの顧客リスト つまり今持っているコレも手に入ってしまったわけなのですが……、

「コレは、とんでもない爆弾ですね。」

……モット伯にリッシュモン、アナタ達には一刻も早くトリステインから消えてもらう必要がありますね」

“賢明の宝玉”が瞬く。どの様にして彼らを謀殺すればいいのか、自然と頭の中に浮かんできます。でも、どれも面白くない様なモノばかりです。生半可な地獄では、彼らが啜ってきた命の代価と釣り合わないですよ……。それに、この二人以外にも色々と腐っている貴族が沢山います。この人達もどうかしないといけませんね。

この様な事になっているにもかかわらず国内が荒れないのは、現王ががんばってそういった貴族（自称）ども潰しているからでしょうか？ ……たぶんそうですね。

後でお父様に頼んで、国の大掃除をしてもらいましょう。私たちの未来の為に……。

閑話休題。

私個人で製作した名簿では、初期入植者数、67名。内12名が男性、残りの55名は女性です。かしましいですねと、素直に笑えばいいんですが……、

「当面の問題は彼らの住居の建設と、自立のための職案、それに精神的治療も……ですか」

こうして考えて見ると、人手が決定的に足りません。

この領の入居者は、色々と抱えている人が多いので（権力争いで貶められたとか）信頼できる人しか使えません。その辺もお父様がお母様に頼んで補佐官とかの追加してもらわないと……。

私は、書類×モに必要なモノをどんどん書き込んでいきました。

\*



まったく、期待していた娘どもが全員ダメになってしまふとは……。

ワシは、大枚をはたいて5人も、5人もだぞ！？ 奴らが、

『もう直ぐ1 歳に満たないガキ、それも調教しがいのある元貴族の上玉が少なくとも5人は入荷しますぜ？』

などと言うから、前金をたんまりとやったというのに……、

「捕まるとは何事だ！！」

大規模な奴隷商グループの一斉摘発の報告を聞いたときは、我が耳を疑ったほどだ。せっかく大金を注ぎ込んで新しい娘達専用の調教室までこしらえてやったのに、

「あの奴隷商共め、なにが『我々に任せていただければ万事安心』だ！こつも簡単に捕まりおつて！！」

クソッ！……仕方がない、先週待ちきれずに街から連れてきた平民のガキでこの鬱憤を払うとするか。何度も痛めつけてやったのに、一向に大人しくならん小娘だが……そこがまたよい。屈服させがいがあ

「……んん？」

妙だ。部屋から出て、地下まで来たというのに誰にも出会わない。夜回りをしているメイドも高い金と女（使い古し）を与えている衛兵共も……、

「おい、誰かおらんのか！！？」

呼びかけても、誰かが来る気配もしない。……そう言えば、なぜこの屋敷はこんなにも紅いのだ？

ワシは、たまたま会えないだけだと自分に言い聞かせ、特殊な仕掛けで隠した地下室へと足を急がせた。

さつさとあのガキを鳴かせて楽しもう。そう思ってドアを開けると……。

バツ、バツバツ！！

暗かった部屋が、いきなり明るくなる。はて、こんな仕掛けを施したか?? そして、部屋のもっとも奥が照らし出されると……、  
「ラ〜ブ、ア〜ンドウ、ピ〜ス!

愛、知っているかしら??」

化け物がいた。

「な、な……!?!?」

何だコレは!?

暑苦しいほどに鍛え抜かれた筋肉が、呻りを上げて汗を迸らせている。下着と呼べばいいのか判らんようなモノを着込み、それが鍛え抜かれた筋肉をさらに強調している。って、そのモツコリはなんだ!?

「き、キサマ翼人か!?!」

元は白かったのか、紫のグラデーションのかかった申し訳程度の小さな翼が見て取れる。ワシは杖を引き抜き構えるが、

「ん〜もう、せつかちさんねえ〜」

ゾクゾクッ! い、今嫌な悪寒がしたぞ!?

「こ、コレでも食らえ!?!」

ワシは、悪寒を払いのけるように氷の飛礫をやツに投げつけてやった。よし、今のうちに……。

キー、ガシャーン! ガチャン!!

「な!?!」

鋼鉄製のドアが勝手に閉まった。しかも、ご丁寧に鍵までかけるとは!

「れ、鍊金!?!」

鍵は外からしか開かない。仕方なく鍵を破壊してドアを開ける。  
「な……!?!?」

れ、レンガだと? なぜレンガで塞がっている!? コレでは出れないではないか!?!

「クソ! 鍊き……」

「もう、積極的ねえ〜」

再び悪寒が走る。ダメだ。振り向いてはいけない。だが……、  
「さあ、我輩の愛を！」

ガシッと、ヤツの両手でワシの頭は固定される。そして、毒々しいまでの紫色をした唇が……、

「い、イヤだ！ 助けて！ 助けてくれ！！ アー！！！」

ブチュー！！！！ …… ジュツポン！！！！

「プハー…… 汝に、さ・ち・あ・れ。

今宵は、トコトン逝くわよー」

……そして、宴が始まった。

その様子を、調教部屋に備え付けられていた巨大な姿見に昇った  
紅い月と、鏡越しに屋敷中の使用人たちが見届けていた。

そして、翌日以降……モット伯の屋敷では年端も行かぬ女子の嬌  
声ではなく、

「も、もっとだー！」

「ああ！ もっとだー！！」

暑苦しい漢どもの嬌声が響くようになり、メイドさん達に平和が  
訪れた。

そしてさらにその後、それを知った王宮の者達によりモット伯は  
粛清され、トリスティンの歴史からその姿を消した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

『紅い月が昇る。

紅い月が昇る。

白い悪魔がやってくる。

悪さをしてるとやってくる。

悪夢を見せに、

終わりを見せに、

白い悪魔がやってくる。

七つの翼をはためかせ、

紅い月を引き連れて、

白い悪魔がやってくる』

……その日を境に、トリスティンで一つの歌が紡がれるようになった。全ては、本人達のあずかり知らぬままに歩き始めていく都市伝説……。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

## 楽しく転生16（後書き）

未だに領民を迎え入れるお話でした。

ついでにモット伯をフルボッコにして、性癖も変換してやりました（笑い）！

今回は『まじしゃんずあかでみい』より、ラブ・テロリストこと能天使ハプシエルを召喚。そして、モット伯にぶつけました。

認知度と危険度的には、アベさんの方が有名ですが……見た目の衝撃はこちらの方がはるかに上でしよう。

ちなみに、ご本人様ではありません。オリ主が“信頼の宝玉”で見せた幻です。ですので、いくら熱いベーゼを浴びせられ、

「汝に幸あれ」

と、言われても、祝福されません。むごいですね。

オリ主の集めた領民は、奴隷商からブン捕ってきました。

治安が悪いとはびこりますからね、こういう奴らは。悪党に人権は無いとドラマタ様も言っておりましたので、好きなだけ襲います。ちなみにコレは、魔法が使える領民が増えるようにするための処置です。

原作開始時点で、オリ主の領では魔法使いだらけになる予定です。

6000年間続いたパワーバランスを崩し始めたオリ主に、各勢力はどう対応するのでしょうか？

ラブ・テロリスト

まあ、攻めてきたら天使様の熱いベーゼが待っていますかね……。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想もお待ちしております。

## 楽しく転生17（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生17

さて……、最初の入居者さん達を受け入れてから3ヶ月程が経ちました。

この間にいくつかの問題が起きました。

ですがそれは、入居者同士の部屋割りだったり慣れない畑仕事等でへばったり……あとはご飯の奪い合いですね。皆さん、もう少しゆっくり食べたほうがいいですよ？

あ、そうそう。お風呂はとても好評でした。平民でもサウナじゃなくて湯船に浸かれるのが嬉しいようです。

私も皆さんと仲良くしたいと思い、一緒にお風呂に入ろうとするのですが……皆さんに萎縮されてしまいます。……ですので、今は“信頼の宝玉”で認識阻害をかけて一緒に入っています。私が誰かなのか分からないので、皆さん愚痴とか今後の事とか色々腹を割って話してくれるので助かったりもします。

……最初は、平民と元貴族がごっちゃになっているので心配しましたが杞憂に終わりました。皆さん、奴隷として捕まっていたので仲間意識が芽生えていたのでしょうか？

現在のところ、彼らの本格的な衝突（闘争）の兆しは確認できません。いい事です。

閑話休題。

現在の領地の開拓状況は、当初予定していた水源と水路の整備が五日遅れで完了。まあ、作業員を削ったのでコレ位は想定範囲内です。

作業員を削ったのは、住民（彼ら）が住む住宅を作るためです。もちろん個別の住宅ではなく、学校の寮の様な形式で現在学校の直ぐ横に建設。寮と言うヤツですね。

農業地に関しては、クラブマンに耕耘機のアタッチメントを着けたモノを総動員して一気に耕しました。その後は、ラ・ヴァリエー



ル領から呼んだ農家の人達に指導してもらいながら比較的栽培が簡単な野菜類の栽培をさせています。

もつとも、全ての農業区画を農地にする事が出来ませんでした。この人数では、畑全体に手入れが行き届かないのです。……一旦、放牧用に草原でも整備しましょうか？

そう言うわけで、学校の隣に水路と水道橋を挟んで寮を建設。学校の目の前には、農地を整備。裏側は、さら地にしたままの山間部（鍊金で表面を硬化させて土砂崩れを防いでいます）となっています。

閑話休題。

それと、市街地へのオーク鬼や竜などの害獣の被害は今のところ発生していません。

ですが、警戒を怠った瞬間に大災害に見舞われるのはいつの世も同じです。現にちらほらと彼らの目撃例が上がって来ていますし……

「と、言う訳で……あなたたちはこの領地を巡回警邏してもらうために派遣されました。

何か質問は？」

私は、目の前に立つ5名の魔法衛士隊員達（見習い）を一瞥しながら質問はないかと尋ねた。

なんと、私は王様から普通の衛兵だけでなく魔法衛士（見習い）の貸し出しも出来るようになりました。姫様を助けた報酬……なんでしょうか？

彼らは幻獣に騎乗できない、または爵位が低すぎたため昇格できなかった者達です。ですが、十分に使える下地を持つ者達です。……最初は他の領から、スパイや破壊工作員が紛れ込んでないかと少し心配しましたが、お母様が下調べしてくれましたみたいです。これで下手に弱い人を無造作に雇い入れるよりは幾分かはマシになりました。

それから、一応彼らがここにいる名目は“実戦に一番近い環境で

の警邏訓練”となっています。

「はい、よろしいでしょうかミス？」

「何でしょうか隊長殿？」

今回、領地警邏訓練のために派遣された衛士見習い達の隊長が一步前に出て聞いて来た。

「先ほどなされた説明では、最優先事項は領民の安全……でしょうか？」

「はい、そうなります。」

迎撃対象（襲ってきたオーク鬼やワイバーン等）の近くに領民がいた場合、撃退よりも領民の保護を優先してもらいます。

領民の生命、財産を守るのがあなた達に与えられたこの領での責務です。

この行動に関しては、異議は認めません」

「……判りました」

「もちろん、あなた達に無駄に死ねとは言いません。戦力が減ればこちらが不利になりますからね。」

その辺りの対応は、ケースバイケース臨機応変でお願いします」

隊長さんは了承したと肯く。すると端っこにいた人がおずおずと手を上げた。

「あの、わたしも質問してよいでしょうか？」

「为什么呢うか？」

「はい、先ほどの建物で翼人や猫人を見かけたのですが……」

ああ、そっちの説明も必要でしたね。

彼らは、最初の入居者達を向かい入れた後に流れ着いてきました。翼人達の方は、私が巡回中にオーク鬼に襲われている幼い姉妹を見つけて助けたのが最初の切欠です。

彼らは、少し前まで山を挟んだ向こう側の森に集落を作って住んでいました。ですが、その一帯には獰猛なオーク鬼が多いため安全な生活が望めませんでした。なので別の場所に引越そうしましたが、それよりも前に凶暴なワイバーンに襲撃されたのです。そして、家

族とは別れ離れになつてしまい……今まで孤軍奮闘していたのを私が救助したというわけです。

……最終的に、私が蒼い宇宙眼の力を使って領地内を駆け回り、生き残っていた翼人達を保護して領民として迎え入れました。ココなら安全ですし、お話の出来る亜人の方とは仲良くしたいと思つていましたので一石二鳥です。

猫人達は、食料庫を荒らしているのを見つけてとつ捕まえました。彼らは、安住の地を求めてさ迷つていたところお腹がどうしても空いたらしく、美味しい匂いのした食糧庫からご飯を失敬したようだ。しかも幼い子供（兄妹でした）を数人連れていました。

まったく……、仕方ないので食べた分は働かせるために弟達を盾（人質）にとつて無理やり領民として迎え入れさせた。もつとも、今では雨風がしのげて安全に暮らす事のできる環境に順応して永住する気なのですが……。たくましいですね。

「彼らも我が領地の領民です。必ず保護してください。」

現在は、何の問題も発生していませんが……。何かあった場合には、間に入ってもらつのもあなた達の仕事になります。

異論は認めませんよ？

それでは、後ほど警邏のメンバーシフト表、巡回ルートの計画書類を提出してください

判りましたか？ と、にこやかに……。だが決して有無を言わせぬように確認します。

……。ふう、疲れました。

「……治安維持のための自警団の設営が今後の課題ですね？」

いつまでもリリースできる訳じゃないですからね。これもメモしておきましょう……。

ガチャ、

「ルーティアお嬢様、先日徴収した金銭類の集計が終わりました」

「あ、ご苦労様です」

クランが渡してきた書類に目を通して金額を確認する。うむ、

これで貯蓄額がかなりの量になりましたね。え？ 悪党に人権なんか無いってドラマタも言ってますよ？ 私と遭遇した人は、消されないだけ儲けもんだと思ってください。

「それじゃ、会計簿にこの金額を臨時収入（盗賊討伐の報奨金）として計上して置いてください」

「はい、判りましたお嬢様。

それと、根をつめてばかりではダメですよ？ コレを飲んで少しは休まれた方がいいです」

そう言つて、克蘭さんはホットミルクをカップに注いでくれた。  
「ありがとうございます克蘭さん」

あゝ温まりますね。

グワツシャアアン！！

「ブフツ！？ い、一体何事ですか！？」

「……えゝと見れば判りますね」

そう言われて外を見て見ると………ありやまあ、

「大丈夫ですかー！？」

どうやら建設中の集合住宅で、外側に建ててある足場の一部が崩れてしまったようです。幸いにも怪我人は出なかったようですが……作業面に関しての安全意識の改革も必要ですね。

\*

ビュービューと、頬を撫でる風が気持ちいです。

「ルーティアお嬢様、もう直ぐラ・ヴァリエール邸上空に到達します！！」

つと、もうそんな所まで来ましたか。

眼下に広がる光景に眼を向けると、最速屋敷と言うよりも要塞か城といった規模の建造物     ラ・ヴァリエール邸が見えてきました。

なぜ私たちがこんな所にいるかと言うと……、先日届いたちい姉さまからの一通の手紙が切欠でした。

フォンティーヌ領の開拓を始めてから、殆ど いえ、まったくですね。実家に帰っていませんでした。おかげでお父様が色々と危ない感じに挙動不審になってしまったり、そんなお父様をお母様が激しく折檻したり……。でも、そんな事よりも心配な事が書かれていました。それは、ルイズお姉さまの事です。

……どうもルイズお姉様は、ちい姉様曰くがんばりすぎている節があるとの事だ。そして、それに拍車をかける様にお母様の教育が厳しくなっていると……。世界の修正力ってヤツですか？？ まったく、面倒な力です。

「それじゃ、降りますよ克蘭さん！！」

風の力を吐き出す動力機関 マジックアイテム 結界炉（私、命名）の出力をユツクリと絞りながら、私達は円を描くように“魔女の箒” ウィッチ・ブルーム をラ・ヴァリエール邸へと向けて降下させていった。

この魔女の箒、私が作った自信作の一つです。やっぱり魔法使いは箒に乗って空を飛ばないとね、うん。箒といっても、さすがに普通の竹箒に跨っているわけではないですよ？ マジックアイテム 持ち手と座席を兼ねた基礎フレームに結界炉 風石を燃料とした機関部を装備し、末尾に複数の制御用の翼と大型の安定翼を取り付けて外見を箒の様にしているものです。まあ、魔法版空飛ぶバイクの様な物を想像してほしい。

そして、そのまま屋敷の前にスタンツと降り立ちました。

「な、なにや……。ああ！？ こ、これはルーティアお嬢様ではありませんか！！」

「ご苦勞様ですジェロームさん。ルーティア・ルシエル、ただいま帰りました！」

## 楽しく転生17（後書き）

なんだか、詰め込んだ感がありましたが、開拓状況などはこんな感じです。

領民の割合は、ヴァリエール領からの手伝いが約40名。レンタルの衛兵や衛士達が約20名。元奴隷の子供が約50名。友好的な亜人が約20名となっています。

たいていの人は、学校で寝泊りしてもらってます。学校が機能しだすのはまだまだ先になるので……。

水路と水道橋も整備しました。本当は上下水道の整備をさせたかったんですけど……下水道はもう少し後で整備しましょう。

水道橋はポンプの代わりです。上から水を落として水压を確保し、各家庭に送ります。水道技術その物は、地球でも中世くらいで実用している地域もありましたし、妙に発展していたりするハルケギニアでも比較的簡単に整備できると考えました。

こういう街の発展とかを考えていると、無性にシムがやりたくなります。なぜでしょうか？

魔法使いは箒に乗って空を飛ぶ。NWだけでなく、古今東西の魔法使い物ではポピュラーなギミックです（一部例外もあります）。オリ主は、000を使えば楽に飛べますが、ルイズは自力で飛べません。ですので、“賢明の宝玉”とか夢幻書庫の知識を総動員してこの箒を作っちゃいました。

今回は、世界の修正力が働くラ・ヴァリエール邸です。ルイズツンデレ（初期外道）化を止める為、オリ主はがんばります。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想もお待ちしております。

## 楽しく転生18（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。



## 楽しく転生18

どうやら、予定よりも少し早く着いてしまったようです。

屋敷の中が（メイドさん達によって）かなり大慌ての様相と化していました。

やっぱり、夕方に着く予定だったのがお昼ごろに着いてしまったのが原因でしょうか？ 仕方ありませんよ、風に乗っちゃったんですから……。

うゝむ、どうやらお父様は気晴らしに狩に出かけ、お母様は領地の視察に行っていて二人ともまだ帰っていないようです。エレオノール姉さまにちい姉様もいません。後は……ルイズお姉さまですね。「ルイズお姉様は、ただいま家庭教師の方とお勉強の時間です」

……そうでしたか。

トントン。

ん？

「ルーティアお嬢様、待ち時間を利用して一旦お風呂に入られてはどうでしょうか？」

その……フォンティーヌ領での開拓作業や魔法具の研究、さらにご自身の鍛錬に時間を取られてまともに休まれている所を久しく見ません。

一旦、休息も含めて身を清めましょう」

うゝん、そんなに汚いでしょうか？

「……お嬢様、そんな風に嗅がないでください！ ……はしたないです」

あつと、いけませんいけません。

……確かに、フォンティーヌ領に作ったお風呂は大人数で入るいわゆる大浴場で、備え付けの石鹸とかも市場で貧乏な平民でも購入できるようなあまり質の良くない物でした。今度、もうちょっと質のいいのに変えましょう。

「そうですね、久々に手足をのびのびと伸ばして入れるお風呂に入  
って疲れを取りましょう!!」

え〜と、何でしょうこの状況??

今私は、クランさんと一緒にお風呂に入っています。

他にも、沢山のメイドさんが私を　まるで逃がさないように取  
り囲んでいます。

「えっと、クランさん。この状況は……??」

「それは……」

「それは私どもが、ルーティアお嬢様方が公爵様方に会われる際、  
どこか粗相の無い様に隅々まで磨き上げねばならない使命を帯びて  
いるからです!!」

クランさんの代わりに、なんか握りこぶしを握って力説してくれ  
たメイドさんがいます。えっと、その使命は誰が??

「もちろん、私たちが私たちに課した使命であり。この家に仕える  
メイドの仕事なのです!!」

おお、立派ですね!　……でも、

「自分で洗えま……」

「いいえ、私たちが洗います!!　それが傳く者です!!」

う、引いてくれませんか??　てか、クランさんが洗ってくれま  
すから……、

「ダメです。クランも洗う対象です。

……では皆さん」

ジャキン……、とか聞こえて来そうな勢いで皆さんスポンジやブ  
ラシ、石鹸やタオルなんかを構えてきます。め、目が逝っちゃてま  
……、

「に、逃げますよクランさん!!」

「だ、ためですお嬢様!　私たちが逃げたら、彼女たちが公爵夫人  
に折檻されてしまいます!!」

く、そんな！？

ガシツ！！

「大丈夫ですお嬢様方！

優しく、丁寧、人には言えないような場所まで隅々まで洗って  
差し上げますから！！」

「い、イヤー！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「あゝ、酷い目にありました」

「それは、私もですよルー」

ホントに隅々まで磨き上げられちゃいました。ええ、人には言えない様な場所まで丁寧に磨き上げられちゃいました。女の子同士って凄いですね。躊躇がありませんでした。

今は色々とグツタリしながら、鏡台の前で綺麗に洗い流された髪に丁寧にクシを通してもらってます。もちろんクランさんにですよ？ あのだこか目が逝っているメイドさんたちに任せたらヤバイそうですからね。

……さてと、白く輝く髪は後ろで束ねて紅いリボンを添える。いつも好んで着ている白を基調としたドレスに着替えます。最後にタケミカツチを構えて、

「さて、参りましょうか」

何処へですかと、下手な突っ込みが聞こえて来た気がしましたが、あえてスルーします。「冗談ですからタケミカツチはしますよ？」「ルーティアお嬢様、ルイズお嬢様の家庭教師の方がお帰りになりました」

「ん、分かりましたジェロームさん。では、ルイズお姉さまに会いに行きましょう」

きつと疲れているでしょうから、甘い甘いお菓子とお茶も一緒にです。

「ルイズ……お姉さま??」

「ルーティア、久しぶりね!」

元気な声とは裏腹に、私の目の前に立つルイズお姉様は目の下に幾重ものクマを作り、頬をこけさせて憔悴しています。ほんの少し押せば、今にも折れてしまいそう……そんな感じでした。

って!?

私は、いきなりグラツと倒れかけたルイズお姉さまを抱きかかえました。

「えへへ、ちよつとお姉ちゃん、がんばりすぎちゃった……かな?」  
「がんばりすぎです! たった三ヶ月でどれだけ痩せたんですか!」  
「?」

抱きかかえた一瞬、自分の感覚を疑いましたよ……。前に会った時の半分くらいにしかルイズお姉さまの重さが感じられませんでした。

とりあえず、大事をとって一旦ルイズお姉さまをベッドに寝かせました。

「もう……、大丈夫だつて言ってるのに」

どう見ても大丈夫じゃないです!!

私は、魔法の治癒に“蒼い天眼”を使ったヒーリング、ついでに“慈愛の宝玉”の力も使ってルイズお姉さまを回復させます。そのかいあってか、目の下のクマも消えてこけた頬も幾分か回復し見えるものになりました。

「……ありがとうルー」

まったく……、私たちはまだまだ子供なんですから、そんなに無

茶をしちやいけないんですよ？ 分かってるんですか？？ …… 分かってませんね。私の話そっちのけで、美味しそうにクックベリーパイと紅茶を食べてます。

それにしても…… ほんの三ヶ月前、ぬいぐるみ等の女の子っぽい物が沢山置かれていたルイズお姉さまの部屋でしたが、それらは今色々な本や勉強で書いたノートで作られた山脈で覆い隠されてしまっている。

いくらルイズお姉さまががんばってるからって……。

これは一度、お母様とお父様とジックリ話し合う必要がありますね？

『ちよつと、お話しようか？』

ゾクッ！？

うつ……、なんかどこかの白い悪魔が私の後ろでささやいた気がしましたが、気のせいです。

「ルイズお姉さま、ムリはしないで……」

「大丈夫よ。ルーティアがいるんだからしゃんとしないと」

私に支えられながら、それでも自分で立って歩こうとするルイズお姉さま。今は夕食の時間です。

ほんとは、自室に持ってきてもらうつもりでしたが、丁度お父様とお母様が帰ってきたので食堂で皆で食べる事になりました。エレオノール姉さまとちい姉様はまだ帰ってきていません。どうやら、帰ってくる途中でトラブルがあつたらしく到着が明日になるとの事です。アストレアさんの魔法を使えば速く帰ってこれるだろうに……え？ あの“動物園”で移動してたんですか？ それなら仕方ないですね。

「お父様、それにお母様、ただいま帰りました」

「おお、ルーティア。本当に心配していたんだぞ？

フォンティーヌ領の開拓に付ききりで、久しく顔を見ることがで

きなかつたぞ?？」

「申し訳ありませんお父様。

なにぶん幼い私では、そうそう手が離せない仕事でしたので……」

「そうだったなルーティア……時折、お前が本当に7歳程度の幼子なのか、我が目を疑ってしまえばかりだ」

「ハハハ……」。

お父様、7歳程度の子供に領地開拓を頼まれた時は、私も自分の耳がおかしくなったのかと疑ってしまいましたよ?」

なんででしょう?　なんだか……普通に喋っているのにどこかきこえない感じがします。

「……ところで、ルイズ。その……大丈夫なのか?」

「はい、大丈夫です。ルーティアもいるんですから、姉としてがんばらないといけません」

……もしかしてきこえなく感じてしまうのは、ルイズお姉さまの事があるから?」

「……」

「どうしたのルー?」

ルイズお姉さまとお父様が、不安そうに私を見えています。どうやら、いつの間にか険しい顔をしていたようです。

そしてお母様はというと、とても険しい表情でルイズを睨んでいた。

「ルイズ、貴族たる者がその様な事でどうしますか!

妹に支えられねば立つ事もままならないなど、姉として恥ずかしくないのですか!？」

「カリーヌ、ルイズは……」

「アナタは黙っていなさい。

ルイズ、何時まで妹のルーティアに支えられているつもりですか? その様な醜態、恥を知らなさ……!!」

ブチ。

……お母様、

「！！？」

いい加減、

「ちよつと、口閉じようかお母様？」

私は、剣形態のタケミカツチの切っ先をお母様に向けながら、冷たく、だけど熱く煮えた怒りを込めて、突きつけていた。

「ルーティア、一体これは何のま……」

「何のまね、ではありません。」

お母様こそ、それがボロボロにやつれたルイズお姉さまに対して言う事なのですか！？

それが、ここまでボロボロになってしまったルイズお姉さまに対してする仕打ちですか！！？」

「ルーティア！ アナタは、自分の母親に向かってなんて言う事を言うのですか！？」

お母様はカツと目を見開くと、杖を引き抜き私に突きつけて来る。そしてその杖の先には、魔力が渦を巻いていた。私は、負けじとさらにお母様を睨みつけます。

「親だから何を言ってもよい、何をやってもよいなどと言う道理は、通すわけにはいきません！！！」

互いの杖を突きつけ合い、一触即発の空気を放つ私たちに、

「二人とも止めるんだ！ 杖をしまわないか！！」

「ルーティア止めて！ お母様と喧嘩しないで！！」

ほ、ほら！ 私はちゃんと一人で立てるからね？ だから大丈夫だからね？？」

私たちを止めようと、間に割って入ってくるお父様。そして、私たちに必死に自分は大丈夫だとアピールするルイスお姉様……。

それから私達は、どちらからでもなく杖を収め、久しぶりの家族との夕食となりました。

…… もっとも、何を口にしても美味しいとは感じられませんでし

た  
が。



## 楽しく転生18（後書き）

5万ユニーク、30万PV突破!!!

ひとえにこのSSを読んでくれる皆さんのおかげです！

今回から、ヴァリエール家での騒動になります。

メイドさん達がなんだかアレな感じになったのは、アストレアさんの仕業です。日本のサブカルチャーで活躍するメイドさんとかの気概とか色々と仕込んだんです。

詳しくは書いてませんが（書けませんが）、女の子たちに徹底的に磨かれたネギくんを想像しておいてください。おおむねあんな感じですよ。

ルイズは、少しだけボロボロになってもらいました。一応元の案を変更して、不在期間を三ヶ月、頼りになるカトレアさんもいる状況にしました。修正前は、ひこもりに他者恐怖症を発病……だめですね。楽しくありません。

ルイズに使ったヒーリングは、ザ・サードの登場人物、イクスナドが使う気を使った治療術です。ただ回復させるだけでなく、持続的な回復力向上効果ももたせる事ができるようですよ。

久しぶりに柊蓮司と宝玉の少女を読み直しましたが、慈愛の宝玉って死者の蘇生もできるんですね。コレだけの力があれば、ルイズを万全状態に持っていけそうです……。まあ、コレだけで全部解決させると他の能力が空気になってしまいますから結果オーライですよ。

次回はたぶん、烈風力リンとの戦いになるのか？？

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

感想も待っています！

## 楽しく転生19（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生19

結局、あの後お母様と何か話す事もなく、粛々と夕食は終わった。今は、ルイズお姉様と一緒に私の部屋にいる。

病人の様にやつれたルイズお姉様をベッドに寝かせ、眠るように促す。だけど、ルイズお姉様は、

「まだ、今日習った範囲を復習し終えてないから寝れないわ。

それに明日の分も予習しないと……」

笑顔で自室に戻ろうとするルイズお姉様の後姿が、酷く脆く感じた。

耐えかねた私は、ルイズお姉様を抱き閉めるとそのままベッドに押し倒す。そして、ルイズお姉様が何かを言う前に“節制の宝玉”の力で強制的に眠らせた。

「……大丈夫ですルイズお姉さま。

大丈夫です……」

一体何が大丈夫なのか？ 自分で言うておきながら、自分に問いただしたくなってしまう。

コン！ コン！

こんな時間にいったい……お父様？ 他には……誰もいないようですね。

「どうかなさいましたか公爵様？」

「……2人は、まだ起きているか？」

克蘭さんが少し空けたドアの隙間から、まだ明るい廊下の光が薄暗い部屋の中に差し込んできている。確かに、もう眠っているようにも見えなくはない。

「いえ、お二人とも……」

「克蘭さん、通していいですよ」

私がそう言うと、克蘭さんは肯きスツとドアを開いた。

部屋の中に入ってきたお父様の表情は、とても複雑そうで……怒

つていたり、悲しんでいたり、悩んでいたりと言った具合に読み取りにくい。

「お父様、どうされましたか？」

「……いや、何から言ったらいいのか決めかねている。」

「……ルイズは、大丈夫なのか？」

「大丈夫……としか、今は言う事ができません」

「そうか……」

ルーティア、父からの頼みだ。もうあの様な事はしないでくれ」

あんな事……お母様と杖を突きつけあった事ですね。

「……それは、難しい約束ですお父様」

「な……！？」

「私は、とても不器用です。」

話し合いの席で、頭に血が上って杖を抜いてしまうほどの不器用さです。

ですから、もし約束を破ってしまった場合には、愚かな私をしかってください。お願いします」

「……はあ、まったく……。ルイズもそうだが、ルーティアは私たちに似て融通が利かないようだ」

「はい、私達はお父様とお母様の娘ですから！」

無い胸を精一杯張って言った。ってお父様、そんなに肩を落とさないでください。

私は、お母様が嫌いなわけじゃない。もう少しだけ、ルイズお姉さまにやさしくして欲しいのだ。

「……お母様の教育方針が間違っていると、否定したいわけではありません。」

ただ、ルイズお姉さまが倒れている時、言葉の鞭を振るうのではなく、抱きしめてあげて欲しい。もう一度立ち上がれるように支えて欲しい……それが私の望んでいる事ですお父様」

“節制の宝玉”の力で、泥の様に眠るルイズお姉様を撫でながら、私は自分の思っていることをお父様に打ち明けた。

「……倒れても、もう一度立ち上がれるように……か」  
「はい……」

たぶん、お母様もそうしているのでしょう。でも、すれ違ってしまっている。

\*

翌朝。

しっかりと眠ったおかげで、私はとても目覚めがスッキリです。横で寝ているルイズお姉様は、一晩中“慈愛の宝玉”の力を受けていたためか血色が十分に回復していた。

私は、ルイズお姉さまを起こさないようにベッドを抜け出すと、いつ間にか控えていた克蘭さんがさささのさゝと着替えさせてくれる。前に克蘭さんが『優秀な執事やメイドさんには、主が必要とするまで決してその気配を悟らせない隠密能力ステルスが備わっているらしいですよ？』などと、某借金執事みたいな事を克蘭さんが言っていた気がします。何処で知ったんでしょうね？？

朝のまだ使用人以外は誰も起きてこないこの時間、ヴァリエール邸備え付けの練兵所の真ん中で私は待っていた。

そして、

「ルーティア、構えなさい」

魔法衛士マンティコア隊のマントを羽織り、顔の下を隠すマスクに騎士甲冑を着込み、レイピアのような杖剣を携えた……完全武装のお母様と対峙しています。

「……お母様、お待ちしていました」

冷たい視線を送ってくるカーリィとお母様。するとお母様は、杖剣

を構えて私にウィンドブレイクを打ってくる。狙いを甘くしているのか、少し避ければ当たらない。

「アナタに、母親（私）らしい教育をしてあげましようと思ひ、この騎士甲冑を持ち出しました。」

さあ、構えなさいルーティア！」

私は、タケミカツチ（斧形態）を月衣から引き抜き、そのまま下に下ろした。

「構える前に……お母様、一つお聴きたいことがあります」

「……なにかしらルーティア？」

「この教育は、昨日の事でのお母様の私怨から来るモノですか？」

「私怨？ それは違いますルーティア。これは、教育です」

教育……ね、

「……分かりましたお母様」

私は、タケミカツチを正段で構え、

「始めましょう、最初で最後、全力全開の話し合いを」

12本のソード・オブ・ガーディアンを月衣から出現させ、翼のように浮遊させる。

それを見たカリィとお母様      いえ、烈風カリィは、杖剣に風を纏わせた。

始めに動いたのは……私だ。

「ダンシング・エッジ！」

12本のうち6本のソード・オブ・ガーディアンが、カリィお母様がけけ真っ直ぐに飛んでいく。それから少し遅れて、私も低空フライ（ガンダムのドムのような移動を想像してほしい）を使い、間合いを詰めていく。

「甘いですよルーティア！」

向かってくる剣を、お母様は杖に纏わせただけの風で吹き飛ばした。もつとも、それくらい予想済みですよお母様。

瞬動。

ソード・オブ・ガーディアンが、お母様の作りだした風で吹き飛

ばされる。

私は、それらをとんぼ返りをしながら空中で見届けた。そして、ソードたちを吹き飛ばした風はそのまま先ほどまで私がいた場所を吹き飛ばしていく。

「それぐらい、分かっていますよ！」

「行け！！」

残っていた4本のソード・オブガーディアンを打ち放つ。それらはお母様の左右から別々に襲い掛かった。

「くッ……！！？」

ガキ、ガキインッ！！

空中でソードたちがぶつかり火花を上げる。

お母様は、後ろに飛んでソードたちを回避していた。

「その程度で……」

「ハアアアア！！」

「ッ！？」

だけど、それは次の攻撃のための布石。虚空瞬動が未だ不完全な私は、残っていたソードを足場にして、4本のソードたちを避けたばかりのカリンお母様の懷に、瞬動で一氣に切り込んでいった。

「甘い……！！」

踏み込みが甘かった。細身の杖剣では斧形態のタケミカヅチを受け切れないと考えたのか、カリンお母様はとっさに杖に風を纏わせ、タケミカヅチを、いなした。先端に重量が集中する斧形態、さらに全力で振り下ろされたタケミカヅチは、そのまま地面を深くえぐった。

「これで……ッ！？」

私が作ってしまった隙を付かれ、杖剣を振り下ろされる。

「まだです！！」

だが、まだ引き下がるわけには行かない。タケミカヅチから左手を離し、空中に出現した柄を握り締める。そして、それを一氣に引き抜くと、振り下ろされる杖剣を受けとめた。



「さすがお母様、この程度の小細工では虚もつけませんでしたね」  
「……褒めても、手は抜きませんよルーティア？」

ガキンツ！ 受け止めていた杖剣が風を纏い、受け止めていたソードを撥ね退ける。私はそれを後方に跳んで回避した。

「一つお聞きしますお母様、なぜルイズお姉さまに優しくしてあげられないのですか？」

「私は、優しくしていますよルーティア？」

弾かれた左腕が痺れる。それをタケミカヅチに添え直すと、

「なら、もつともつと優しくしてあげてください」

「……それは、私に勝ってから願いなさい」

「分かりました。では、是が非でも負けられませんね」

唇をペロツと舐めると、私はソード・オブ・ガーディアン達を集結させた。

お母様は風の偏在を唱え、その数を増やす。

さあ、ココからが本番だ。

## Another side

やけに朝から騒がしいな……。そう思ってベッドを抜け出し、メイドを呼んで何かあったのかを聞くと、

「お、奥様とルーティアお嬢様のお二方が、練兵場でた、戦っているんです！」

戦っている？ カリーヌとルーティアが？

「はい！ 奥様は騎士甲冑を、きやつ！！」

くつ、何だこの揺れは！？

「ええい！ あの2人は何をまったく何をやっているんだ！！」

長年愛用している杖を取り、寝巻きの上にマントを羽織る。

カリーヌが騎士甲冑を持ち出したとなると……ワシと屋敷の衛兵達

とで対処できるだろうか？　もしかしたら軍隊を出さねばならないかもしれない。そう思いつつ、無理やり止めると後でどんな罰を与えられるかが頭を過ぎり、身が震えた。

「……ジエローム！　衛兵たちを集められるだけ集め、至急練兵所へ向かうぞ！！」

「はっ……ですが、奥様をお止になると」

「私だってカリィ又は怖い。だが、父親として止めねばならん！！」  
まったく、何で私はこうも妻に頭が上がらないんだ。

\*

「あらあら……　なんででしょう？」

お屋敷の方から煙が上がって」

「はあ？　カトレア、いったい何を……　って、ええ！？」

確かにお屋敷の方から煙が上がっていた。それを確認した次の瞬間、一筋の閃光がラ・ヴァリエール邸付近から空に向かって伸びていた。それから数瞬置いて雷が落ちたような音が辺りに響き渡ってくる。

「い、いったい何が??」

「お母様……　でしょうか？」

昨日ルーティアちゃんが帰ってるはずだから、もしかしたら魔法を教えるのかも」

確かにお母様なら、風のスクウェアスペルの一つ、ライトニング・クラウドを使いこなせるが……。

「いくらなんでも、なんか変よ??」

土煙が上がり、遠めに見ても分かるような大きな竜巻がそれを巻き上げている。地上から、空から閃光が走り雷鳴が鳴り響き、何かが爆発しているようにも見える。

「なんだか分からないけど、すつごくやな予感がするわ」  
「エレオノール姉様、実は先ほどから私も……」  
「屋敷に向かうわよカトレア！」  
「ええ、アストレア、セットアップ！」  
『いや、久々の登場なのにコレで終わる気が（ry』

＊

我が娘ながら、恐ろしいと感じたのはコレが始めてだと思う。  
まだ未熟すぎる子供が親に反抗するなど、あつてはならぬ事だと思ひ駢をしてあげるつもりだったが……、

「バースト・モード、セット！ 雷撃砲、ファイエル！」  
「くっ！？」

まるでカノン砲の砲撃……いやそれ以上だ。最初はライトニング・クラウドかと思つたが、発動している感覚があまりにも違う。あの魔法独特の冷却感や、空気の流れがまったく感じられない。

「まだです！ 行け、ソード・オブ・ガーディアン！ 鍊金・爆破  
！！！」

私の周囲が突然吹き飛び煙が舞う。いったい何を鍊金したのだ？ いや、それよりも私の視界を奪えば攻撃が通るとでも思っているのですか？？ 単調な動きをする剣を風で弾き飛ばし……な！？

「ライトニング・ブレード・ダンシング！！！」

弾き飛ばしたはずの剣が、突然雷を纏った刃を噴出し剣戟を繰り出してくる。それだけではない。雷の刃を振り回す剣の間を、縫うように飛んでくる剣もある。全力のフライでそれらを回避し、避ける事のできなかつた物だけを杖剣で弾き飛ばした。

「この程度で墜ちま……」

「分かっていますとも！！！」

っ、何時の間に後ろに!?

「はああああ!」

「ストーム・ブレイク!」

咄嗟に複数の風の槌を竜巻のようにして放つ、ストーム・ブレイクでルーティアを弾き飛ばす。さらに、体制を立て直させまいと、偏在の一つが素早く呪文を詠唱する。

「カッター・トルネード!」

未だ空中できりもみ状態のルーティアに向けて、真空の刃を持った竜巻を放った。狙いたがわず竜巻はルーティアに向かっていくが……、

「グ……錬金・連爆!!!」

竜巻の中で複数の爆発が発生する。爆発は竜巻を揺らし、バランスが崩れ崩壊していった。そんな方法が? 私は杖に神経を集中させ竜巻のバランスを持ち直させる。

だが、その隙にルーティアは体勢を立て直し、剣をカッター・トルネードを迂回させて飛来させて来た。

「ブレイド!」

「ライトニング・クラウド!」

飛んできた剣をブレイドで弾き飛ばし、ライトニング・クラウドで受け止めながら回避する。

よし、何本か折る事ができた。剣は、後何本残っている? ……それより、もう精神力が限界のようだ。前にこれほどまでの魔法を使ったのは何時だったか……。

「はは……、限界? 私は何を言っているのだ?

火竜の群れを討伐した時よりも、吸血鬼の群れをなぎ払った時よりも……この程度のモノだったか烈風力リン?

違っただろう!」

そうだ。決してこの程度ではない!

「……デル・ウィンディ…… “ライトニング・ストーム!!!”」

私の中で、何か……籐の様な物が外れた気がした。

使えるかどうか分からない。そもそも呪文すら知らない、今思いついたばかりの魔法。だが、私には分かる。コレが私の力だ！！

A n o t h e r   s i d e   o u t

お母様が、巨大な雷の嵐を作り出し私を取り囲む。

こんな隠しダマを持っていたなんて……だが、私も負けられない。負けられないんだ！！

「はあああ！！」

タケミカヅチ達にライティング・ブレード（完成版）を纏わせ、雷の嵐にぶつける。

「クッ、まだまだ……です！！」

お母様も負けじと流し込む魔力を増加させてくる。

まずい、もう……殆ど魔力が制御できない。

お母様の力に押され、ソードたちは悲鳴を上げて弾け飛ぶ。

「負けま、せん！！！」

ブレードと嵐が接触した場所が、次々と小爆破を繰り返す。

負けない！

負けられない！

勝って、お母様にもっと優しくしてもらうんだ！！

「うおおおおおお！！！」

「なっ！？」

私は、タケミカヅチに取り付けていた結界炉に残りの風石を全て注ぎ込んだ。

安全装置？ そんなものの初めから無い！ 引き金を引くたびの、風石の中に圧縮されていた魔力が急激に解放される。そして、タケミカヅチから発せられるライティング・ブレードの密度が急激に高まっていった。

「うおおおおおー!!」

じりじりと、お母様の雷の嵐を押し返していく。

「あと、もう一步おおー!!」

ピシ……、

「え？」

ピシピシピシ……。

ま、まだだ……後ちよつとなんだ……!!

「ああああああああ!!」

思いの限りにタケミカツチを振りぬき、お母様の嵐を一瞬だが弾き返す。

だが、そこまでだった。

タケミカツチが、魔法に耐え切れず、内側から爆発する。

そして、完全に押し返しきれなかった雷の嵐が私を襲い……、

世界に紅き月が昇った。

## 楽しく転生19（後書き）

烈風カリンとの激闘です。

カリンさんの実力がぜんぜんチートっぽくないのですが……そこは作者の実力不足です。 or z

ちなみに、戦闘中オリ主は000の力をほぼ使用していません（“節制の宝玉”で000を押さえ込んでいないと勝手に発動しまうので）。純粹に人として、娘としてバトルしています……。

執事は……。

はやてのごとくより。……と言うか、もうどこでも必須なスキルですね。明言していてよく知っているのは、この作品だけです。

最初で最後、全力全開……。

リリなの（無印）で、フェイトと全力勝負した時のセリフ……。若干うる覚え。

母と娘との全力バトルにはもってこいのセリフだと思い採用。

いつもより多めでしたが、誤字や脱字などを見つけたらご指摘ください。

感想も随時募集しております！！

## 楽しく転生20（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。



## 楽しく転生20

現世は、偽りに満ちた儚き幻……。

暗き夜に垣間見るは、真の夢（現実）……。

そして、真実（世界）を蝕むは……紅き月。

\*

痛みが意識を覆い隠し、“節制”の鎖が引き千切れる。  
終わりをもたらす羽は、私の静止を振り切り、世界へと解き放たれた。

A n o t h e r   s i d e

「アイン……ソフ……オウル」

「な!？」

突如出現した紅い刃が、練兵所ごと私の放った雷の嵐を切り裂いて行った。

まだ、こんな奥の手を隠し持っていたのか!？

そして、切り裂かれた嵐の中から、真紅の刃を放つ白亜の剣を持つ我が娘　ルーティアが現れた。その姿は雷の嵐に焼かれ、服や一部の皮膚がボロボロに炭化している様にも見えた。そして、白亜の剣はバラバラになり娘の周囲に浮かぶ。

娘の姿にやりすぎたと思っていると、小さな羽の様になったモノの一つが光を放った。すると、まるで何事もなかったかの様にルーティアの負っていた傷が消えてなくなってしまう。

「ッ!？」

そんなバカな!？ アレほどの深手が一瞬で回復しただと??

「ルーティア、アナタは一体……ッ!？」

問いただそうとした私を、蒼く光る瞳が射抜いた。なんだあの眼は？ ルーティアの眼は紅ではなかったか??

「くっ!」

すぐさま杖剣を構え直す。油断するな。アレは……ルーティアなのか?? そんな疑問を自らに問いかけて見るも、その答えは出ない。誰かと入れ替わったわけではないはずだ。あの娘の持つ独特の気配や力（異能）は、そうそう真似できるものではない。

それに、もう片方の瞳はルーティアの紅なのだ。だが、その瞳からは意思の光がまるで感じられない。対照的に、蒼く光る瞳は底冷えする様な冷たい視線を私に向けてくる。

スツと娘の左手が上に、そして私に向けて伸ばされる。それに答えるようにして、白亜の盾が私に向かってくる。なかなか早いが、対処できないわけではない!!

私は、フライで浮かび上がると複雑な機動で襲い掛かってくる羽達をかわし距離をとる。そして、偏在と共に二重のライトニング・ストームを撃ち放った。が、

「なっ!？」

白亜の羽が集まり、一つの巨大な盾に姿を変える。そして、二重のライトニング・ストームを完全に防ぎ切って見せた。

「お母様、一体何があったのですか!？」

か、カトレア!？ それにエレオノールまで!

「下がりなさい二人とも! 今は事態を説明している場合ではありません!」

『そう言うわけにもいかねえぜ公爵夫人。こんな訳の分からねえ状

況を作ったのはあんだと、あのルーティア嬢だ……っ！？ 避ける  
！！」

「あぶない！！」

「ッ！？ 危なかった。白い羽が、私たちに向かって襲い掛かって  
来ていた。」

「……それにしても、あのカトレアやクランにまで攻撃を加えるな  
んて、

\*

「ルーティアちゃん！ 正氣に戻って！！」

「……………」

「ルーティアちゃん！」

私の声も聞かず、ルーティアちゃんの掲げられた左手に雷の刃が  
生まれる。いや、

『カトレア、ルーティアの声を拾った』

「ヤメ……ヤメ、テ……」？

「……ルーティアお嬢様は、助けを求めているんです」

助けを？ ……まるで、前にアストレアさんから見せてもらった

“お話”に出て来たあの人みたい。自分ではどうしようもできない、  
呪われた終わりを繰り返す彼女の様に……。

「なら、私がやる事は一つね？」

『カトレア？』

「……不屈の心はその胸に」

『ッ！ ……了解だマスター！』

「『全力全開で打ち抜く（きます）！！』」

＊

「奥様は、エレオノール様をお願いします!!」

「ま、まちな……!!」

私はそう言うと、奥様の静止を振り切り地面を蹴って走りだす。ルーティアお嬢様を助ける。その為に、私は空中に手を伸ばす。手を伸ばしたそこに剣の柄が現れ、ソレを一気に引き抜いた。

前の私は、ただ殺せと命じられていた。ソレが、私たちの役目でもあったし、彼女と取り分けて面識があったわけでもなかったから……。

だけど今の私は、命の恩人のルーティアちゃんにそんな事は出来ない。いや、したくもない!! だから、私の中にあつたこの力は、この思いを成し遂げるための力なんです!

「お嬢様!!」

お嬢様の振るう雷の剣を手にした剣……いや、ハリセンでなぎ払った。

パリーン!!

まるで、ガラスの割れた様な音と共に雷の剣が砕け散った。もう一度!

「はああ!!」

スッパーン!!

小気味良い音と共に、ハリセンの一撃がアイン・ソフ・オウルに弾かれた。

「くッ!!」

『アストレア、モード・ヴァーチエ!!』

「GNバズーカ、GNキャノン、シュート!!」

私が一撃を与えた場所に、カトレアお嬢様が放った桜色の砲撃が打ち込まれる。だが、

『対象へのダメージ……ゼロ。む、無傷だと!? そんなバカな!』

！」

鉄壁の守護を誇るアイン・ソフ・オウルの“慈愛”が、ルーティアちゃんを包み込み守りきっていた。

「……アストレアさん、“アレ”いけるかしら？」

真剣な眼差しで、自らが持つ杖に問いかけるカトレアお嬢様。

「……無茶だ！ 今“アレ”を発動させたら、病み上がりのカトレア姉さんの身体にどれだけの負担がかかるか十分に解ってるでしょ！？」

「でも、私たちにできる最大の一撃は“ソレ”しかないわよ？」

あの二人には、“慈愛”の防御を抜くための手段が何かあるようだ。なら、

「お二人は、あの羽の相手をお願いします！ 私はそのスキにお嬢様を止めます！！」

「お待ちなさい！ あなた達だけには任せられません」

奥様？ エレオノール様は……避難させたのですね？？

「それに……コレは元々私とルーティアとの問題です。

私が、決着をつけねばいけない事」

立派です。でも、

「……そうも言っていただけませんよ奥様？」

七枚しかないアイン・ソフ・オウルの羽が数十倍に増えていた。

おそらく“信頼の宝玉”による認識操作でしょう。これ以上時間をかけていたら、お嬢様が飲み込まれてしまうかもしれない。

「はあああ！！」

雪崩れ込む様に襲ってくる羽達を、私は手にしたハリセンでなぎ払う事で消し去る。カトレアお嬢様や奥様も魔法で応戦するが、打ち落とされずにアストレアさんが発生させている防御力場の中で耐えている。

私は、二人に襲いかかる羽を全てなぎ払う。

「奥様、それにカトレア様！ 援護をお願いします！！」

「分かったわ、アストレアさんも行きますよ？」

『あゝもう！ 了解ですマスター！！』

「……仕方ありませんね。この状況で、唯一の対抗手段がアナタだけのですし」

よし！ 私はお嬢様に向き直り、剣 ハリセンを正段に構えた。視線の先には、幾千もの羽を引き連れ、両の手に雷の巨剣をもつ白い少女。

きつとあの人も、こんな気持ちで 絶望の中で、魔剣を握って  
いたのだろうか？？

でも、

「でも、もう終わりにしようルーちゃん。私が、絶対助けるから！  
羽の大群をハリセンでなぎ払う。そして、

「『トランザム！！』」

むき出しになったルーちゃんにカトレア様とアストレアさんの砲撃が突き刺さる。だがソレは、全てアイン・ソフ・オウルによって阻まれる。

「『ライトニング・ストーム！！』」

そこに、偏在も動員して三本のライトニング・ストームを打ち込む奥様。その攻撃に、アイン・ソフ・オウルが縛り付けられる。

「この時を、待っていました！！」

ルーちゃんに接敵し、振り下ろされた両の手の雷を打ち砕く。そして、

「リミット・ブレイク！！」

私の思いを全て乗せたハリセンを振り下ろし……、

スパーン！！

紅い月の昇る世界に、小気味良い音が響き渡った。

A n o t h e r   s i d e   e n d

・  
・  
・  
・  
・  
・

気がついて最初に眼にしたのは、空に上るたった一つの紅い月。

「……ここは？」

何処だろうと言うよりも早く、

「目が覚めましたかルーティアお嬢様？」

クランさん？ それに……お母様にちい姉様、それとエレオノール姉様？ 皆さんなんだかボロボロです。

「っ！？」

……どうやら、私もボロボロのようです。

身体中が痛い。しかも頭は鈍痛が酷い。そんな頭を無理矢理持ち上げて二、三度ほど振ってみる。

「お嬢様、ムリをしないでください」

……いったい何がどうなった？

たしか、私はお母様とO・H A・N A・S H Iをして……。

それからタケミカツチが私の魔法に耐え切れなくなって爆発して……。

それから……それから……。

「……アイン・ソフ・オウル？」

爆発した瞬間、私の静止を振り切って白い七つの羽が広がるのを見た気がした。

「……そうです。」

お嬢様は、アイン・ソフ・オウルを使ってしまい……」

「負けたのですね？ 自分自身に」

使わないと決めていた。

使えば、それこそ本当の殺し合いになってしまふ。いや、一方的な殺戮になってしまふだろう。戦争ならまだしも、親と子の話し合いで使うべき物じゃない。だから、使わないと決めていた。なのに……。

ギユ！

「クラン、さん？」

「大丈夫ですお嬢様。」

お嬢様は、負けていません。

私の最後の攻撃、アレを防がなかったのは紛れもなくお嬢様の意思です」

……うつすらとだが覚えているのは、金色に光るクランさんと“希望の宝玉”による因果操作を止めたと言っただけ。

「ん！ んん！！」

なんですか？ KYですよエレオノール姉様。

「えーっと、いい加減ここから出たいんだけど……ゲッコウだっけ？ 解いてくれないかしら？？」

それに、いつまでも壊れた実家を見ているのもいい気分じゃないし……」

そう言っただけで先には……、

「うわ……」

うわ、じゃないですね。完全に瓦礫の山……と言うかクレーターになって消滅してしまっているヴァリエール邸がありました。他にも、焦土と化したヴァリエール領が回りに広がっています。もしこれが、月匣の中じゃなかったら……。ゾツとしない光景です。

「……すみません。今すぐ解除しますから……よし！」

世界全体にヒビが入り砕け散る。その向こう側から、（アレに比べたら）多少崩壊したヴァリエール邸と、未だ平和なヴァリエール領が現れました。



なにやら周りがるさいですが……、

「クランさん。なんだか、すっごい迷惑をかけてしまって……ごめんなさい！」

「大丈夫です。私は、お嬢様がまた心から笑えるようにするお手伝いをただけですから」

クランさん、その笑顔がとってもまぶしいです。

## 楽しく転生20（後書き）

烈風カリン（+カトレア、クラン）とルーティア（魔王化？）との戦いでした。

……オカシイなあ。本当は、マンガでよくある朝チュンみたいに終わらせるつもりだったのにいつの間にもやらバトルに突入。

高レベルな戦闘描写がまったくorzな感じです。実力不足が痛感できます。

でも、こうするしかなかったんだー！！

ふう。

今回の戦闘は、やたらと飛んだことをさせてみました。

まずは、カリンさんのメイジとしてのランクをブレイク。一段か二段ほど上がってもらいました。さらに偏在と組み合わせで、擬似賛美歌詠唱を行っています。複数の魔法行使も、しちゃってるかな???

カトレアさんは……説明するまでもないですね。ちなみに、BJはヴァーチエを意識してズングリムツクリな甲冑です。もちろんキヤスト・オフもできます。

カトレアさんが遅れた理由は馬車で移動していたからと、飛行特性が低かったと言う事で……。あとは、まだ本調子で魔法が使えないと言う理由です。

そして、クラン・ベル。

NWの世界からの転生者で、シャイマール戦で脱落したウィーザードと言う設定です。

持っている武器は……あのハリセンです。破魔剣です。

ハモノツルギ

なぜ持っているのか？　きっと誰かが持たせてくれたんでしょう

(おい

アリアンロッドの世界からの転生も考えましたが……それはまた別に(え

ちなみに、本人にも微弱ながら破魔の力が宿っています。

マジック・キャンセラー

かなり無理矢理感がありましたが、とりあえず戦闘はここで一旦終了です。

あ、エレオノールさんは今のところノン・チートの一般人です。落ち着いてるのは、戦闘終了からかなりの時間がたったからです。

感想お待ちしています。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生21（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生21

模造された世界　月匣から帰還した私たちを出迎えたのは、半壊したヴァリエール邸と、

「さて、二人とも。この惨状を見て何か思う事はないかね？」

普段は滅多に見る事のできない　心底怒っているお父様でした。改めて周りを良く見てみると……、私たちが戦っていた練兵所はレンガ作りの小屋に壁や整備されていたグラウンドは全壊。これは、修理ではなく作り直した方がいいですね？

他には、風魔法や爆発の余波で屋敷中の窓ガラスが割れていたり。家に何個か立っていた尖塔も、真つ二つに両断されて転がっています。外壁の一部も吹き飛び、作ってもいないのに新しい堀が出来ていたり、大穴が開いて泉が出来てしまっていたり……。

幸いにも使用人さんたちも含めて重度の怪我人は出ていないようです。

「で、二人とも何か言う事はないかね??」

すつごく怒った顔で説明してくれたお父様が、言う事はないかと聞いてきた。

うーと……、

有意義なお話し合いでしたと言う？

素直にごめんなさいと謝る？

……って、私は何を考えているんだ！

ここは素直に、

「ごめ……」

「ええ、とても有意義な親子の会話が出来ましたが、なにか？」

って、お母様！？　へんな電波でも受信してしまいましたか！！  
！？

お父様もそんなに険しい顔をしないでください！！

「お前たちは、反省する事はないのか！？」

「そうですね、すこしはしゃぎすぎた気がしますね」

いえ、ハツチャケ過ぎてますよお母様？ お父様も呆れてしまったのか、頭を抱えながらぶつぶつと屋敷の修繕をどうするか考える事にしたようだ。

「まあ、たしかに少し話し合いに熱が入りすぎたことは認めましょう」

お母様、少々じゃないですよ？

「このところ魔法の鍛錬や練武を怠っていたせいか、私も少々腕が衰えてしまったようですので……娘の稽古もかねて久々に張り切って行きたいと考えています」

え……何を言ってるのですかお母様？？それを聞いたお父様も、目を点にして……さらに頭を抱えながらうなっていた。

この事件の後、稽古の名目でお母様と頻繁にO・H A・N A・S Iをする様になりました。なぜかクランさんも一緒にです。

なんでも、

「こうしていれば、ルイズをしかる時間が減ります」  
だそうです。

まったく、素直じゃないですね。

\*

そうそう、お母様との話し合いは結果として私の“一応”負け……と言う事になりました。

なので、ルイズがお母様にしかられてその度に泣いたり猛勉強をしたりと言う事には変化はありません。ただし、

「毎日ルイズお姉様を抱きしめてあげる事。一度でなく、何度もで

すよ？

あ、隠れて抱きしめるのはダメですよ？

最低でも、一回は皆が見ている場所でやってくださいね？」

元々サシでの話し合いだったのに、三人（＋一杖）がかりでもぎ取った勝利です。こっちの言い分を少しくらい通してもバチは当たりません！

よくよく思い出してみると、私……と言うかルイズお姉様はお母様に抱きしめられている姿を見た事がないんですよ。

『子供の愛し方が分からない時は、まず抱きしめてあげてください』お母様とルイズお姉様には、愛が足りないんです！ それに敵しくされるだけだと、子供は親を“敵”としか見なくなっちゃいますしね。

それから、お母様に抱きしめられているルイズお姉様を良く見れるようになり、

「あんなにルイズがやつれていたなんて……まったく気づかなかつたわ」

と、お父様と真剣に話し合っているお母様が見れたので、後は何とか成るでしょう。

今の時点ではまだですが、一年後くらいには、テラスでお茶をしながら談笑しているお母様とルイズお姉様の姿が見られる様にもなりました。ただ、内容が難しい魔法理論の勉強だったりするんですけどね。

\*

……全部順風満帆には終わりませんでした。

一つだけ問題が出ました。

『だから無茶だって言ったんだよ！ まったく……』

アストレアさんが、ベッドで眠るちいねえさまをしかっています。どうもちいねえさまは、肉体的には完治していても魔法を十分に使える状態までは回復していなかったようです。そこに魔力を大幅に引き出させる魔法版“トランザム”を使用した事で症状が悪化、予定していた魔法学園への入学が先送りになってしまいました。アストレアさん曰く、少なくとも一年間は絶対魔法を使っちゃダメらしいです。他にも、この状態が本当に完治するまでソレから数年はかかるかも……。

“賢明の宝玉”もソレを妥当だと判断しています。

安静が必要なちいねえさまにルイズお姉様を任せて、自分は領地に戻って開拓に専念するわけにもいきません。いろいろと心配なんです（主にルイズお姉様が）。

なので、私達はこのままヴァリエール邸に残る事にしました。もちろん領地の開拓もしなければいけないので、

「お母様、“風の偏在”を教えてください！」

と言って、お母様から風の偏在を教えてもらい、偏在の方で領地を見て回ってもらってます。一応、領民の安全のために本体が月一で視察に向かう事にしました。

時間ですか？ 幕で飛んでも半日とかかりません。全力で飛べば音速も突破できそうなので、数分で到着ですね。

閑話休題。

そう言えば、タケミカツチにソード・オブ・ガーディアン………全壊でしたね。

ソードの方は12本全部が粉々に割られていて、タケミカツチは結界炉の爆発で……僅かな破片だけを残して蒸発しています。

「うーん、よく無傷でいられたね私たち（笑）」  
人間一人くらい蒸発できそうな熱量が放出されてと思うんですけどね。

さすがに自分の作品たちが粉々に壊れてしまったのは応えました。もう残骸としか言えない彼らの前で orz をしています。



それを見たお父様が、代わりに杖剣をプレゼントしてくれると言ってくれました。

「それは、とてもうれしいのですが……タケミカツチみたいな剣を作る職人さんはいませんか？」

そう言つと、お父様も渋い顔をして呻ってしまった。ためしに王都の職人にタケミカツチの設計図を見せたところ……『ゲルマニアでも、こんなカラクリは作れない』と言われてしまった。しかも、結界炉の原理も理解できなかったため『なんですか、この飾りは？』とまで言われてしまった。

「絶望した！ 魔法と機械工学の研究が進んでいないこの世界に絶望したあ！！」

と、某絶望な先生を真似てみたとかみなかたとか……。

絶望しても始まりません。

仕方ないので、もう一度タケミカツチとソード・オブ・ガーディアンを作る事にしました。

ただ、もう一度作る際にお母様からアドバイスを貰いました。

「ライトニング・ブレイドを個別の剣から発生させて使うなら、それ専用の強靱な剣とそれ以外の剣に分けて用意するのがいいでしょう。」

本当なら、あの雷の剣を十本や二十本程同時に制御できるのが理想的ですが……あなたがやったように雷の合間を縫って剣で襲わせるのも有効な手です」

さすがに十本、二十本も制御できないですよ。あれ？ でも、やれない事はないか？

まあ、確かに強靱な剣にだけ魔法をかければ壊れる事も少なくなりますね。

そこで、某剣の世界にいるファリスの重戦車様の必要筋力値24のグレソよろしく、重く分厚くてつかい剣を錬金しました。新生ソード・オブ・ガーディアンのは、十二本から数を減らして七本です（アイン・ソフ・オウルと同じ数にして、いざと言う時に誤魔化

すため)。さらに、今まで使っていたソードと同じ12本の剣を“  
コモンズ・ソード”としました。

「さあ、新生ガーディアンとコモンズの舞。見てください!!」  
総勢十九本の剣の舞です!

「甘い!!!!」

「わー、だめだー!!」

バリーン……。

作って早々、お母様に打ち砕かれてしまいました。なんか一瞬、  
どこかの(名前だけ)精鋭部隊のやられる時の声だった感じがします  
が……気のせいですよね??

後日、お父様がトリステインで一番の職人さんに、壊れてしまっ  
た七本のガーディアンと十二本のコモンズの製作を依頼してくれま  
した(これらは特殊なカラクリもないので、材料と技術さえあれば  
問題なしです)。

タケツミカツチだけは、どうしても私が作らなければいけないの  
で……設計を一から練り直すことにしました。

「結界炉はココで……あ、でもココをこうすると変形機構に支障が  
……。

そうだ、刃の形状も変えて……」

などと、夜な夜な設計図と睨めっこ。たまに試作品を作ってテス  
トしてみたりです。

結果的に、私が納得のいく新生タケミカツチ　タケミカツチ<  
雷風>が完成するまで二年の歳月がかかってしまいました。

\*

「……で、今度はなんですか“自称天使様”?」

「だから、いつまでも“自称”を着けないでよ!」

私は今、ネガ反転した世界で某ゴスロリ天使に良く似た“自称天使様”と対談中です。

存在が薄すぎてすっかり忘れていましたよ。

『まあ良いわ。ソレよりもちよつとだけ厄介な事になったわよ?』

「厄介な事ですか?」

『そう。この前アナタが暴走しちゃったでしょ?』

「ああ、ありましたね。それで?」

『世界の免疫力がね、アンタを敵として認識しちゃったのよ』

ガッテム!　なんと言うことでしょう!!　……なんて、某世界の守護者なら言いそうですね。

「世界の免疫力……“勇者”の産出ですか?」

『ファー・ジ・アース風に言うなら、たぶんそれで良いのかな?』

一応こつちで手を打っておいたから、あからさまにアンタを殺しに来る“勇者”は出ないと思うよ?』

「おお、凄いサービスですね。

でも、なんでそんな事を??」

『また暴走されても困るからね。

……ほんとは、こうやって教えに来るのも“ルール違反”なんだけどギリギリグレーゾーンかな?』

「グレーゾーン??」

『危険な事を抽象的に知らせる　虫の知らせみたいなヤツね。

詳しく教えられないけど、あなたを倒すための“勇者”の“代理”の管轄は私じゃない。

クランもアストレアも、元をたどっていくと“勇者”になるわ』

「なるほど、だから“ハマノツルギ”ですか」

クランさんが、あの武器を持っていてくれて助かりました。

『……これ以上は、さすがに危ないわね。

それじゃ、がんばってもう一つの可能性を楽しんでね?』

そう言い終わると、ネガ反転していた世界が消えてなくなり、いつもの世界に戻ります。

「……ま、何はともあれ“今”を楽しみましょうか」  
作業台の上から、組み立ての終わった“新しい篇”を手に取り自分の部屋を出る。

そして、

「ルイズお姉様！ 空を飛びましょう！！」

## 楽しく転生21（後書き）

今回は……、事後処理の様なお話でした。

駆け足でしたが、まあ今回はこんな感じで。

チート無敵な転生者って、殆どの場合烈風カリンに勝っちゃうんですよ。だから、趣向を変えてオリ主を負けさせた。だけど、このままじゃルイズが凄惨な事に……。そう思いカリンさんには『ルイズを抱きしめる』と言う義務をかせました。

原作を読んでいて、なんだかこの二人は親子のスキンシップが取れていないんじゃないかと思えます。なので、カトレアさんの代わりにカリンさんに一杯ルイズをモフモフしてもらいます。

カトレアさんとアストレアさんには、ちょっとだけ退場してもらいます。

病弱で上手く学校に通えなかったと言う演出です。ちゃんと卒業しますよ？ 病気（魔法的な障害）で出席日数とかが足りなくなつて留年したりする予定ですが。

久々に登場“自称天使様”（笑）。

やっぱり複数の転生者（主人公属性持ち）がいると言う設定にしました。

彼らが、オリ主と敵対関係を取るかは別としてですが……。

理屈として、彼らは“勇者”です。オリ主を倒すために世界が用意した特効薬です。詳しくは、NWのスターダストメモリーを読んでください。

そろそろストックがなくなりそうです。

ノンプロットで、勢いで書いたストックは命！とにかく、最低

限オリ主たちが魔法学園に入学して春の使い魔召喚の儀まで書かないと……。

感想お待ちしております。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。

## 楽しく転生22（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生22

「ルイズお姉様、もつと肩の力を抜いてレバーを倒してください！  
そうじゃないと、いつまでたつても機首が上を向いたままですよ？」

「わ、解つてゐるわよルーティア！ こ、こうでしょ……って、わッ  
！？」

ドッポーン！

ああ、またやっちゃいました。

私は、レバーを操作して箒を反転させ、泉に落つこちたルイズお姉様の直ぐ横で機首を水平よりやや下に向けてホバリングします。

「大丈夫ですかルイズお姉様？」

「プハッ！ コレぐらいなんともないわ！」

何度もずぶ濡れになりながら、それでもルイズお姉様の瞳には諦めの文字が浮かぶ事を知らない。とても頼もしい事です。

私たちは今、ヴァリエール邸内にある泉の上で“箒”の練習をしています。

ルイズお姉さまも、すつごく空を飛びたがっていましたからね。  
なので、まだ試作段階の“箒”をプレゼントしました。

でも、最初は『自分の力で飛ぶからいらない！』と、受け取るのを拒否されました。

うん、がんばってくれるのはすつごく嬉しいんだけど……悲しいですね。私は、ルイズお姉様の前ですつごく落ち込んだ様に振る舞いました。

するとルイズお姉様は、

「わ、解つたわよ！ ルーティアのプレゼント、ちゃんと受け取るから、ね？」

「わーい！」

「……ルー、あんた演技が上手くなったわね？」



「てへへ。でも、ルイズお姉様に受け取ってくれなくて悲しかったのは本当ですよ？」

なにしろ、ルイズお姉様のためにだけ作った箒ですからね。

そして今は、ルイズお姉様と一緒に練習中。遠くでクランとお母様が見ています。

練習場所としてココを選んだのは、もし落つこちても下が水なのでクッションになってくれるからです。なにしろルイズお姉様は、最初に練兵所で練習をした時に顔面から地面に突っ込んだんですよ？ 危なくて地面の上で練習なんてさせられません。

低いところよりも安全だろうと、一度だけ高高度で練習をしようとして連れて行っただけですけど……。ルイズお姉様に大泣きされたあげく、着地後はそのまま風呂に直行でした。理由は、ルイズお姉様の名誉の為に伏せておきます。

閑話休題。

最初は箒から何度も墜ちていたルイズお姉様でしたが、こつを掴んだのかグングンと腕を上げてきています。簡単なローリングや背面飛行などの曲芸飛行にも挑戦しているようです。最近は高度1000メートルで飛ぶ事ができる様にもなりました。

これは、私が箒に何度も改良を加えた結果でもあります。さすがに高高度からの転落は、冗談抜きで死んじゃいますからね。箒に落下防止装置を何重にも取り付けましたし、それで発生した出力不足を補うために結界炉の改良や増設など……。最初にプレゼントした時より一回りくらい大きくなっちゃってます。小型化が必要ですね？

ちなみに、エレオノール姉様が私の作った箒を見てすっごく悔しそうに、

「私にだってねえ、姉としてのプライドがあるのよ!!」

そう言って、私から結界炉と箒の図面と理論、それに現物を無理やり奪い取ると研究室に籠もってしまいました。

……別にいいんですけど、後でオシオキダベ〜!!

「妹の物を取り上げるとは何事ですか!!」  
「う、ごめんなさいお母様!!」

でも、私がお仕置きする前にお母様が天誅を下してしました（笑）。

＊

私達 私とお母様に克蘭さんと一緒に紅い月匣の中で魔法の訓練をしています。

理由は簡単、私達が魔法の練習をすると被害が尋常じゃないからです。

練兵所の一件で『話し合いなら、誰もいない安全な場所で好きなだけしていなさい!』と、お父様にしかられてしまって……屋敷の近くの山でO・H A・N A・S H Iをしたら山の形が変わってしまいました（笑）。

どうもお母様、いつの間にかスクウェアの壁を超えてペンタゴン（?）に昇格していたようです。我が母ながら恐ろしい事で……。幸い他の領地に迷惑はかかりませんでした。お父様の胃腸がともやばい事になりそうでした。

なので、誰にも迷惑のかからない月匣と言うわけです。ここなら思う存分暴れても問題なしなのです!

「でも、ハツチャケちゃうのはいけないと思いますよお母様?」

そう言っ、カッタートルネードでズタズタになった高層ビルのような障害物を見上げます。これ、鋼鉄並みの強度を持たせているんですけど……真つ二つになってます。

「アナタ相手だと、手を抜いていられませんからね。

なんですか絶対防衛って?

相手の能力の抑制?

認識操作による幻痛？

確立の操作？

どれをとつても反則としか言えないでしょう？」

「仕方ありませんよ？」

お母様が、タケミカツチにガーディアンとコモンを全部壊しちゃったんです。

私は、この小さな杖とアイン・ソフ・オウルを使うしかないのです」

まあ、それでも食いついてくれるお母様が凄すぎるんですけどね。“剛毅”でブースとした剣を受け止められた時に受けた驚きといったら……。

アイン・ソフ・オウルの事は、あの時居合わせた人達だけの秘密になっています。さすがに“単体でハルケギニアを殲滅できる力”と言つものの存在を公の場に流布するのはまずいですからね。主に欲に溺れた権力者とか、信仰に狂った思想家とか……。

あ、ルイズお姉様にはそれとなく真実をボカして説明してあります。双子なのに隠し事ばかりだと、本格的にぐれちゃいそうです。ちなみに、クランさんは遠くでルイズお姉様と一緒に見学中です。ハマノツルギの力で流れ魔法を受ける心配もないですし、クランさんもお母様に褒められるくらい筋がいいので飛んできた瓦礫とかからもルイズお姉様を守ってくれます。お茶の用意も出来るので、最高のメイドさんですね。

「はあ……あいつ変わらずすごい場所よね」

ふと声のした方を見ると、月匣の中を見ながら呆れたような声を上げている……、

「エレオノールお姉さま？」

エレオノール姉様がいました。あれ？ アカデミーで仕事があったのでは??

「今日は、目的があつて戻ってきたの！」

数日前に、やっとルーティアの作ったマジックアイテム（結界炉）の理論が分かったのよ！

で、その試作品ができたから持つてきたってわけ！」

どんなもんだと、エレオノール姉様が胸を張っています。お母様から折檻を受けた後、さすがに可哀そうに成ったので理論の模写と予備パーツから組み立てた結界炉（最新型）の付いた箒をプレゼントしました。それにしても、“賢明の宝玉”＋“夢幻書庫”の知識で生み出した論文を半月で理解して現物まで作っちゃうなんて……すごいですお姉さま！これで、アカデミーでもまともな研究を始めてくれますかね？？あそこ、宗教関係の研究（始祖の像を作るのに適した土は何かとか）で国の税金を食いつぶしてますからね。」

「見て驚きなさい！」

ドン！

「……………あの、お姉さま。コレが……………ですか？」

お姉さまが持つて来た結界炉は、お姉さまの身の丈よりもでっかい物でした。具体的に言うと、全高が約2メートルに直径が約1メートルくらいの巨大な筒です。

……………ちなみに、エレオノール姉様やルイズお姉様にプレゼントした箒についている結界炉は、だいたい2リットルペットボトルくらいの大きさです。

ちなみに、その結界炉からはそよ風が吹いてきています。

「お姉様、ちよつと調べさせてもらいますね？」

「ちよ！？」

カパツと蓋を開けて中身を確認。そして閉める。……………なんでしょ、中が可哀そうな事になっています。え〜と、

「何でこんなにデカイのですか？」

「安定性があつて良いじゃない！」

「フレームが妙に分厚ですが？」

「頑丈でしょ？」

「重いですね？」

「簡単には動かせないわ！」

「大事な部品が外れそうですね？」

「大丈夫、ちゃんと動くから！」

「風力はコレで限界ですか？」

「限界よ！ 最初っから全力なのよ！」

「ダメダメで……」

「そんな事を言う悪い口はコレか！ 小さく出来ないって悪口を言う口はコレか！！」

「いふあい！ いふあいですう！！」

…… あゝ痛かった。

事情を聞いたところ、どうもお姉さまはこの研究を一人でやっているみたいで、まだ一緒にやってくれる仲間がいなようです。初期研究は少数で……は、何処の世界でも一緒ですね。なので、薄くて丈夫な材料を手に入れられなかったり。細かい細工が彫れなかったり……色々大変なようです。

そして、やっと出来た試作品を片手に、この結界炉をアカデミーの所長に見せて人員と予算を確保してもらおうとしたところ、

『うゝむ……風石をこの様に使うのは、異端ではないかね？』

などと言われ、人員も予算も下りなかったようです。ちなみにこの研究は破棄するようにと。

そして、代わりに回されて来たのは、

『始祖への祈りを捧げるさい、もっとも意識が安らげる香の研究をしない』

だそうです。

「……エレオノール姉様、一度その所長さんを私に紹介してくれませんか？」

いえ、今度どこら辺が異端なのか、じっくりとO・H A・N A・S H I したいと思ひまして……」

あれ？ エレオノール姉様、なんで顔を青くされているのですか

??

「まあいいです。」

彼らが必要ないというのであれば、無償で差し上げてあげる義理もありません。

エレオノール姉様、結界炉の研究資料や試作品、誰にも渡す必要はありませんよ?」

そう、コレは私たちが独占している技術です。後から欲しがっても遅いですよ? もう風石の分解と再結晶化の目処も立っています。後は、地下1000メートルにある風石の鉱脈までその効果範囲が届けばいいだけなんですからね!

## 楽しく転生22（後書き）

祝50万PV&7万ユニーク突破あー！！！！

今回は、ルイズが箒を乗りこなせるようになるお話と、エレオノールさんが結界炉と箒に興味を持って作っちゃうお話でした。

オリ主が最初に作った箒は、じゃじゃ馬もいいところなものです。何しろ、ちよつとの操作でもバランスを崩して操縦者が転落します。シートベルト、ナニソレ美味しいの？ です。暴風対策もされていないので、高高度だと寒すぎますし対策をとらないと高速飛行も出来ません。

なにしろこのオリ主、月衣（非常識）のせいで落っこちて死ぬとか凍えて死ぬとかがなくなっちゃいましたからね。安全対策を完全に失念していました。ソレを真面目に考え始めたのは、ルイズの地面への顔面ダイブ以降です。

エレオノールさんは、原作で妹の病気と妹の魔法についてどうのこうのする為にアカデミーに入ったとかと言う設定がありましたけど……。このSSでは、どちらも一応は解決しているので動機がないんです。なので彼女には、純粹に研究者として進んでもらいます。まあ彼女の、オリ主が持っている000や月衣とか月匣とか調べたいんですけど……。その辺で動機付けするのも良いかな？

それと、結界炉がアカデミーで異端視されました。新人が上の意思と関係なくこんな研究を持ってきたら、まあそう言われますね。

風石を使用した船について他のSSで諸説書かれています。この

SSで風石は、飛行船に使われているヘリウムガスの代わりの様な物と言う扱いです。特別な機械は積んでいません。それが6000年間ずっと変わらずに続いているのです。

そこに“風石の力を強制的に解放する魔法機械”なる物を出したら……。

コルベール先生の蒸気飛行船ですら教会から異端視されましたからね。今まで無かった物には閉鎖的なんです。

ちなみに、もう風石の再結晶化も目処が立っているので、大隆起に合わせてゴールドラッシュならぬ風石ラッシュを仕掛けられるかと（風石を露天掘りしなくても取り出せる＋結界炉による航空輸送の高速化による利益）。

まあ、まだまだ解決しなきゃいけない問題も山積みなんですけどね。

うーん、周りがチートな感じになってるし……ルイズにも何かチート、と言うかブーストをつけた方がいいかな？ さすがにこのままだと影が薄すぎる。

あと、サイトはどうしょ……。出す意味あるのか？？

感想お待ちして追います。

もしかしたら、誤字脱字があるかもしれません。見つけたらご指摘ください。



### 楽しく転生23（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生23

まったく、アカデミーもてんで役に立ちませんね。

そんなんでは、王立魔法研究機関の名が泣きますよ？

正直に言っと、私的にはエレオノール姉様をアカデミーから引き抜きたいんです。

だって、たった一人でこの結界炉の論理を理解しただけじゃなく、実物まで作っちゃったんですよ？ それだけじゃなくても、将来は主席研究員（？）だったかに成るほどの人なんです。あんな場所で腐らせておく道理はありません！

……でも、ココはグツと我慢しなければいけません。ここでエレオノール姉様を引き抜いちゃうと、アカデミーの動向を知る事ができる大切なパイプが無くなっちゃうんですよね。

「仕方ありませんね。」

今のところは、箒を乗りこなせる衛士の育成を行いましょうか……

……

まずは、実績を作って結界炉の価値を高めましょう。

なにしろ飼育費がかかる幻獣と違って、箒は燃料の風石と維持費以外は特に必要はありません。速度だって、軍が採用している火竜程度の速度は確保できています。最強の空軍を作っちゃいましょう！  
「……そうと決まったら、攻撃手段も必要ですね？」

魔法資質さえあれば箒には乗れます。でも、いくら箒がマジックアイテムと言っても、複数の“魔法”を同時行使するのは辛いでしょう。

そこで、正式武装として銃を採用しました。もちろん、先詰め式のマスケットなどではなく、私が現代地球の知識を動員して作った“新式銃”です。輪胴弾倉式のリボルバー拳銃と、ポンプアクション式ショットガンの二種類になります。

最初は、オートマチック式の拳銃にしようと考えましたが、使用

する火薬が黒色火薬だとジヤム（弾詰まり）などの動作不良が多くて使えないんです。でも、輪胴弾倉ならその心配はありません。

あとは、長物のシヨットガンです。拳銃だけじゃ火力不足ですからね。

ちなみに使用する弾は主にスラッグシェルです。この弾は元々シヨットガンで使う弾の一種で、複数の弾をばら撒く散弾とは違い単発式の弾丸です。これには最初っから風切り用の溝が作られているのでお徳なんですよ？ シヨットガンその物も、本来の弾丸である散弾との併用も可能と汎用的です。最初は、レバーアクションもいいと考えたんですけど、構造が複雑かつ外部に露出する部品が多いので却下しました。レバアクは、後々狩猟用として売りに出しましょう。形状は綺麗ですしね。

あ、シヨットガンはチューブ式弾倉ではなく、即座に脱着が可能なマガジン式に変更しています。チューブ式だと装填が大変なんです。

それにしても、雷管の製作にホント手間取りました。“夢幻書庫”で見つけた“まねしちやいけない危険な化学”という本のおかげです。この知識がなかったら、銃の実用化が遅くなっていたところでした。

まあ、タルプにあるはずのゼロ戦に積み込まれている弾薬から、無色火薬と雷管のサンプルを手に入れるという方法あったんですけどね……。

閑話休題。

「……と言う訳でお父様、この筭を使った航空部隊をヴァリエールとフォンティーヌの共同で設立したいのですが……」

今は、お父様と二人っきりで交渉中です。間のテーブルには、シヨットガンにリボルバー拳銃、それに筭が置かれています。

「最悪、試験部隊でもかまいません。ヴァリエールでそのような部隊があったと言う前例が欲しいのです」

「そうは言うがルーティア、新しく部隊を作るとなると……」

「はい、運用費用について比較を行えるよう、ラ・ヴァリエール領で保有するグリフォン隊の費用を元に必要経費を仮算出しました」  
フッフ、仕事に抜かりはないですよ？　ちなみに、部隊の規模は現行の部隊と同じです。ただし、幻獣を扱うわけではないのでそれらにかかる食費や糞尿の処理費、寝床となる厩舎の維持費は全面力ツトです。それと、箒は慣れさえすれば誰でも乗れるので、幻獣騎乗と言う特殊技能で高い給料を払う必要もありません。トータルで見ても経費が安く済みますし、同金額でより多くの人員を確保できるでしょう。

お父様はしばし書類と睨めっこをすると、

「……もし、ヴァリエール領は賛同しないと言ったら？」

「その時は、フォンティーヌ領にみで航空部隊を設立し、これらの装備を正式配備します」

「……そうなると、フォンティーヌ領は他のどの領地からも容易に手が出せなくなるほどの強力な軍事力を持つことになる……か」

「それなりに時間はかかりますけどねお父様？」

フォンティーヌで部隊を立ち上げるのはすでに決定事項です。警邏機能が外部に依存なのはさすがにマズイです。それに、領地そのものが擬似的に一つの国として機能している昨今の統治下では、多少過剰な戦力でも必要なモノ。でも、すぐにこれらの軍備を揃えるのは難しい。それに、時間がかかりすぎると風石の暴走による大隆起までに結界炉の価値が上がってくれません。

現象が起きてから、

「こんなこともあるのかと！」

などとモノをだしても、その信憑性を確保するまで時間がかかります。あれは本格的にピンチになって初めて使える手なんですよ？　「テスト？　そんな事している時間はない！」

ではもつとダメです。そんな博打、最終回ラスボスの目の前でやってください。盛り上がりますから。

閑話休題。

で、手っ取り早く運用データが取れて信頼を得られる場所といえ  
ば、軍です。それも身内であれば極秘事項が漏れる心配もありませ  
ん。

「……よし、少数だが試験部隊の設立を考えて見よう」

「はい、やっぱりお父様は話の判る人で助かりました！」

良い返事が聞けて本当に嬉しいです。後は、部隊を維持できるよ  
うに十分な補給路を確保すれば万事OKです。

\*

A n o t h e r   s i d e

末の娘    ルーティアが持ってきた銃を手に取り、しばし考える。  
娘の言ったとおりなら、この銃は恐ろしい武器だ。連射のサイク  
ルが我々メイジが魔法を唱えるよりも早く、

ジャキャンツ！

至近距離なら、この連射できる散弾銃で容易に落とされるだろう。  
例え離れていても、このスラッグシェルとか言う弾に狙い打たれる  
だろう。

拳銃もそうだ。手の平に収まる大きさで連射できる銃。あの娘は、  
こんな恐ろしいものを世に送り出すつもりなのか？

……いや、だから“軍”なのか？

もしこの銃が市井で量産され、反貴族の賊の手に渡れば大惨事  
になるだろう。

そして、フォンティヌ領にはそう言う輩が多々集まっている……。  
ルーティアから聞いたが、貴族に“裏切られた”または“虐げられ  
た”者達が領民として暮らしているらしい。

我が娘ながら、なぜそのような爆弾を好き好んで抱え込むような真似をするのか理解に苦しむが……、  
『苦しんでいる人を見て“可哀想だ”と、哀れめば……“自分はその人を助けたい”と思えてしまう』

きつとルーティアの眼には、あの者達がクランと同じ様に見えるのだろう。そして、ソレに抱く思い。

『ただ、引けぬと……引いてはならぬと私の中で叫ぶモノがあり。それに従っているだけです』

だがそれは、この世界を敵に回すことにも等しいの事なのだぞ？  
「……せめて、もしもの時に助けてやるのが父親としての役目だな」

A n o t h e r   s i d e   o u t

\*

数日後、ラ・フォンティーヌとラ・ヴァリエールと合同で、箒を装備した魔法衛士隊　通称ブルーム（箒）隊が結成されました。

部隊規模は十名と小さいものです。しかも、そのメンバーの殆どが子供。さらに言うと、ラ・フォンティーヌのメンバーは全員女の子で、ラ・ヴァリエールのメンバーは全員男の子です。ラ・フォンティーヌはある事情で女の子が多いですからね。女の子ばかりなのは仕方ないとして……、お父様には事前に全員女の子だと教えて置いたのに、なんでメンバーが男の子ばかりなんですか？　いくら学園入学前の下級貴族、その第三子か第四子だけを集めたからって……一人くらい女の子がいてもいいんじゃないのかな？

「お嬢様、一人だけ女の子ですよ？」

クランさん、頭の中を読まないでください。

どれどれ……うん、履歴書には確かに性別“女”になっている子が一人だけいます。あのどこか眼が据わっていてボロボロな子ですね。

履歴書には、妾さんとの間の子供で『嫁がせる先もないので、ヴァリエール家で保護する』と言うお父様の注意書きがありました。他の人の履歴書にも眼を通して見ると、なにやらきな臭い注意書きがチラホラと書かれています。大丈夫かな？

「よっしゃあ！これで原作組みと接点が……これでかつる！！」などと、小さくガツポーズしている子もいます。なんだか頭が痛くなってきました。

いや、そっちの問題も問題なんですが……、

「次は、このブルーム隊の顧問の紹介です。

ヴァリエール公爵夫人、カリーヌ・デジレ……またの名を“烈風”カリンです」

こっちの問題も厄介です。

壇上にお母様が立ってその場にいた全員を睨みつけます。あゝもう、そんなに威圧しなくても……。やっぱり最初が肝心なんでしょうか、お母様の出すプレッシャーで全員萎縮してカチンコチンです。そうです、お母様が箒隊の顧問を買って出たのです。

「ルーティアに決して逆らわない、鉄の規律を持つ部隊に仕上げて見せるわ」

と、張り切ってらっしゃいました。いや、あの……程ほどにしてくださいね？ 皆さん私みたいに丈夫じゃないんですから。

ちなみにお母様は箒の初心者です。……いや、でした。さすがは私たちの母と言うべきか、一日とかからず箒から墜ちなくなりまして。その後直ぐ、高高度での飛行にアクロバティックな機動も可能になっています。何このチート？ フライで飛ぶわけと違うんですよ？ 重心制御とか、制御翼や結界炉の操作とか色々大変なのに……

…。

「そこ、姿勢を乱さない！」

「は、はい！」

「どもらない！！」

「はい！！」

今は皆さん、お母様に恐縮しながら箒で飛んでいます。もちろんヴァリエール邸にある泉の上です。

「ルーティア、あんなで大丈夫なの？ あ、また一人落っこちたわ！」

「ルイズお姉様、大丈夫ですよ。訓練はまだ始まったばかりなんですから」

私たちはそれを離れて見えています。もちろん私たちも訓練に参加しているからですよ？ 私自身が部隊の発案者ですからね。今のところは、一緒に編隊飛行の練習です。これも立派な訓練ですからね。もつとも……、

「「わぁ！？」」

「「ぐお！？」」

「「きゃぁぁ！！」」

悲鳴と共に次々と水柱が上がります。

この調子じゃ、銃や魔法を使用した戦闘訓練はまだまだ先になりそうですね。



## 楽しく転生23（後書き）

物騒な世界ですからね。今回は武力を手に入れるお話でした。

エレオノールさんをアカデミーからスカウトするのは見送りしました。

あの人がいないと、アカデミーの動向が分かりませんからね。

あそこは、オリ主の作る学び舎に刺客なり何なり送りつけてきそうな場所のひとつですから……。

ルイズの強化案は、やっぱり能力（異世界の力）の付与が一番シツクリ来るかな？ オリ主の000みたいにアイテムを渡すのもいいけど……丁度いいアイテムのアイディアが浮かばない。orz

一応、月衣の発現は候補に入っています。が、ナイトウィザード率が高いから、他の作品のモノをもうちよつと絡ませたいという……。やっぱりアイテムなら杖とかかな？

箒騎士の姿が想像できない……。ので、ブルーム隊と言つのを結成させました。ネギま！ のアリアドネー魔法騎士団候補生（ユエ達）がイメージです。あんな感じなのかな？ いや、ウィキには箒ジャンキーって書いてあったし……。うむ。

## 楽しく転生24（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

ちよくと、今回は……。お気に入り件数が一気に減りそうな、そんな予感。

## 楽しく転生24

\*

Another side

ブルーム隊が結成されてもう半月。なぜかルーティアお嬢様は、突然雲隠れをしてしまわれました。……いえ、誘拐されてしまったとかではなく、確かにこの屋敷にちゃんといろと思っただけです。時折、ちゃんとした犬耳メイドさん型のガーゴイル達がアイン・ソフ・オウルに食事なり何なりを乗せて運んでいくのを何度か見かけましたし。

でも……、さすがにこれだけルーちゃんと会わないとルーちゃん成分が……ん？

「もう、ルーティアあつたら第隊の訓練をサボってなにやってんのかしら？」

あそこにいらっしやるのはルイズお嬢様？

「あ、克蘭。ルーティアを見なかった？」

あの娘つたら、ココ最近ずっと顔を見せないし……克蘭は何か知らない？」

ルイズお嬢様もですか、

「はい、私もここ最近ルーティアお嬢様と会っていないんです。

そろそろ、恋しくて、寂しくて……」

「あゝ、まあ分からなくもないけど……一応ルーティアは公爵貴族だからね？ クランは今、平民のメイドさんだからね？ もうちょっと尊敬とか、畏怖とか……」

「命の恩人に畏怖などと、ルイズお嬢様は恩知らずなのですか？

ボロボロにだった私を、まるで神の御使いのごとく救ってください  
ったルーティアお嬢様に感謝こそすれど……」

「あーうん。それなら良いのよ、うん」

ちよつと、芝居が効きすぎましたね。でも、本当に感謝している  
んですよ？ もし、あの時ルーちゃんに拾ってもらえなければ、野  
生動物のお腹の中か、はたまた人買いに売られて生き地獄の人生。  
どちらに転んでも最悪でした。

「はあ、ルーティアったら何処にいるのかしら？」

「あ、ソレでしたら」

「知ってるの？」

私は、足元をチョコチョコと移動しているハルケギニアではあま  
りに独特な形状をしたガーゴイルたちを指差して、

「彼らに付いて行けば、ルーティアお嬢様の所に行けるかと」

「そう、ならクランも一緒に行くわよ！ クランも一緒なら、あの  
娘も素直に出てきてくれると思うし」

ルイズお嬢様だけでも、十分にルーティアお嬢様を説得できると  
思いますよ？ まあ、私もルーティアお嬢様とお会いしたいと思っ  
ていたところですし。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

えーと……、これなんでしょう？ 私の目の前に広がっているこ  
の力オスな光景は？

「足りない足りない手が足りないいいいい！！！」

そう言いながら、背中から 某力ニアマーよろしく無数の腕  
型ゴーレムを背中から生やして、どこか虚ろな眼で書類作業を行う



様達が一斉に発狂して……猛スピードで壊れた様な言動を吐きながら、猛スピードで壊れたような動作をしながら……それでも正確に作業をこなしています。なんと言うか、アレな光景ですね。

ルーティアお嬢様たちが発狂した瞬間、書き上げた書類などが散乱したりもしました。ですが、それらは全て掃除用具で突っ込みを入れそうなプチ犬耳メイドさん型ガーゴイルや同じような大きさに変更された 黒い虫を殺して回りそうなピンクの髪のメイドさんに黒髪のショートボブの女の子、それと割烹服は大和撫子の戦闘服ですとか言いそうなメイドさんに、中学生を乗せて宇宙を漂流した某娯楽施設で作られた六角片で動きそうな緑色のロボット……。それらがいそいそと散らばった書類やらなにやらを片付けていきます。彼らがいなかったら、ここはもつと凄惨な惨状になっていたでしょう。

あ、この緑のロボット可愛いなあ……。

「って、冷静に現実逃避している場合ではありませんー!」

とにかく、この無数のルーティアお嬢様は偏在でしょう。本人もここ数日見ていないので、おそらくこの無数の偏在ルーティアお嬢様の中にまぎれているはず……。

「ッー!」

見つけました。部屋の奥の方で、壊れた笑いを出しながら、必死に許しを請いながら、新しい筭の最終調整をしていました。

「ハハハ!!! これで、これで世界は私のも、ノー!!!!!!?」

スパーン! グシャー!!

「ご乱心しないでくださいルーティアお嬢様……って、あれ?」

つつい、発狂したルーちゃんを月衣から出したハマノツルギで殴ってしまった。ソレまではまだいい。いや、封権政のこの世界ではだめかな? まあ、結果的にルーちゃんが気を失ったので、作業をしていた偏在たちのコントロールも切れてカオスな光景が綺麗さっぱりと消えてしまいました。でも……、

「えーと、ルーちゃん?」

目の前には、トマトケチャップをぶちまけた様に真っ赤なナニカを頭から噴出させているルーティアお嬢様がいます。エ、ナニコレ???

「い、いくらなんでも、ハリセンで？ え？」

お嬢様の頭が、ハリセンで潰れました。……いや、ちよつとまつて！ ルーちゃん、月衣があるでしょ！？ こんなギャグみたいに死なないでよ！！ って、ハマノツルギは魔法無効化だから月衣意味無いじゃん！！ アイン・ソフ・オウルの守りは！？ なんて発動しないのよ！！

「こ、こんな形で恩知らずになりたくない！！！」

ルーちゃん、起きてください！ 起きてってば！

ガチャ、

「先程からウルサイですが、何があつたの……ッ！？」

「お、奥様……。私、わらし、お嬢様を……」

「克蘭、おちつきなさい。そう、おちついて……ライトニングー！！！」

「奥様もおちついてください！ わ、私もおちついてしんこキユー……って、ごめんなさいごめんなさい！！」

ガンガンと、固定化と硬化のかかった壁に自分の頭を叩きつける。でも、私の頭よりも壁の方が先に根を上げて崩れてしまいます。

そして、天啓が下りました。そ、そうです！ “慈愛の宝玉”で蘇生しよう！！

「ま、まだ助かるかもしれません奥様！！」

「そ、そんな盛大に頭から出血させておいて、助かるだなどと言わな……」

奥様とそろってルーティアお嬢様の方を見ると、

「……二人とも、なにをやっているんですか??」

何事もなかったように、そこルーティアお嬢様が座っていました。そして、

「「ギャー！！！」」

私たちは、顔を見合わせた後、盛大に絶叫した。

「はあ、もういいです。疲れたので、寝ま……zzz」

私たちの混乱を他所に、ルーティアお嬢様は、机の上で丸くなつて眠ってしまった。

ちなみにルイズお嬢様ですが、当の昔に精神の限界に達したらしく、私がルーティアお嬢様に突っ込みを入れる前に気絶していました。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

「で、ルーティア、何か言う事はないかな??」

すごい倦怠感に苛まれながら、それでも居心地の良い(?)作業机から必死に起き上がった私は、なぜか険しい顔をするお父様達と出会いました。

えーと、

「おはようございますお父様。

そして、お休みなさい」

そう言つて、再び居心地の良い(?)作業机に横になる。

「そうそう、起きたらおはようつて、チガウ!

そして、また寝ないでくれルーティア!!」

なんですか?    なぜかは知りませんが、私、すつごく、眠いんです。だから、もう少しだけ……zzz。

「おい、起きろー!

起きてください。お願いだから……」

「ムニヤムニヤ、あと五分……一分でいいから……」



……その後、私が起きたのはかれこれ数時間が経ってからでした。  
「はあ……」

「そんなにため息をつかないでくださいお父様」  
幸せが逃げてしまいますよ？

「いや、ルーティアが無茶をしたと聞いてな……」

無茶？ ……しましたっけ？

そりゃ、ちよつとばかりやらなきゃいけない事が多かったですけど……。あれ？ なんだかここ数日の記憶が思い出せない？

「そう言えば……。人手が足りないからと偏在をシコタマ出した後、偏在との思考の並列接続なんかも試した辺りから記憶が……」

ガシ！

「人手が足りないのなら、私たちの方でも何とかするから。だからあんな壊れた様にならないでくれ！」

えーと、言っている事は良くは判りませんが……、

「わ、分かりましたお父様」

「うんうん、分かってくれたか！」

なんだか情けない顔で肯いています。お父様、威厳が丸つぶれですよ？

それはさておき……。ハハハ、なんだか凄い惨状ですね？

机の上や床に散乱する書類に、作りかけの筈とその部品があちらこちらに散らばり、構想だけしていた 某六角片で動くロボットをモデルにした“戦艦”の模型が部屋の真ん中に鎮座して……。なぜか一部の作業机や椅子が砕けていたり、壁の一部が陥没していたりもします。

この惨状を、私が作ったガーゴイル この大きさとアルヴィーズと言う分類になるのかな？ 犬耳メイドのプチネウス（偽）に同じ大きさのライフサイズ・ホイホイさん（偽）にライフサイズ・コンバットさん（偽）、ちゃんとした立体モデルがないので造詣が怪しいナビ・コミュニケーション（偽）についてで作ったプチディジー（偽）さん達がいそいそと散らかった部屋を掃除して回っています。でも、

「ふむふむ、風石動力炉じゃなくて結界炉って名前にしたのはこういう事……。」

（ヒョイツ）で、こっちの資料は船かしら？ こっちはハルケギニア全土を網羅する物流網の構想に……何かしらこの、鎧??」

彼らが拾い集める先から、なぜか実家にいるエレオノールお姉様に書類なり部品なりを奪い取られ。適当にそこらへんに置かれる投げ捨てられているので一行に掃除が終わらない。なおかつ、書類も整理できていないので中身がグチャグチャ……。

アハハハ……。とりあえず、落ち着こう。

\*

私が作業していた部屋、そこに集まっているのはお父様にエレオノール姉様、それから私を抱えているちいねさまです。

克蘭さんにお母様、ルイズお姉様ですが何故か寝込んでしまっただようです。アストレアさんですか？ あの人は今、フォンテーヌ領で働いているので屋敷にはいませんよ。

さて、

「えーと、まずはエレオノール姉様。いつの間に実家に帰られたのですか？ アカデミーの方が忙しいのでは？」

「私が帰ってきたのは昨日。アンタが部屋に籠もって何かしてるって言うから、暇なアカデミーなんか放って置いて様子を見に来れば……。案の定、面白い事をしていたわね？」

え、アカデミーが暇？

「そうなのよ！ あの後、他の研究の合間を縫ってひっそりと結界炉の研究を続けていたんだけどね。あ、研究仲間も出来たわ。ヴァレリーって新人の娘なんだけど、ポーシヨンの製作が得意な娘よ。でも上の人、評議会が圧力をかけて来て……そのまま二人そろっ

て末席にまで降格つてなわけ」

「あ、えっと、その……」

「別にルーティアが気にする事じゃないわ。

私たちも好きでやってた事だし……」。

そりゃ、最初はお父様に抗議してもらおうと帰郷したけどね。この部屋を見て、あなたがものすごく面白い事しているから……」

そこまで言うつと、満面の笑みを浮かべながら……手をクイクイツとしています。アハハ。私も混ぜるですか？

「で、でもエレオノール姉様はアカデミーの研究で……」

「だから、もう殆どまともな研究をさせてもらえないのよ。私の身分が公爵家だから、自主的に辞めるまで待つか、陳謝状の一つでも書かせるつもりね。

まあ、私は辞めるつもりないし……。さっき言つてた新人のヴァレリーも、魔力増強のポーションを作ったりして上からあまり良い目で見られてないのよ。だから、さきにこっちで確保しておいたわ」「いや、確保しておいたって姉様、確定事項で話を進めちゃったんですか？ 私は全然許可していませんよ？」

「あのねえ……。はあ、アナタ、実の姉をアカデミーとのパイプ代わりに使おうなんて考えておいて、よくまあそんな事言えるわね？」

あゝ、ばれてたんですねって、い、イフアイイフアイ!!？

ひとしきり私の頬をつねった後、エレオノール姉様はため息をついて、

「アンタのこれを見れば、アカデミーの研究なんて面白くもなんともなくなるわ」

「イタタタ、でも、エレオノール姉様はアカデミーに入って主席研究員に成るのが目標だったんじゃない？」

「そうよ、それも評議会のメンバーに選ばれるくらいすごい研究員になるのが私の目標……だったのよ」

だった？

「今は、違うんですか？」

「一番最初の目標は、カトレアの病氣とルイズの魔法……。評議会のメンバーに選ばれるようになれば、色々やれると思うってね。

でも、カトレアの病氣は、どこかの誰かさんが治しちゃうし。ルイズにいたっては、あんたの作った幕で毎日の様に空を楽しそうに飛んでいるし……。

ねえ、姉の私から目標を全部奪っておいて、ソレでいて他の子には色々あげて私には何もくれないのは不公平だと思わない、ねえ？」

「え、えつと……」

「不公平だと、思わない？」

「お、思いますエレオノール姉様」

「じゃ、決まりね？ それじゃ、早速アカデミーに辞表を……」

「そ、それは待ってください！ お姉様には、アカデミーに席を置いておいてもらいます。それが、私のやろうとしている事に参加する為の条件です！」

アカデミーとのパイプを失うわけにはいけません。それに、

「なに？ まあ確かに、働かずに実家で研究しているなんて色々風評が悪くなるでしょうけど……。やっぱり私って言うパイプが必要だから？」

「風評については、後々解消されると思います……。パイプの件ですが、動向を探るため以外にアカデミーで働いている人をこちら側に引き抜く為でもあります」

一応、国の最高研究機関ですからね。そこに集まる人達はおのずと優秀な人達になります。多少問題を起こしてしまうような“問題児”も集まるでしょうが……むしろそれがいいのです。現代地球で生きてきた私なら、アカデミーで異端扱いされて破門された人の研究が、もしかしたらまともな研究として見れるかもしれません。そう言う人達を確保できれば、凄まじい戦力になります。主に研究分野で！

「と、言うわけで……。エレオノール姉様にはまだアカデミーに席を

置いていてほしいのです」

「あゝ、分かったわ。だけど……」

「必要な研究費などは……お父様に任せましょう」

「な!？」

突然振られたお父様は、いきなりの事に驚きます。しかも、お金の話ですからね。凄いうろたえようです。

「可愛い可愛い娘の頼みです。聞いてくれませんか？」

「あ、いや、お金の事になるとなあ……」。

まあ、一応考えてみよう。一応だからな？」

そんな事言つて、ちゃんと用意してくれるんですよ？ まあ、

それに見合つたモノをちゃんと作りますよ？

「あらあら。ルーティアつたら、私の知らない間に色々とおくどい娘になつちやつたのね？」

侵害ですちいねえさま。私はちよゝと、子供にしては頭が回るだけですよ？ 悪性貴族にハプシエルを送り込んだり、盗賊や人攫いをドラマタのごとくなぎ払つて金品巻き上げたりしただけで、別にあくどいなんて……あれ？ 私つて十分あくどい？ ……考えたら負けですね

それから、エレオノール姉様に計画書の一部　まずは結界炉の高出力化の研究と、風石の分解と再結晶化の研究をお願いしました。結界炉の出力アップは、軍用で使う筈や戦艦、それから物流の高速化の為に、輸送船の推進機関へと繋がります。

分解と再結晶化ですが……一応成功しているんです。でも、時間がかかりすぎるうえに出来上がる結晶の力が弱くなります（力の減衰を“蒼い宇宙眼”で確認しました）。しかも、地下1000メートルに眠っている風石に対してまったく歯が立たないんです。と言うか、効果が届かないんですよ……。

私が風石ラッシュをするために、エレオノール姉様は頑張ってください!!!

## 楽しく転生24（後書き）

ノリで書いたらこうなってしまった。なぜこうなった？

オリ主も8歳を超えて、幼少期編もう佳境に来ています。

でも、その前にエレオノール姉さんを取り込めないかと……。それが今回のお話でした。

偏在って不思議ですよね。一人一人に人格があつたりなかったり……。解釈はさまざまですが、このハルケギニアでは、偏在自信に意思のある独立型と、本体からの意思で操作する遠隔型と言う二つに分けようかと。

ちなみに、オリ主は独立型の偏在の意識を、遠隔型の偏在を操作する要領で脳を並列に接続。擬似的にインターネットの真似事をし、000の“賢明の宝玉”が暴走。あのような壊れた状態になったと……。

壊れたノリは、まじしやんず・あかでみい？聖夜暴走！？より、修羅場と化した佐久間榮太郎達を想像してください。アニメでもそのシーンがあつたかな？

今回登場させたガーゴイル アルヴィーズたちの選定は……ひとえに私の趣味です！だって、みんな可愛いんだもん！！

シェフィールドさんにとられない様にしないと危ないな……。

プチネウスにライフサイズ・ホイホイさんにコンバットさん、プチ化デイジーにナビコ、皆可愛いよー！

……まあ、ロマリア対策に真ライフサイズ・ホイホイさんの登場を考えたかもしれませんが、ハプシエルもいるしいらないかな？

元ネタは、プチネウスはまじしやんず・あかでみいより、佐久間

榮太郎の外付け両親回路の娘さん（違います）。

ホイホイさんにコンバットさんは一撃殺虫ホイホイさんより、インセプタードールのホイホイさんとコンバットさん。

ディジーはトゥインクル スターシップより、ホームヘルパーアンドロイドのディジー。

ナビコはメダロット・ナビより、クラスター管理システム謹製のメダロット、ナビ・コミュニケーション。

あと、風石ラッシュは自粛しました！ さすがにこんなに簡単に難題が解決したんじゃないじゃないか！！

幼少期編も佳境になったので、そろそろタバサやジョゼット、テイファニアなどのフラグを拾ってようかと考えています。でも、どこら辺で介入するのが妥当でしょうか？

一応、原作で死んでいる人（弟のシャルルさんに、テファのお母さん）はそのままにしようかと……。

## 楽しく転生25（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。



## 楽しく転生25

気がついたら私たちももう十歳です。

そして、後数年で原作と言う名の流れに飲み込まれる……。

そろそろ、各国で原作メンバーに関係のあるきな臭い事件が発生し始める時期。そこで、きな臭くなる前に修道院で暮らしているジョゼット（タバサの妹）さんや、アルビオンでまだ平穩に暮らしているはずのティファニアさんなんかを回収しに行こうかと思っています。まずは……ガリアのジョゼットさんです。

メイドさんネットワークにより、アルビオンのモード公はまだまだ安心できると判断しました。もし何かあったとしても、アルビオンに転生しているであろう“勇者”さんの一人が何とかしてくれるはず？

それに、先にジョゼットさんたちと接触するのは、彼女たちが使っているフェイスチェンジのマジックアイテムが目的だからです。あれがあれば、ティファニアさんやそのお母さんをアルビオンでもフォンティーヌでも問題なく匿う事ができます！

エレオノールお姉様に製作をお願いしてもいいんですけど……ほら、理由の説明が面倒じゃないですか？ 一応、王都の裏路地とかの魔法具商とかも回ったんですけどね……。あんな便利で高度な魔法を発動させる魔法具は扱っていないそうです。

「と、言う事でやってきましたセント・マルガリータ寺院……修道院でしたね」

「お嬢様、いったい誰に言っているのですか？」

クラルの突込みは軽くスルーします。時々突込みが激しくなつてハマノツルギで叩かれる事も（出血する事も）ありますが……。克蘭さん、たくましくなりましたね。

閑話休題。

そして私たちの目の前には、私たちを警戒している修道院のシス

ター（？）の方々が手に手に桑やスコップで武装して出迎えてくれています。

「物騒ですね、そんなに歓迎してくれなくても……」

まあ、私たちがこの様な歓迎も仕方ありませんね。

なにしろ、まだお昼だというのにこの修道院は夜なんです。それも紅い月が一つだけ昇っている夜。月匣です。周囲は紅い月の光に染まり、海の方こうにあつたはずの本土も消えてなくなっている。こんな異常な状況で、普段見かけない人がいたら……警戒しますよね？ ちなみに私たちは、自分達が誰だか判らない様に変装しています。きっとそれも一役買っているでしょう。

ちなみに私は、白地に紅いラインの入ったバイザーを着け、同じく白地に電子回路の様な紅い幾何学模様を掘り込んだ特別なローブを着ています。持っている杖も普段使っているタクトではなく、ある特殊な機構を積んだ試作品の長杖です。

対するクランさんと言うと、目元から上だけが隠れる仮面（フリル付き）を着けているだけで、それ以外はいつも通りの白と黒のエプロンドレス。もちろん、身元が割れるような紋章などの無いものです。

「あ、アナタ達、いったい何者ですか！？」

ココは神聖なる始祖ブリミルの加護を受け、俗世を捨てたモノたちが修行を行う修道院。世俗モノが、しかも賊の類が来て良い場所ではありませんよ！！」

心外ですね。確かに怪しさは爆発していますが……。

「えーっと、賊じゃありませんよ？」

私達は、何かを強引に奪いに来たわけではありませんし……」  
「なら、何故その様な仮面を着けているのですか！？」

「これはちよつとした理由在つての事です。

それに……仮面を被っているのは“お互い様”なのでは？」

そう言つて私は、バイザー越しに眼を細めます。

今私が言つた事を理解できない若い修道女達は、その殆どが顔を

傾けています。ですが、それを理解しているごく一部の人は一斉に顔色を変え、直ぐに獲物を持ち直して一步前に出て来ます。

「……」

それを見たクランさんが、無言でハマノツルギを抜き一步前に……

「止めなさい」

それを私が止める。いざこざを起こすために来たわけではないのです。それに、へたに怪我人も出したくないし……。

「これを預かっておいてください」

そう言つて長杖をクランさんに預け、警戒するシスターさん達のもとに丸腰で　アイン・ソフ・オウルを始め、月衣の中に武装が入っているので丸腰とはいえませんが　歩いていきます。そして当然のごとく私に桑やスコップを突きつけられます。いい気分はしませんが、仕方ないですね。

「此度の突然の訪問、真に申し訳ありません。

出来れば、この修道院の責任者の方とお話がしたいのですが、責任者の方はどなたでしょうか？」

「賊などに……！」

「責任者は、私です」

「修道院長さま!？」

そう言つて奥の方から出て来たのは、顔に深い皺を刻んだ……なれと言つか孝行おばあちゃんな方です。あれ？　もうちょっと若い人じゃなかったっけ??　……まあ些細な事はこの際いいです。

「それで、どの様なご用件でしょうかミス？」

「はい、用件はこの修道院で保護している人達についてお話がしたく、自ら足を運ばせていただきました」

「そうですか……。ですが、ここは俗世を捨て永遠の祈りを捧げる場所です。

ここでの決まりとして、過去の詮索はしてはならないというモノがあります。故に、私たちからは何も……」

「偽りの仮面は、被り続けられず本物の顔すら飲み込み犯す。申し訳ありませんが、貴方達が話し合いに応じてくだらないのでしたら……その首から提げた聖具<sup>ロザリオ</sup>を全て砕かせていただきます」私がそう言うと、一斉に場の空気が変わった。聖具を破壊する。ブリミル教が支配するこのハルケギニアでそのような行動は……異端。すなわち、始祖ブリミルに対しての背徳行為になります。でも、それだけじゃないですよ？ なにしろその聖具は、あなた達の大切な大切な仮面なんですから……。

「アナタ！ 聖具を破壊する事がどの様な行為か知っていて言っているのですか！？」

修道女の一人が声を上げる。私はそちらの方に向き直ると、  
「ええ、十分に知っています。ですが、それは本物の聖具を破壊した時に被るもの。」

それが聖具の形をしたまったくべ……」

「お止めなさい！」

「修道院長！？」

「……では、話し合いに応じていただける気になりましたか？」  
「分かりました応じましょう。ですが、それ以上ココでその事を口にししないで頂きたい」

「ええ、分かりました。」

そうですね……ココでは場所が悪いので、どこか落ち着いて話し合える場所はありませんか？」

「それでしたら、こちらに……」

そう言っただけで私たちは、セント・マルガリータ修道院の奥へと案内された。

私達が通されたのは、修道院の奥にある執務室のような場所でしたが、

「……さて、私としても、このような歓迎はあまりよろしくないと思いますか？」

そう言つて、私たちを死角から襲つた者達を積み上げて埃を払う様に手を叩く。ここを専属で警護している聖騎士が何かでしようか？ 暗い布を巻いた風体は、どこか忍者を思わせます。ただし、その身に着けているやけにデカイ装飾品なのか武装なのか分からない物が、忍と言う意味をぶち壊しにしていますが。いや、忍気なんて毛頭ないんでしょう。リーダーと思われる人の装束は上から下まで真っ赤ですし……。

もつとも、この程度の輩では私たちの相手にすらなりません。

お母様、これもアナタとの修行の成果です。何度も三途の川を見せてくれてありがとう！

私がやったのは、彼らが襲い掛かってくる瞬間に、雷を障壁状に展開する防御魔法 名づけて雷壁方陣 で刺客さんホイホイを作り大半を行動不能にただけです。面白いものですよ？ 皆して飛び込んできてはビリビリと感電して撃墜されて行くと言うのも……。あとは、取りこぼした襲撃者をクラルさんがハマノツルギで各個撃破して終わりです。

それにしても、この衣装はどこかで……まあ、いいでしょう。

「こちらとしては、一応穏便に交渉しようと思つていたのですが……」

……

そう言いながら、恐怖に震えている修道女や修道院長を見詰め、  
「実力行使で、物事を進めてもかまいませんよね？」

長杖の先端からブレイドを噴出させ槍の様になる。そして、その切っ先を近くの来客者用のテーブルに振り下ろして真っ二つに切断した。

「ひっ！」

それを見た修道院長は顔を真っ青にし、すがりつく様に許しを求

めてきました。

「お、お許してください！ 私の命はどうなってもかまいません。ですが子供たちの命だけは――！」

「そうですね、私もそう何度も許せるわけではありません。

……ですので、その懷に隠しているナイフも捨ててもらいましょうか？」

私の指摘に、修道院長は一瞬ビクリとします。ですが、素直に隠し持っていたナイフを捨ててくれました。他に武器らしい武器は……持ってなさそうですね。

「それでは交渉に入りましょう」

・  
・  
・  
・  
・

「以上が此方からの要求……と言うよりお願いですね」

「……………」

「この修道院で暮らす彼女たちの特別な事情は解っています。

かく言う私も、彼女らの様に双子の片割れ……生まれた国が違うので親に棄てられる事もなく幸福に暮らしてこれました。

今現在、彼女たちにとってここが一番安全だとは思われます。ですが……彼女たちにももう少しだけ自分の道を選ぶ権利があると思っています」

私がした要求は簡単、ここで暮らしているガリアの双子の片割れたちにこの修道院の外に行きたくないかを問う事。もちろん、ココを出た先の受け入れ先は確保してあるという事も教えてあります。ただし、そこが三つの王家が収める国のうちの一つである事だけで、トリステインのラ・フォンティーヌ領だとは教えていません。

「分かりました。ですが……」

「分かっています。無理強いはしません。」

「ここが彼女たちにとって、今現在もとても安全な場所である事に代わりはありません」

交渉は無事に成立しました。ちよつと力任せでしたが……。

別に修道院を潰しに来たわけじゃないんですからこの結果は当然です。と言うか、潰したらダメなんですよ。もし潰しちゃったら、棄てられた子達を助けてくれる人がいなくなっちゃいます。この修道院って、赤ちゃんも育てているんですよ？ フォンティーヌにはまだ乳幼児を育てられるような施設はありません……。そう言う点では、修道院はやっぱり必要なんです。今度、計画書にも盛り込んでおこう。

閑話休題。

そう言う訳で、この修道院から外の世界に行きたいと言う方の希望を取って見たところ……、

「けっこういますね」

「皆、外の世界と言うものに興味を向ける年頃ですから……」

遊びたい盛りの子供……と言うべきか、下は私とだいたい同い年から上は17・8位の娘たちの殆どがこぞって外の世界に行きたいと言いました。年輩のシスターさん達はそれを見て皆顔を青くしていましたが……。

その後、最終的に私と一緒に外に行く事を決めたのは、最初に外に行く事を希望した内の大体半数でした。

減った理由ですか？ それはもちろん、

「外の世界は、必ずしも優しい世界とも限りません。」

あなた達にとって、それこそ地獄のような日々を送らねばならないかも知れません。

……それでも構わないという決意のある方だけ連れて行きます」

と言うと、半分の人が躊躇してしまいました（当たり前ですね）。

ココは安全な鳥籠ですからね」。

「それではまた、一年後にやってきます」

そう言って私は、希望者をアイン・ソフ・オウルで吊るした籠に乗せて飛び立った。その後は一旦陸地に運び、そこから馬車などの陸路を使ってトリステインはラ・フォンティーヌ領を目指していきます。

そうそう、セント・マルガリータ修道院を出て行く半数の中には、ジヨゼットさんは含まれませんでした。ちょっと予想外でしたが、どうもあのオッド・アイの少年がからんでいるようです。あんないたいけな少女、キザったらしいジュリオにはもつたいのに……。もうこの歳からお熱なんですか？……まあ、いいでしょう。人の恋路を邪魔するのもなんですからね。

あ、

「……そうだ、一服盛るくらいは別にいいですよね？」

ジヨゼット ジュリオ  
彼女と彼を絶倫にして、ジュリオ彼を服上死させるのも……ブツブツ……」

「お、お嬢様？」

ちよつと物騒な事を考えてしまいました……まあ、原作で素直になれなかった彼にはちょうどいいかもしれませんね？

……ただ、一つだけ気がかりな事を修道院長から教えてもらいました。

それは、ロマリア本国の宗教庁命令での修道女の徴収。そして、その後の消息の不明です。

セント・マルガリータ修道院以外でも、忌み子が預けられている修道院は他にも幾つかあるようです。そのうちの一つででの出来事です……どうにもきな臭いですね。

「さて、どうしたものでしょうか……」

私の呟きは、まだ静かなハルケギニアの空に消えていった。



## 楽しく転生25（後書き）

今回は、少しだけ時間を進めて原作組みの回収イベントを行いました。

色々密に書くと話数が増えるので、その分本編突入後エタ化しやすくなる危険性が……。

最初は、ジョゼットさんなどの双子さん修道女です。比較的回収がしやすくて、危険な場所です。他のSSでも、初期に介入される場所かな？

修道院なんて書いてありますが、男の修道士はいませんね。女所だろうし。またフォンティーヌ領が女の子で溢れる……。

ジョゼットさんの回収は、この時点では見送りました。後々回収します。

フォンティーヌ領の開拓やらなにやら、いきなり二年間もすっ飛ばしちゃいましたが……順調に進んでいます。本当は、もっと細かく進捗状況を書きたいとも思ってたんですけど、それは学園編に入ったらチラホラと出していく予定です。

ココで簡単な原作の時系列表を、

園遊会、アンリエッタとウェールズの出会い（ルイズ13歳

前ガリア王死去、ジョゼフの王位継承（ルイズ12歳、タバサ1  
1歳

モード公粛清事件（ルイズ12歳

オリ主、ジョゼットの回収へ（ルイズ10歳

……あれ？ ラグドリアン湖の園遊会と王位継承の時期が、あれあれ？ 予定していた流れが……。

本当は、園遊会でジョゼフやイザベラなどと知り合いになって、

その後、王位継承とオルレシアン公の粛清事件への介入と言う風にしようと思ったのに……。久々に原作読み直したら、この落とし穴

orz

ま、まあ何とかなるか……。な？

## 楽しく転生26（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生26

「ここが、私たちの新しいスタートライン……」

修道服を着た幼い女が、フォンティーヌ第一学校の校舎を見上げて呟いていました。

他にも、この幼い修道女の様に校舎を見上げたり、街中を走り回っている水道橋や赤レンガ模様の集合住宅や、周囲を山で囲われた牧草地などに目を奪われています。彼女達の顔には、希望と不安が入り混じっていて、だけどそこには彼らの本当の顔を奪ってきた仮面はありません。むき出しのままの表情で、私たちの街を見てください。

……さて、このまま呆けていてもらっても困りますね。

パンパン！

「皆さん！　ちゅうもーく！！」

皆さんはもう、修道士ではないのでいつまでも修道服でいられません。代わりの服はこちらで用意したので、アチラの建物でソレに着替えてもらいます！

……それじゃイリンさん、後はお願いしますね？」

「はい、お嬢様！」

「……？」

この学校で働いている翼人のメイドさん　イリンさんに、皆さん一瞬ギョツとして固まります。まあ、普通に生活していても合うことが稀なのに、隔離世で生活していた彼女達からしたら『翼とか獣耳や尻尾』が普通に生えている亜人さん達のインパクトが強かったみたいです。

「それでは皆さん、私についてきてくださーい！」

「……」

「皆さん、どうかされましたか？」

と言って、校舎に入って行こうとしたイリアさんが振り返ります。

それから、早く来てくださいと言うと彼女は校舎の中に入っていました。ソレを見て、私が特に何も言わないでいると、皆さんは恐る恐ると付いていきました。

「ふう……」

これでひと段落……、

「ふう、じゃありませんよルーティアお嬢様？」

そう言って、克蘭さん……ではなくて、別の翼人さんが降りてきました。彼女は、フォンティー又第一学校で精霊魔法（座学）の教鞭をとっている先生で名前は……、

「今は、私の名前はいいです。」

それよりも彼女です！ 毎回毎回、外の人のおあいふ態度に結構傷ついてているんですよ？

彼女は、いつもああやって明るく振舞っていますけど……」

「それは分かっています。」

ですが、これは必要な事なんです。

この領地は、他の領地と違ってアナタ達の様な友好的な亜人さん達との共存を行っています。それを 多かれ少なかれ受け入れてもらわなければ、この領地で暮らしていく事が困難になります。

それに、一番最初の印象が後々尾を引くと言う事もありますし……彼女の様に明るくて人当たりの良い方が最初の出会いとしてもってこいなんですよ」

第一印象って大事ですからね。」

「ハア……その点に関しては重々承知してます」

「分かっていただけにいるならそれで良し、です。」

……そう言えば話は変わりますが、この前イリアさんに告白したと

「あー、彼女達の書類手続きをしないと。それじゃ私はこれで！」  
会話の雲行きが怪しくなったのか、彼女は急いで校舎に逃げ去ってしまった。

フフフ……。彼女（翼人）達も、私の決めた決め事をだいぶ受

け入れてくれたみたいです。ちなみに私個人としては、白い百合が咲き乱れようと黒い薔薇が咲き乱れようと特にかまいません。まあ、ぶっちゃけて『子供が出来れば文句は言わないよ』が指針です。

「さうで、いったいどっちがファーマとオウマになるのか……あれ？ 私は何を言ってるのかな？」

うゝむ、……なにやら電波が入った感じがしますが、気にしないでおきましょう。

それよりも、最近暴れ足りなくてウズウズしてるんですよ。ココのところ毎日毎日デスクワーク三昧で……、

「そうだ。気晴らしに竜を狩りま……」  
スパーン！

やたら小気味良い音と共に、私の頭部に凄まじい衝撃が走った。そして、私はそのまま地面に倒れ頭から赤い何かを吐き出しながら最後の力を振り絞り『クラン』と地面に血文字を……、

「ルーティアお嬢様、御ふざけになるのもいい加減にしてください」  
はあ、クランさんはジョークが分かっていますね。私はさつさと起き上がると赤い何かを消し去ります。

「あと、今日はピクニックに行こう的なノリで竜を狩に行こうとしないでください！」

え、ダメですか？ どこの世界のハンターさん達は、いつもそんなノリでリオとかラオとかシェンさんを狩に行きますよ？ ほら、私だってスラッシュアクス持ってますし。

「お嬢様……」

……はい、分かりました。自重します。ですから、その目を止めて下さい。

「ふう。」

それではルーティアお嬢様、不在中にお仕事が山のように溜まっております。執務室までご足労お願いしまっ！？」

「それじゃクランさん、私はちよつと火竜山脈まで行って来ますね！  
では……！」

書類仕事はもうこりこりです！！ あの一件以来、大量の書類仕事をすると何故かトラウマを思い出すように壊れそうになるんですよ！！ って！？

ガシ！！

「逃がしません！」

「いやあああ！」

そして、私は情けない悲鳴を上げながら、ズルズルと校舎の中にある執務室へと連行されたのだった。

チャンチャン。

\*

ドカツと椅子に座り、同じくドサツと目の前に詰まれた書類の山。私は、それを見てスツゴクげんなりとします。これが、新しい機械の設計図や企画書ならまだマシなんですが……。まあ、いやな仕事はチャツチャと片付けましょう。

さて、ここで書類整理と一緒に一旦現在のフォンテューヌ領の発展具合についておさらいしておきましょう。なんだか知りませんが、二年間ほどの空白期間がありましたし……。

フォンテューヌ領の街は、他の領の街と違い学校を中心に発展して言っています。これは、中世ヨーロッパ的な世界であるハルケギニアでは結構異例な事で、本来なら宗教関連の施設、教会や修道院、孤児院を中心にしてクモが巣を張るようにして街が発展していくんですけどね。

まあ、ロマリア関係の教会からそういった施設を作って司祭を就任させなさいと言う圧力はかかって来ています。今回クランさんが持ってきた書類の中には、そう言った類の手紙も含まれています。

今のところ、宗教関連の施設建設は後回しにしています。やっぱ

り元が神様に対して寛容な日本である私には、ロマリアの掲げている異端審問とかエルフを排斥せよとか言う教義を『はい、そうですか』と受け入れられないんですよ。ついでに言うと、彼らの言う經典の原本　始祖の祈禱書の序文を原作知識で知っているので、その教義に色々と突っ込みを入れたいんですよね。まあ、今のところ入れませんが（笑）。

まあ、そういった類の手紙には危険なモノが仕掛けられてたりもする　過去に一回、手紙に“普通”の毒物が入っていましたので、入念に検査した後で開封しています。もつとも、流し読みしてそのまま専用の籠（ゴミ箱）に投函。後は、活版印刷で量産した“お返事”の手紙を送り返す様に指示を出すだけです。

閑話休題。

次は、街の開拓計画の進捗に関するモノですね。

学校は、最初の都市郊外の村にありそうな小さな校舎から一変して、さまざまな教科やら研究やらを行うために日々増殖を行っています。具体的に言うと、校舎の裏にある伐採した山を幾分か平坦に慣らし、山の反対側までと続くくらいに校舎が伸びています。こちら辺は、結構無計画に建設していたのでそろそろ最適化する必要があります。建築技術が向上したら、高層建築や地下施設　エヴァのジオフロントみたいのを建設するのも良いですね。

そう言えば、丁度学校のある山を越えて少しいくと旧フォントイー又領の領主宅というか元ヴァリエール家の別荘があります。今は使っていませんが……元々は公爵家の別荘なので屋敷はそれなりのモノ、後で何かに使えないかな？

水源と水道橋を挟んで反対側には、学生用の寮が山腹に段々畑の様に生えています。居住区と言う枠組みで40人くらいが住める寮を10棟程建設しましたが……さすがにこれ以上は不要かな？卒業した学生の中には、フォントイー又警邏隊　箒隊等に所属するなどして、個人宅を持てる様にまでなった人もいます。すし。他の領地から引っ越してきた人達の中にも、個人宅を持っている人



がいますしね。

「現在の住民数に対して、住居の緊急的な必要性は皆無つと……」  
カキカキ。

そうそう、もちろんフォンティーヌの街はトリスタニア（トリステイン王都）の様に道が狭かったりはしません。メインの道路は、道幅が馬車が交互通行できるくらいにとつて有ります。それと、治水の面でも日本の江戸を参考にしっかりと街中に水道橋を張り巡らせ、水道橋から落とす水の圧力で作動する簡単なスプリンクラ―を設置しています。一応ですが、クラブマンに装備させる事で、きる消火用のポンプも作っておいたので、これで火事が起きても安心です。

ふふふ、これでクラブマンもあと十年は活躍できますよ！！

……あれ？ 次期重機兼警邏ゴーレム、A V 9 8 構想？ ナンデス力この書類は？

閑話休題。

残るは、商業や工業関連ですね。

工業に関しては、領地の一角を工業区画として工房を建設。そこでこの領内の工業生産を一括で行っています。主な製造品は、箒や結界炉の部品など難しいマジックアイテムから、草刈用の鎌や包丁、鍋の様に生活用品等と幅広く取り扱わされているのですが……やはり、まだまだまだ始まったばかりと言う感じです。

一応、工房は工房。研究所は研究所で分けています。で、研究所と工房をエレオノールお姉様達がんばって皆をひっぱっている様です。……本格的に工房からの成果が出るのは後数年といったところでしょうか？

あ、そうそう。エレオノール姉様には、結界炉での風石の分解と再構成の研究の必要性を知ってもらうために、大深度に眠る風石とそれによる大隆起の事は教えておきました。もちろん、原作知識とかではなくて“蒼い宇宙眼”の力ですよ？

まあ、これを知ったエレオノール姉様は一週間ほどの現実逃避を

しちゃいましたけど。今はもう大丈夫ですよ？

閑話休題。

商業は……絶望的ではないにしろ、難航しています。

やっぱり、亜人との共存や現代地球の技術を僅かばかり取り入れて発展している……少し変わった領地ですからね。ロマリアとかが圧力をかけて来ていて、我が領地の生産品を買い渋るんです。

買い渋るという言い方なのは、私が公爵家の人間で、王宮からも『こちらに対して不干渉』と言うお達しがあるからです。もし、コレがただの中流貴族や下級貴族だったならば、表立って不買運動やら、営業妨害があつたでしょう。今のところは、ハルケギニア全域でフォンティーヌ製の製品の売れ行きは良くないと言ったところです。

その代わりにですが、ゲルマニアを中心に近年活動を開始したアナハイムにクルスガワ、ヴィクターにグロリオサ et cetera……と言った商会を経由した“無印”製品の売れ行きが伸びています。名前を見て分かるように、ゲルマニアの転生者達が立ち上げた様です。しかも、そろいもそろって『揺り籠からお墓まで』や『拳銃から戦艦まで』などと謳い文句で言われた企業ばかり。験を担いでいるのか、手にしたチート能力がそうさせているのか……。

まあ、彼らの協力で一から裏ルートの製作を行わなくてすんだのは嬉しい事です。

「え」と、この書類も……問題なし。

……。

……。

ふふ、終わった」

最後の書類に判とサインを押してひと段落。両手を広げて盛大に机に突っ伏します。

「フッフ、お疲れ様ですお嬢様」

あゝもう、笑わないでくださいよクランさん。私は、デスクワークよりも外で暴れたり機械製品を作ったりするのが性に合ってる

んですよ？

あ、お茶ありがとうございます。

ふ……。

ああ、明日は何をしましょうか……新しい筈の開発？ それとも、前から構想を練っていた戦艦の建造？ いやいや、獰猛な竜種が巣くう火竜山脈にピクニック（ハンティング）も棄てがたいですね。

「……そうだ、アルビオンの件もさっさと解決しましょう」  
危ない危ない、思わず忘れるところでした。

任務の難易度的に考えて克蘭さんだけで問題無し。モード公がサウスゴード家に忍び込むなりして、親書とロザリオを渡すと言うだけです。標準でステルス迷彩を装備している克蘭さんには他愛無い事でしょう。

「……と言うわけで」

「何がどういうわけなんですか？」

突っ込まない突っ込まない。

「克蘭さんには、近日中にアルビオンに極秘で出張してもらいます。」

あ、お茶のお代わりください」

「はいどうぞ。」

それにしても、急な話ですねルーティアお嬢様？

まだ、先日にかリアのセントマルガリータ修道院に出向いたばかりだと言うのに……」

うー、私が怠けていたつけなんです。もうちょっと早く彼女達に接触していれば、こんな苦勞を克蘭さんにさせなくて良かったんです。

まあ、悔やんでも始まりません。時間もないので分担作業です！  
「詳しく説明しますとですね………」

「……………」と、言う訳でお願いします」

「ハア……。分かりましたお嬢様。

でも、もうちょっと早く教えてくれても良かったともいますよ?」  
アハハ、ごめんなさい。

でも、これで私はガリアの問題に専念できます。領地経営は、アストレアさん……は学園に行っていてムリそうなのでエレオノール姉様が偏在に代役を任せましょう。

私は、金庫からこの時のために予め作っておいた親書とロザリオ、それからティファニアさん達を庇うためのカバーストリーを書いた書類の束をクランさんに……。そこで私は手を止めました。

「書類は、また後ですね」

「ええ……。まったく、無粋な侵入者達です」

蒼い宇宙眼が、チリチリと疼く。

クランさんも直ぐにハマノツルギを構えた。

## 楽しく転生26（後書き）

祝、70万PV & 10万ユニーク突破ー！！

前書きに“闇鍋”と書きつつ、カオスじゃない事に orz

今回は、投稿するまで時間がかかった割りには、セントマルガリータ修道院からフォンテーヌに帰った後、どの様に領地が発展したかの経過報告でした。

このSSのオリ主ことルーティアは、伝統を重んじるトリステイン王国の公爵家の一員です。なので、他のSSである様に内政チートによる富国強兵や、国を挙げての平民の教育等がある程度しか出来ないと言う枷を背負ってもっています。

これが、ゲルマニア帝国やクルデンホルク大公国ならまだ幾分か自由度があったんですが。

いまさら気づいて事なんですけど、ルーティアがあんまり外国に出て行っていないと言う事態が発覚（いまさら何言ってるの？

ティファニアとか、イザベラ、タバサ（シャルロット）とかと一切の接点を作っていませんでした。（マズイですね。

閑話とかを入れて、無理矢理接点を作るのもなんですし……このまま逝っちゃいましょう。

ティファニアさん達には、足長おじさん風で支援すれば良し。

ツンツンでギスギスなイザベラさんと、オドオドなシャルロットさんとの関係も……まあ、これから干渉すればなんとか（ならんならん。

## 楽しく転生27（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

スランプ気味で、文章にグダグダ感が…… orz

## 楽しく転生27

A n o t h e r   s i d e

\*

転生つて本当にあるんだなーって思った事があった。

それで、転生した先が生前結構好きだった『ゼロの使い魔』って小説の世界だったから、その時は神様つて本当にいるんだなーって思ったりもした。

それで、チート能力をもらって無双……出来ると思ったんだ。

手にしたチートは…… A M S 適性、デバイス・マスター技能、N T 能力だ Z E。

……とにかく言おう、剣と魔法の世界でこんな能力役に立つかー！！

A C ネクストねーよ！

科学力が中世ヨーロッパなんだよ！

サイコミュ兵器もねーんだよ！

せめて用意してくおいてれよ、コジマでリリカルでガンダムな口ポットをよー！！

ハアハアハア……ぜってー能力と世界が噛み合っていない。そう思つて『世界に絶望した！』と、夕日に向かって叫んだ事もあった。唯一の救いは、オレがメイジだったってくらいだな。

ゼロ魔系の S S も読んだ事があるし、その登場人物みたくチート魔法が使えたらって思った事が何度もあった。だからよ、欲を言わせてもらえるなら火のメイジじゃなくて土とか風のメイジがよかったぜ。それで、ドットじゃなくてスクウェアメイジくらいの実力

が最初っから欲しかったZ.E。

とにかく使えないモノのオンパレードだった。

いや、これ位はまだ序の口だな。

神様、オレに恨みでもあるんですか？

転生した先がロマリアってどういう事なの！？

他の国と比べて死亡フラグ満載じゃないけど、宗教なんてそんなにめり込めないってば！ 毎朝教会に参拝する気もねーの！！

でも、しないと親にシコタマ怒られるけどね……。

そんで……。

ソンデ……。

そんで右翼曲折あつて、今はトリスティンの異端共を裁きに來たんだ。オレは、その尖兵つてヤツだ。

アレ、ナンデコウナツタ？ ナニカサレタキガスルガ……マア、イイカ。

んで、NT能力のずば抜けた勘と、デバイス・マスター技能を応用した破壊工作がオレの仕事つてなわけだ。

「悪いな、これも戦争なんだ」

さうで、仕掛けは万全。あとは後続の騎士様方に任せると……ッ！？

カカカカ！！

オレは、咄嗟にその場から飛び退り杖を構えた。そして、今までオレがいた場所には無数のナイフが付き刺さっていた。

あ、アブねー！ NT能力がなかったらやられていた……じゃなくって！

「ちい……！」

再度投げつけられた八方から投げられるナイフを避け、オレはその場から逃走する。敵の姿が見えない。だが、少なくとも一人じゃない……複数のはずだ。なのに、敵の姿がまったく見えないってなんだよ！？

「仕方ない。計画までまだ時間があるが……」



まあ、あいつらなら臨機応変にやってくれるだろう。今は、オレが生き延びるのが先だ。

オレは、懷から5と番号が振られた小さいハコを取り出すと、そこに付いているボタンを押した。

ポチっとな……………あれ？

もう一度押すが、何も起こらない。

ポチポチポチポチ……………。

他の発火装置のボタンも押して見るが、何も起こらない。

度畜生！　なんで爆発しないんだよ！　遠隔発火装置のマジックアイテムは、ちゃんと設置したはずだぞ！？

「お困りのようですがどうかされましたか？」

いやー、さっき仕掛けた発火装置が機能しなくてさー。

「発火装置……………と言いますとこれでしょうか？」

ガシャガシャガシャ……………。

そうそうソレ……………って、なんでソレがそこにあるの！？　てか、

アンタは！？

「申し送れました。私は、しがないメイドさんです」

ウホ、いいメイド……………じゃなくって！

「ファイアーボール！」

惜しいが、見られたからには消させてもらう！　どうせ、オレを追っている奴らの一人だし騎士団が襲撃すれば……………、

パリーン！

って、えええ！？　オ、オレの放った渾身のファイアーボールは、まるでガラスを割る様な音と共に砕け散ってしまった。

そして今更に成って気づいた事だが、本当に今更だが、メイドさんはやたらと大きなハリセンを持っていたんだ。

おいおい、魔法が消えただ？

ん……………ハリセン？

そんな、まさか！！？

「あ、あっちゃいけない。」

そんな物、あっちゃいけないんだアアアアアアア！！！！」

オレは、唱えられる限りのファイアーボールをメイドさんに向かって放った。だが、

パリーン！ パリーン！ パリーン！

メイドさんが振るうハリセンの前に、全て消されていく。

「あ、あ、あ……」

か、勝てない。こんなチートにオレは勝てない！

「チェックメイトです」

へ？ ……ええええええ！！！！

前後左右、四方八方を埋め尽くすようにして、どこかで見たような無数の少女型害虫駆除ロボットがオレを囲んで……、

ジャキヤ！！

投げナイフに刀剣、ガンダムなハンマーの他にさまざまな銃火器の照準をオレに向けていた。

「世界（作者）の悪意が見え……」

「全機攻撃開始！」

ガガガガ……！！！！

メイドさんの掛け声と共に、オレはズタズタにされていく。せめてこのセリフだけは言わせてく、ガク……。

「ふう……市街地に侵入した全工作兵の排除、完了しましたお嬢様」

『お疲れ様です克蘭さん。』

ところで、その工作兵ですが……」

「ご安心を。多少抵抗されましたが、指示道理に暴徒鎮圧用の非殺弾で制圧しました」

『そうですか、お疲れ様です。』

それじゃ、メインディッシュが運ばれてくるのを待ちましょう克蘭さん』

「はい、ルーティアお嬢様」

\*

ガチャコン……。

私は受話器を置き、執務室の机に両肘を付くと、口元を隠すように手を組んで細く笑った。もちろん、小さめで丸い色眼鏡も忘れちゃいけません。

そして室内には私以外誰もいない。いや、正確には人間は私しかいません。なのでコレに突っ込んでくれる人は誰もいません……グス。

閑話休題。

部屋の中は、今まであった応接セットや調度品等のあった場所がひっくり返って、別のモノ　　ながらSF系の司令室セットへと入れ替えられている。証明も落とされていて、その雰囲気をも十分に醸し出せているでしょう。

ナビゲーションシートには、人間の代わりに簡易人工精霊『試作型ツクモガミ?型』を搭載したアルヴィーさん達が席についています。

「つまり、可愛いプチネウスやプチデイジー、それとナビコなんかがせっせっせと監視カメラの画像を見張っていたり各部署に指示をだすのです!」

「ダレニ、イッテンダ、ダレニ」

ああ、ありがとうプチーズさん達。今突っ込んでくれるのはあなた達だけです。

……さてと、私はメインモニターに市街地外に潜伏している賊の

画像　動画ではなく、初期のカメラ技術と魔法の錬金を組み合わせ、  
せて実現したカラー写真をメインスクリーンに写すように命令する。  
一拍置いて、部屋の中央に設置されているスクリーンに一枚の写  
真が映写された。

深夜、蒼い街灯が照らすフォンティーヌの街路を顔までスッポリ  
と覆い隠した黒装束の集団が身を低くして走っていく姿だ。しかし  
だ……服の所々に金や銀色な装飾品の他、デッカクて派手な飾りま  
で付いていたりするので、

『テメーら、本気で忍気あるのか！？』

と、不覚に突っ込んでしまいました　もちろん心の中ですよ？  
それにしても、ココまで自分たちが怪しい者ですと体现してくれ  
る侵入者は珍しいですね。一歩間違えば、仮装行列とも言いつく  
きそうなの連中です。彼らのアイデンティティーとかいうヤツで  
しょうか？

「まあ、あからさまに身分の分かる様な格好の侵入者なんて……」

「アチャらしい、しゃしん、です」

たどたどしい声で回されて来る新しい写真には……、

「は？」

曇り一つない真っ白な鎧　金銀で甘美に装飾され、ロマリア宗  
教庁を表す紋章を隠す事無く堂々と歩いてくる聖騎士達が写って  
いました。襲撃しに来たんでしょ？　そんなに正々堂々と歩くなこ  
おバカ共！！

「……バカですね。正真正銘のバカばかりです」

はあ……。まあ、彼らが超の付くおバカだと言う印象は持てたと  
して……防衛ラインまであとどれ位？

「……市街地の南側から進行して来る集団が一番早く、あと100  
メートルと言ったところ。次に近いのは、西側から進行して来るおバ  
カ共で、あと500メートルほ……」

「キチャがわ、ミかいチャク、エリアから、そくハウです」

三つ目ですか、画像は？

少し間を置いて、モニターに北側からの集団が映し出された。うん、こつちもバカだ。白い騎士甲冑を着込んだ聖騎士達に、

「竜……ですか」

騎乗用の火竜が……30匹位かな？ 騎士達は、彼らからせつせと蔵等を外す作業をしています。……大方、野生の火竜に見える様に偽装しているのでしょう。

うーん。大体、彼らの大筋は大体読みました。

盗賊に扮した聖騎士と野生の火竜の群れがフオンティーヌの街を襲い、たまたま通りがかった聖騎士達がそれを阻止しながら街を破壊する……おバカ共が変装もせずに堂々とやって来るのもコレで肯けます。

「さて、そろそろ最初のグループが防衛ラインに接触する頃ですね？」

「きより、やく20マイル」

うむ。襲撃者の皆さん、紙袋の準備は万全ですか？ 今までの性癖とサヨナラは済ませましたか？ 臭い飯を食う心の準備は出来ましたか？

「……では、第一次使徒防衛線を開始します」

そう言つて、私は椅子から立ち上がり両手を大きく広げ、

「諸君、派手に行こう！」

舞台の幕を上げた。

……今度は、だれも私に突っ込んでくれません。うー、クランさん速く帰って来てくださいよ！。

\*

A n o t h e r   s i d e

異端に裁きを！

神の御技たる魔法を平民に広げし異端者に裁きを！

我らが偉大なる始祖ブリミルの教えを信じぬ亜人共、そんな奴らと共存を行うかの者達に神の鉄槌を！

悪魔の業でもある先住魔法を広めんとするかの者達に裁きの鉄槌を！

……部下たちの士気はすこぶる高いようだ。

だがしかし、ああ忌々しい！　なぜ、神聖なるロマリア聖騎士団がこそ泥の様な真似をしなければならぬのだ？

「なぜ、宗教庁は異端審問の許可を出してくれないのだ？」

部下の素朴な疑問も分かる。相手は異端者だ。偉大なる始祖ブリミルに祝福されし我々に、正面からはむかうヤツなど決していない！　なのになぜ、この様なこそ泥の様な真似をせねばならぬのだ？

……いや、理由は分かっている。

トリステイン王国で、事実上宰相を兼任しているマザリー二枢機卿とトリステイン王家が、神聖なる我らがロマリアに圧力をかけて来ているのだ。外交的配慮とか言うフザケタ理由で、表立って聖騎士団を動かせないとは……。

「アー忌々しい……！」

ハアハアハア……しかも、厄介な理由はそれだけじゃないと来ている。

昨今、我らが神の国であるロマリアで、ジェイル・スカリエツェイなどと名乗る異端のメイジが暴れ回っているのだ。

しかも、そいつの行動に感化された一部のゴミ……民衆が暴徒化し、教会が襲撃されるなどと言う前代未聞の事態も発生してしまった。本当に前代未聞だ……！！

しかも、そんな時にヤツは突然現れ、ゴミム……民衆を唆したのだ。そして、我らは教会に収められた神への供物を奪われ、聖騎士団員にも重傷者や死傷者を出すと言う深い痛手を負わされたのだ。

おかげで、神聖なる任務を全うするはずの我らの力を、あんなゴミム……ああ、もうゴミムシでかまわん！ 異端共の掃除に使わねばならなくなったのだ。忌々しい事この上ない！！ あのようなモノなど万死に値する……！！

「……しかし、コレだけの聖騎士と竜を確保できた事は行幸だ。

おお始祖ブリミルよ！ 私は、必ずこのトリステインにはびこる異端者に裁きを与えようぞ……！！」

ああ、神よ！ 我らにこれだけの軍勢を与えてくれてありがとう  
ごさいます……ん？

「………妙に周りが赤いな？」

先行した部下共が、街に火を放ったのだろうか？ いや、だとし  
てもこんな風に赤くは……、

「た、隊長！ つ、月が！」

「ん？ 月がどうしたと………な！？」

見上げた夜空には……おぞましいほど真紅色に染まった巨大な月  
が浮かんでいた。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

「南部方面、第一次防衛ラインにて侵入者達をホイホイさん部隊に  
より迎撃。

侵入者達は、第二次防衛ラインである迷宮エリアへと逃亡したよ  
うです」

「うむ、問題ない」

「……何をやっているんですかルーティアお嬢様？」

あゝ、クランさんの突っ込みに癒される。出来れば、もつとア  
グレッシブでスプラッタな感じに突っ込んで……。

#### 閑話休題

それはさておき、逃げちゃったんですか？ ホイホイさんでや  
られていれば、彼らはとても幸運だったでしょうに。

「あの迷宮には、金ダライや昆布雨に納豆の落とし穴等々……色々  
と精神力が削られるトラップを仕掛けておいています。走破する頃  
にはグロッキー状態ですね」

いや、実際に試していなかったので彼らにはいいサンプルにな  
ってもらいましょう。あ、そうです。念のために真ライフサイズホ  
イホイさんも配備しておきましょう。

「はあ……。北部方面での襲撃者、依然として火竜襲撃の準備を実  
行中。」

西部方面の侵入者達は現在、第一次防衛ラインに向かって進行中。  
どうされますかルーティアお嬢様？」

「……もちろん、エヴァを出しますよ？」

そのためのエヴァですから」

「あの……考え直してくれませんか？」

あれは、生理的にちよつと……」

顔を真っ青にして、使用の中止を訴えてくるクランさん。まあ、  
気持ちは分からなくはないですが……、

「モット伯での事程度でグロッキーだと、これから始める祭りには耐  
え切れそうにありませんね」

「あ、あれ以上の事をやるつもりなんですかルーちゃん!？」

何を言っているのですか？ もちのろんですよ??

クランさんは、顔を更に真っ青にして椅子に座ってしまう。気分  
が優れないようでしたら退室しても大丈夫ですよ？

「……いえ、お嬢様が暴走しないように見張っておかないといけま  
せんから」

アハハ……。



「ではクランさん、腹を括ってくださいね？」

「チャイしょう、ダイイチぼうえいラインにセツチヨク、します」

「ククク！」

では……エヴァンゲリスト初号機、発進！！」

「えヴァンゲリストしょ、ゴウキ、シャしゅつ」

さあ、あなたたちはどんな声で悲鳴を上げますか？

## 楽しく転生27（後書き）

こういう書き物系で一番困るのは、敵さんの心情と云うか描写だと思います。

前回の投稿から……早半月かな？ 神様万歳なロマリアの騎士さんや、オリ主の領地攻撃の作戦プラントか、描写の仕方で悩んでいたらこんなに成ってしまった。

一人称だとそう言うのが結構辛いですね。作者が主人公を大いに盛り上げようとしていると、どうしても相手の事がおろそかに成ってしまつて上手く書けないという……。

とりあえず、最初の撃退者はロマリアに転生した哀れなモブその一でした。

手にした力が、世界とミスマッチなかわいそうな男ですね。ロマリア転生物は、今まであまり見たことがないので噛ませ役として出しましたが……。

ロマリア転生だと、大抵は『ナニカサレタヨウダ……』と言う傀儡ルートか、『奴らに復讐してやる！』と言う異端審問生存ルートでしょうか？ あ、水都市のアクレイアでゴンドリアーノをやるというルートも（火星でやつてろ。

せつかくの防衛戦なので、新世紀な感じで装って見ました。ただし、職員は全員アルヴィーと言う悲惨な状況。

ツクモガミは、まかでみいから採用。翼人さんなど精霊魔法が使える人達と一緒に開発した人工の精霊です。ちなみに翼人たちの印象は「ちよつと大きい“大いなる意思”の塊」程度の認識です。

さて、では次回をお楽しみください。

## 楽しく転生28（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生28

\*

Another side

状況がまったくつかめん。

辺りは何故か赤く染まっている。

空には何故か不気味な紅い月が昇っている。

先行した部隊は、とつくの昔に市街地を攻撃しているはずなのだが……遠見の魔法で確認してみても一向に火の手の一つも上がらない。試しに北側で待機している火竜部隊に出撃の合図を出してみたが、そちらからも返事が返ってこない……。

……ふん、まあいい。

「我々は当初の予定道理に進攻を行う。」

市街地に到着して、先行した部隊が破壊活動を行っていた場合にはそれに援護を行いつつ戦闘を行う！

もし先行部隊による破壊が見られなかった場合には、我々のみで異端共に神の鉄槌を下す！

火竜部隊の進攻が確認されたら、一旦市街地外に退避して火竜たちが街を破壊しつくすまで待機。その後、生き残った異端共の排除を行う！

では、全軍進め！！」

私は号令を飛ばすと、部下たちと共に異端者たちの住む街へと進軍した。

「……なんだアレは？」

そして、丁度我々が市街地の入り口に差し掛かったところでそれ

を見つけた。地面に不自然な……扉か？　おそらく鉄で出来た扉の様な物が取り付けられている。

「おい、アレがなんだか分かるか？」

「は！　おそらく扉だと思われます！」

「そんな事は判っている！　なぜあんな道のと真ん中にあの様な……く！？」

ガシユウン！！

凄まじい音と共に、地面の扉から煙幕が上がった。

そして、その扉だった場所には骨組みだけの箱に納められたまったくと言っていいほど特徴のないゴーレムが固定されていた。

なんだアレは？

「全軍防衛体制！　警戒しろ！！」

私は、咄嗟に部下たちに指示を飛ばすと、自身も杖を抜いてこのゴーレムを警戒する。この領地は、砂漠の悪魔達とも手を結んでいると言う噂もある。警戒するに越した事はない。そう私が思っていると……、

ガコン！！

ゴーレムが箱から出ると、凄まじい衝撃と共にヤツから光が放たれた。

「な！？」

「ラーヴウ、ア〜ンドウ、ピース！！！！」

そして無面のゴーレムは、一瞬にしてそのひ弱な姿をなんともおぞましい姿に　握ったら折れてしまいそんな細い姿から、全身を強靱でコレでもかって言う位に強調された筋肉の鎧姿に変わった。それが着飾るのは重厚な鉄の鎧ではなく、あまりにも薄く肌に密着し殆ど何も隠す事無くアレの筋肉美を伝えようとするモノに変わった。

「愛、知っているかしら？」

そして今まで煙に隠れていた顔が姿を現した。線が細く艶やかな眼にツヤののった紫のルージュで装飾された唇、ゴテゴテとした概

観に角刈りの頭髮に綺麗に整えられた髭と言う滅茶苦茶な組み合わせの顔だ。いや、もつとおぞましいのは、このゴーレム全体が瑞々しいと言う事だ！ ま、まるで生きているようではないか！！

「ギヤアアアアア！！！」

部下たちが悲鳴を上げる。

な、何だコレは！？ なんとおぞましい！！ 神への冒瀆……いや、そんな表現では生ぬるい！！

「こ、攻撃！ 攻撃だ！！」

何をやっている！ この神を冒瀆しているとしか言えん化け物を、このハルケギニアから塵すら残さず消し飛ばすのだ！！！」

「ハ！！！」

それから、火球に風の刃、石の弾丸に水の刃……とにかく知っているだけの攻撃魔法をありったけヤツにぶち込んでやった。だが、

「アーン、シ・ゲ・キ・テ・キイ！！」

我輩、こんなにも積極的な挨拶に感動したわ

「あ、アレだけの魔法が効いていないだ！？ そんなバカな！！！」

「う、ウオオオ！！！」

何人かの騎士達がブレイドを唱え、あの化け物に果敢にも切りかかっていく。そうだ、遠距離がダメでも白兵戦な、ら！？

「ドリヤー！！！」

「あゝん」

や、止める！ そんなおぞましいポーズで神聖な杖を受けるな！！

「ウリヤー！！」

「アハーン！！」

や、止める！ そんなおぞましい場所で神聖な杖を受けるな！！

「これで、どうだああ！！！」

「アー！！！！！」

……なんて、なんて激しいのかしら。我輩、感激ー！！！」  
ギユム！

化け物は奇声を上げ、切りかかっていた騎士達を捕縛する。  
な、何をする気だ!?

「汝に……」

「い、いかん! ヤツを攻撃しろ!」

「ダメです! 今攻撃したらジョニー達が!」

「止める、止めてくれ! アアアアアアアア!……!」

「幸、アレ」

ブチュ……!!

濃厚なベーズと呼ぶべきか、ジョニーはあの化け物に唇を奪われた。最初はじたばたと暴れていたが、次第に手足から力が抜けたようにダラリとなり……たまに痙攣したようにビクビクと動いている。  
ジュッポン!……!

そして、おそらく舌であろう。それをジョニーの口から引き抜いた。……あの長さなら、喉の奥まで届いていそうだな。

「次はこつちね!」

「か、かーさん助け!! イ、イヤダー!……!」

ブチュ……!! ジュポン!……!

「汝に、幸アレ」

ドサドサドサ!……!

その言葉と共に、真っ白になってしまった騎士達が投げ落とされていく。

「うゝん、次はアナタ達ね?」

そして、あの化け物は次の獲物を私たちに定めた。

カッンカッン、

「ひい!……!」

「ひ、ひるむな! 神聖なるブリミルに使えし聖騎士たる者が、あのような化け物にひるむなどあつてはならん!」

そう言っただけ魔法を放つが、まったく効果が見られない。そうこうするうちに、ヤツはおぞましいポーズをとりながら一歩一歩確実にこちらに歩いて……歩いて? なぜヤツは歩いてくるのだ?

走れば、もつと速く間合いを詰められるというのに……そうか！  
あれは元はゴーレムだ。あのおぞましい姿を維持するのに、よほど精神力を使っているのだろう。ならば、

「各員よく聞け！」

あの化け物……いや、ゴーレムはおそらく走る事ができん！ 左右から回り込み、市街地へと進攻する！

そして、あのおぞましいゴーレムを操っているメイジを発見したい、即異端審問を開始せよ！」

「りよ、了解！！」

「あゝん、まつてゝ！！」

誰が待つか！ あのおぞましいゴーレムを作りし異端め！ 聖なる炎でもがき苦しむがいい！！

\*

ハアハアハア！

オレ達は今、必死にあの化け物を振り切って異端者の住む街へと向かった……はずなんだ。

「なんなんだよ、これ……」

さっきまで何もない道だけだったはずだ。だけど、いつの間にか回りは壁、壁、壁！ コレじゃまるで迷路じゃないか！！

「他の仲間ともはぐれてしまったし……どうす、る？」

「シャアアアア……」。

「なんだこの音は？」

そう思っ、今しがた降りてきた階段の方を見ると、

「ラゝヴ、アンドウ、ピース！！」

「ギアアア！！！！」

あ、あの化け物が、小さな荷車の様な物に乗って階段から飛び降



りてきたのだ。

オレは逃げた。それを見て、一目散に逃げた！ いやだ、あんなのとキスしたくない！！

「あゝん、まってゝ」

誰が待つか！！

あの荷車みたいなのは、どうやって走っていてるか分からんが、真っ直ぐにしか進めない様に見えた。だからオレは必死に走り、やっと見つけた脇道へと逃げ込んだ。

「コ、コレで……」

キキイイ！！

凄まじい音と煙を上げながら、あの化け物は直角ターンを決めてくれたのだ。

「何で曲がれるんだよ！！」

「愛の力よ」

ワケわかんねーよ！！

とにかく逃げるしかない、そう思って真っ直ぐで長い道を全力で走っていくと、

ガシユン！！

いきなり地面から壁がせり上がり、通路を塞いでしまった。

オレは、壁とぶつかる寸前で止まり、壁を拳で叩き……ヤツもまた壁に両手をめり込ませながらオレを捕縛した。

「さ、ツ・カ・マ・エ・タ」

「ま、マジかよ！ 夢なら覚めて……アアアアアア！！」

「なあ」

「どうした？」

「この任務が終わってロマリアに帰ったら、オレ、司祭様にもっと給料を上げてくれと上申しよと思うんだ」

「ハハハ、ソレいいな！ こんな恐ろしい任務でもらえる報酬が6

000エキューぼつちのはした金じゃ、ぜんぜん釣り合わない……」

「やめろお前ら、それはフラ……」

ズガンー！！

「……ヒイ！！？」

「うゝん、汝らに幸あれ」

ブチュ〜！！

「ギヤアアアアアアアア！！！！！！」

「すまん！ オレは逃げる！ オレは逃げるぞー！！」

……また、やられたか。

この迷路のような場所に入ってから、塵じりになった同志達の悲鳴が絶えない。部下達も、その声を聞くたびに身を竦み上がらせて辺りを警戒する。

「安心しろ、声は遠い……」

それよりもトラップに注意しろ！」

「うう、マイク、マイクウウー！！」

「泣くな！！」

先程、左右の壁に押しつぶされて一足早くヴァルハラへと旅たった同志を悔やむ部下を叱咤し、私は先を急いだ。

「……ここは？」

やっと迷路を抜けたのか？ 壁が途切れて、何も無い場所に出ってしまった。遠くの方に何か見えるが……アレは街か？

「……よし、もう直ぐだ！ 全員気合を入れろ！」

フッフ、数は減ったが十数名にも及ぶ聖騎士が到達できたのだ。

奴らに引導を……ん？ 何だアレは？ ……まさか！？

「……おいおい嘘だろ！？ 嘘だといってくれ！！」

そう叫んだ部下の気持ちも分かる。目の前の地面を埋め尽くすように、あの化け物が出て来た扉が敷き詰められているのだ。

「こ、こんなのこけおどしだ！ 沢山しかけりやいってもんじゃ

「……………」

誰かがそう言った次の瞬間、

ガシュシュシュシュ………！！！！

あの化け物共が、地面から次々と……あれ？

「ほ、本当にこけおどしかよ！」

出てくるのは空箱だけだった。

「さ、さあ、気を取り直して………」

「た、隊長！ う、上！ ウエエエ！！」

「なんだ騒々し、あ……………」

あの化け物が、空を埋め尽くさんばかりに飛んで来ているのだ。

「はは、アハハハ！！！！」

「おいおい、一体何体いるんだよ！？」

「向こう側が見えない……………」

「や、止める！ 来るなああああ！！」

「…………ラヴ・テンプレーション…………」

「…………アアアアアアア！！！！…………」

そして、私たちは肉に埋もれた。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

「ロアリアの使徒は、量産型エヴァンゲリストに食われましたか」  
「その、様です、ルーティアお嬢様……もうダメ。失礼します」  
ボタン！

クランさんは、トイレでナイスボートのようですね。とりあえず、  
出撃させたハプシエル達はそのまま第二防衛ラインに残存する聖騎

士達の鎮圧に向かわせましょう。というか、いい加減疲れてきました。

「さて、残るは火竜さん達にその騎乗者達ですか……」

飛び立った火竜たちは、すでに月匣の中に捕らえてあるので問題なし。ですが、薬品でも投与されたのか異常なまでに気性が荒いようですし……、

「ちじょうタイキちゅうのブタイ、こんばつとさんブタイによりゲキタイ。

カリユウいがいノぜんタイショウ、カンゼンにちんもく」

「そう、分かりました」

うん、クランさんもないことですし、せつかく残しておいた火竜……30匹ですか？ 腕が鳴りますね。

「では、狩の時間です！」

そう言つて、意気揚々と部屋を出ようドアを開けると、

「……お嬢様、自重してください、な！？」

ボウン！

私は、小さく爆発と共に消えちゃいます。

「偏……在？ お嬢様ー！！！」

あとには、クランさんの悲痛な叫び声が響いたそうな……。

ごめんなさいクランさん。私は、すでに執務室ではなく秘密の格納庫で準備をしています。そう、こんな事もあるうかとと建造していた 半ば趣味の暴走で作った新兵器をお披露目できるまたとなにチャンスです。

「せつかく火竜が30匹もいるんですよ？ 狩らないわけにはいきませんよね」

それに、作った兵器が対人戦で使えないって言うのがあるんです。分厚い殻と鱗に守られ、生命力の高い火竜相手なら実験にはもってこいです。

「全火器への弾薬……セツト完了っ」と

よしよし。私は、薄いなめし皮を使って特注した白いウェットスーツの様なモノを装着しながら、兵器の起動シーケンスを進ませる。そして座席に私の身体をベルトで固定すると、機体各部に設置した結界炉を起動させた。

真紅に塗装された機体を中心に凄まじい量の風が噴出し始める。

ああ、これで緑とか赤色の謎の粒子とかが出てくれればもつと良いんですが……でないのは仕方ありません。

「では……。メタル・ウル……じゃなくって、アークビートル・カオス発し……。え、違う？」

あゝもう、言えはいいでしょ！……って、誰に言ってるのかしら？

まあいいです。私はグリップを強く握ると、カタパルトで加速しながら格納庫の扉をぶち破って外に飛び出し、

「レッツパーティイイイ！！！」

なぜかこうすると、世界が言っていた気がしたので叫んだ。

\*

A n o t h e r   s i d e

別段普段の扱いが不満じゃなかった。

オレ達の乗り手は……。まあ、色々アレな連中だが悪い奴らじゃない。上手い飯ももらえるし、他の奴らから巢を襲われることもない。縄張りをもてなかったり、好きに飛び回れないのが若干窮屈だが……。今回みたいに自由に飛んでもいいといわれる事もある。

今日は好きなだけ飛んで、好きなだけ食べて、好きなだけ壊して

良いんだよね？

相棒は、オレの質問に『合図が出るまで好きなだけやれ』と言ってくれた。

そして、気分の良くなる水を飲んでから意気揚々と飛んだまではいいんだが……一向に目的地に着かない。

いい加減イライラしてきたら、アイツが現れた。  
ゾク！！

よくは分からないが、それは蛇だ。決して逆らってはいけない蛇だ。……なぜだ？ なぜ蛇程度に、火竜たるオレが屈服しなければならぬ？ たかが蛇程度になぜ服従せねばならぬの……って！？  
「ギヤアアアアアア！！」

\*

なんなんでしょうね、目の前で繰り広げられるこの光景は……。

私の心配も何のその、30匹もの火竜に単機で出撃してしまったルーティアお嬢様を止めようと戦場まで来たのですが……。あ、別にルーちゃんが30匹くらいの火竜に遅れを取るとか考えてはいません。でも、あんまり奇行と言うかハツチャケタ事をして欲しくないんです。ほら、奥様とか色々つぶつ飛んでいますし……可愛いルーちゃんがああ腹黒口リバ……イエイエナンデモナイヨ？ ただ私は、ルーちゃんがレベルとかが下がるお茶とかお茶とかお茶とかを平然と飲ませるような鬼畜女の様には成ってほしくないだけで……

（以下略。

っは！ そうでした。今、目の前では30匹の火竜とルーティアお嬢様の乗っている……筈なのかな？ とにかく真紅に塗られた機

体に乗り、戦闘機(?)形態と人型形態の両立なんて言うHENT AI的な変形機構を織り交せて、複雑な三次元機動を繰り返しながら火竜たちを翻弄しています。

「すごいですね。でも……開発計画にはあのような機体はなかったはずです」

なにより、あの機動ではパイロットにかかるGの負担が計り知れないでしょう。対Gスーツの開発も出来ていませんし、これも月衣のおかげでしょうか？

「だとしたら、開発計画に乗っていないのも肯けますね」

根本からして、一般人向けの開発ではありませんし……。

あらかた機動性のテストが終わったのか、今度は武器を構え……  
つて、えええ!!?」

突然両肩にあった筒が開いたかと思うと、そこから無数の銃火器が飛び出した。い、いや、ウィザードは普段から月衣にいろいろな武器をしまっているの、これ位で一々驚いてちやダメですね。……でも、何も知らない人が見たら画期的な武器収納ケースに見えるんでしょう。ナイスアイデアですお嬢様！

……つて、さっきまで褒めていたんですけど、正直言つてやりすぎですお嬢様!! 大口径の二丁拳銃に始まり、ショットガンのダブルトリガー、グレネード弾をばら撒くガトリング砲に超長距離用対物スナイパーライフル、仕舞いには無数のマイクロミサイルを吐き出す筒などと言う……あまりにも、あまりにも火竜たちがかわいそうになつて来る様な銃火器のオンパレードです。

……いえ、それだけではありませんでした。

「プロミネンス、ファイエル!!!」

ゴウ！

立派な二本の角から紫電に輝く奔流が放たれ、それに巻き込まれた火竜は跡形もなく蒸発していきました。魔法で再現した荷電粒子砲ですかお嬢様……。

そして、焼き尽くされる世界。

私は、この後お嬢様にどういうお仕置きをしたら良いのかと思案を巡らせる事で、目の前に広がる現実と言う名の破壊から目を背けるのだった。

\*

あれ？ 何でオレ意識があるんだ？ 確か壁に押しつぶされてヴアルハラに召されたはずじゃ……そうか、ここがヴアルハラなのか。  
「マイク！ マイクー！ 生きてたのかー！！」  
その声は……って、何でキサマ素っ裸なんだよ！  
って、オレもか！？ 他の奴らもいるが皆素っ裸だし……ん？  
「や、止めるー！！」  
何故唇を近づけてくる！？ 止める、止めてくれ！  
ガシ！  
「シ・ゲ・キ・テ・キにやろうZE！」  
た、隊長！？ どうしてそんなモノをつて、  
「パイルバンカアアアアアアア！！！！！！」

そして、黒い薔薇が咲き乱れた。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*



「あゝ、ところでルーティア」

「なんでしょうお父様？」

「最近、王都周辺でロマリアの聖騎士などと名乗る気の狂った全裸の集団が捕まったらしいのだが……ルーティアは何か心当たりはな  
いか？」

「？ そんな面白い方達がいたの……」

「あ、ああ、関係ないならいいんだルーティア。今言った事は直ぐ  
に忘れなさい」

「？ そうですか……」

私はお父様にそう返すと、細く笑いながら踵を返した。

後日、その気の狂った ハプシエルによってハードな方に目覚  
めた全裸の集団は『聖騎士を語った不屈きな賊』とされ、ロマリア  
へと送還され処理されたとか……。

更に後日、

「……あの子の性教育に失敗したのかしら？」

「いえ、まだ間に合います。ですのでこの本を……」

「それだけじゃ足りないわ。もっと用意しないと……いえ、直々に  
手ほどきをした方が……ブツブツ」

クランさんとお母様が一枚の写真を肴に、真剣に相談をしていた  
とか……。

## 楽しく転生28（後書き）

や、やれるだけやったぜ……。

ロマリアの異端狩り攻撃、撃退完了。

ハプシエルは、ゴーレムフレームを素体にして幻像を投射するという形を取る事で、そう言う兵装がある様<sup>マジックアイテム</sup>に装いました。これは、七徳の宝玉から目をそらすと言う狙いです。

量産型は……、なんと言うか空から来るって言うイメージがあったので、沢山飛んでもらいました。そしてあの踊り（笑）。

オリ主、ルーティアの乗るネタ兵器（？）こと飛行外骨格型箒のアークビートル・カオス。

元ネタは、最近新作が出たメダロットからアークビートル・ダッシュ。そして、変態企業を次々と産出するフロムソフトウェアが生み出した最強のアメリカ大統領、メタルウルフ・カオスです。

いや、ニコニコでプレイ動画をみて笑いました。X箱ないからプレイできないけど……。

アークビートル・ダッシュの両肩の筒が、丁度メタルウルフの四次元格納庫に見えたので合体！ 多少手直しもしてロールアウトしました。ちなみに、ちゃんと変形して戦車形態にもなり、空だつて軽快に飛び周ります（無理矢理だけど）。

今月は、あんまり投稿できなかった or z  
それでは、待て次回！

## 楽しく転生29（前書き）

これは二次製作ゼロの使い魔SSです。UP者の独断と偏見、面白ければ良しと言う劇薬と原作キャラ崩壊をUP者の愛で煮た闇鍋です。

## 楽しく転生29

\*

Another side

カツカツカツとペンを走らせ、積み上げられた書類を仕上げていく。

「まったく、書類仕事は面倒ですね」  
などと思っていると、

ガチャ……。

「ルーティア、ちょっと今いいかし……って、なにかぶってるの？」  
あ、コレですか？ 演劇で黒子さんが顔を隠すために被る帽子の様な物です。それと、ルーティアは今不在です。

「なに言ってるのよ？ 今私の目の前に……遍在？」

私が肯くと、エレオノール姉様はディテクトマジックでその真偽を確かめ、ガックリとうなだれた。

いや、フィールドワークが多いから遍在を習ったまでは良かったんです。ですが、遍在はどれが本体か見分けは付かないし……。なので、執務室にいる偏在が直ぐに遍在だと分かる様に、黒子さんが顔を隠す帽子の様な物を着けさせる事にしたんです。

「まいったわね。本体との連絡は……」

「出来なくはありませんが……緊急事態ですか？」

「うーん、そんなんじゃないんだけど……。ほら、この前克蘭が持ってきた陸上走行型甲冑着てあったじゃない？ その試作品が出来て、その試験結果が出ただけ……」

ああ、アークビートル・カオスを見た克蘭さんが立ち上げた企

画ですね？ アレから飛行能力をと四次元格納庫を取り外して、代わりに武装を長距離砲と白兵戦用に刀剣を装備させた……いわば劣化版アークビートル・カオスですね。完成すれば、地上からの支援が期待できると思っていましたが、

「それで、どんな結果が出たんですか？」

「ええ、その事でちよつと意見が聞きたかったのよ。

ま、とりあえずコレを見てみて……」

そう言つてエレオノール姉様から渡された報告書に目を通していきます。

「……これは、笑つた方がいいのかな？」

「それは私も悩んだわ。でも、悩むのも面倒だから笑うことにしたわ」

それは一枚の写真。戦車形態のアーク・ダッシュが、その立派な角をを地面に突き刺して垂直に立っているという構図の写真です。

そんな写真が十数枚も報告書には入っていました。

「どうがんばっても、走行中の急停止やらなんかでつんのめってこくなるのよ。

……酷い時にはそのままひっくり返つて大惨事」

「うゝん、バランスの問題ですね。

そもそも、胴体がこの形状でなくてもいい訳ですし……」

あ、色々と問題発言？ でも、劣化版には荷電粒子砲 と言う名の雷撃砲を載せないで、角は完全に飾りですし……。

「あ、あと白兵戦装備もいらなないかも。

角が邪魔で剣が使えないって苦情も来てるわ」

まあ、元となったKBTタイプは射撃主体ですからね。

「分かりましたエレオノール姉様。後で本体に連絡して解決案を届けに行きますね？」

とりあえず、軸を射撃主体と格闘主体で別けてみる案をだしてみますか。

「分かつたわ。それじゃお願いね？」

さて、私も残りの仕事を……って、エレオノール姉様？

「ん？ あ、美味しく頂いてるわよ？」

エレオノール姉様は、プチーズさん達に入れてもらった紅茶とお菓子を頬張っています。と言うより、仕事大丈夫なんですか？

「大丈夫よ。」

ちゃーんと必要な作業は他の研究員に割り振ったし、私自身が直接やらなきゃいけない事はその報告をまとめる以外ないわよ」

そうですか、まあそれなら……。

ガチャ、

「あら、カトレアにルイズ？」

「ちいねえさまにルイズお姉様？」

「長期休暇だから帰ってきたんだけど……あら、ルーティアちゃんはお出かけ中？」

「そう、ここにいるのは遍在」

「そうなの？ ……クランもいないみたい。もう、ルー達ったらなんで肝心な時にいないのかしら……！」

あらあら、にぎやかに成りましたね。仕方ありません……、私はペンを置くと追加のコップとお茶請けを出して休憩する事にした。

\*

こちらメイドのクラン・ベル……誰に言っているんでしょう？

まあいいです。さて、私はルーティアお嬢様の使いで白の国アルビオンまで箒で飛んで来たのですが、

「すみません、シティー・オブ・サウスゴードはどう行けばいいでしょう？」

目的地までの道が分かりません。

「？ ああ、それならその街道を……」

「ありがとうございます。では」

ルーティアお嬢様、もうちょっと情報収集しましょうよ？ コレの届け先が『アルビオンのサウスゴード地方に住むハーフェルフのティファニア嬢』だけでは分かりませんよ？ 仕方ないので地図を片手に通りがかった人に道を聞きながら目的地であるモード公の屋敷へと向かいました。

そして某日、私はやっと見つけたモード公の屋敷に忍び込む事に成功したのです！

「……きつとルーティアお嬢様なら『こちらスネーク、進入に成功した』などと言っんでしょっか？」

うん、きつと言いますね。

タタタタ、

……時刻は日もまだ昇らぬ早朝、見回りのメイドをやり過ごした私はモード公の寝室を目指しています。とにかく、誰にも見つからないように屋敷の中を進む事が重要。潜入ミッションでは基本中の基本。どこぞの00ナンバーみたいに派手な銃撃戦はナンセンスです。

さて、目的地であろう屋敷の最も奥にある寝室のドアを開けて……

「……はれ？ どうされたのですか？」

……あれ、女の子？

「し、失礼しました。」

部屋を間違えたようです。

お嬢様は、もう少しお休みになつていてください」

「そうですか、お休みなさい……zzz」

……ちよつと奥に来過ぎたようです。いつの間にか、屋敷の離れまで来てしまったようです。

そして、先程間違つて入ってしまった部屋の中では、金髪に長い耳の女の子が寝ていました。おそらく、あの娘がルーティアお嬢様の言っていたティファニア嬢ですね？

「それにしてもあの娘、ルーティアお嬢様より胸の発育が良かった様な……」

確か、ルーちゃんより歳が下のはずなのに……コレもエルフの神祕つてやつですか？ 青い小鳥亭で働いているハーフな方もエルフなのに胸が大きいですし……あれ？ 覚えのない記憶が……電波？ と、いけないいけない！ 私は気を取り直すと、こんどこそモード公の寝室へと向かった。場所は魔法で半分眠らせたメイドの一人に部屋を確認したので、今度は大丈夫です。

「だ、だれだ！？」

「お静かに」

念のために結界 いつの間にか使える様になっていた月匣をこの部屋に張っているの、騒がれても問題はありません。でも、冷静であつた方がこの後の話がしやすい。

「モード公であられますね？」

「だとしたら、どうする？」

「私はあるお方からの使いで、モード公にこちらの手紙を秘密裏に届けに参つたしだいです」

そう言つて月衣から取り出した手紙 小包を渡しますが……、

「誰が送つてきたか分からぬ封書を、そう簡単には開けられん」

ごもつとも。花押も押されていない封書ですからね。もし毒でも入っていたら大変です。お嬢様も一度その手に引つかかつて開けてしまいましたし……。

「では、私めが開封させていただきます。

それをもつてして、安全を確認してください」

「……いや、そう言つてオヌシごと無理心中させると言つ腹積もりやもしれん」

「なるほど……」。

ですが、我が主は是が非でもこの小包の中の手紙と、贈り物を受け取つていただきたいのです。

……そう、アナタが隠している妾のエルフト、その愛の結晶たる



娘　ティファニア嬢のために」

私がそう言い終わると、モード公は顔を真っ青にして杖を向けてくる。

「つ、妻と娘はわたさん！　わたさんぞー！！」

「杖を納めてくださいモード公、だれも奪うとは言っておりま……」

「エアカッター！」

私の言葉も聴かず、風の刃を放つモード公。私はやれやれと思いつつ、

パリーン！

「な！？」

モード公の放ったエアカッターを、ハマノツルギで打ち砕いた。

「まったく、こちらの話を聞いて欲しいものです。」

モード公、杖を納めてください。

これ以上錯乱されるようでしたら、日を改めますが？」

口をパクパクとさせて……モード公はまともに話ができるような状態ではないようです。

「はあ……これなら、先程お会いする事の出来たティファニア嬢にわたした方が良かったでしょうがお嬢様？」

「な！？　て、ティファに会ったと言うのか！！」

あらいけない。口が滑ったようですね。でも、これは利用できる？

「……ええ、お会いました。」

寝ぼけていたようですが、とても可愛らしいお嬢様ですね？」

「……なぜ殺さなかった？」

「言いませんでしたか？　私は、我が主より贈り物を届けに着ただけだと……。」

彼女達を奪いに来たわけでも、モード公を暗殺しに来たわけでもございません」

モード公はしばし考え込むようにした後、

「……信用した訳ではない。だが、一度その贈り物　密書を読んで見よう」

「ありがとうございます。どうぞ……」

モード公は無地の花押を破ると、小包の中に入っていた手紙を読み始めた。そして、見る見るうちに顔を真っ青にさせて行き……。

「ココに書かれていることは真か？」

「はい、我が主から聞き及んだところ、あのお二方を火種として王位転覆を狙う戦が高い確率で起こるという見通しであります」

「ワシの粛清の理由を明かせぬが故の不满による反乱に、エルフを妾にとり子を成した事による国の分裂……」。

どちらに転んでも、あの子たちには不幸な未来しかないというわけなのか？」

「ご理解が早く助かります。」

すでに、アルビオン各地で災いの火はくすぶり始めております。その最大の着火点として利用されるのがモード公、あなた達であると我が主は見定めました。

ですが、我が主はもう一つの道を用意しました」

「……それが、このフェイスチェンジのマジックアイテムか。」

コレを使い、あの娘達を衆人の目の届く場所に出す事で、妾のエルフ疑惑を解消せよと……」

「はい、もし何か疑惑をもたれても、それは奥方様達の美貌を羨んでの嫉妬と一蹴するもよし。王族に根回しをするもよし。危なく成れば……」

私は杖を取り出すと、水を使って『トリステイン王国、ド・ラ・フォンティーヌ領』と空中に書き記し、

「こちらへとお逃げください。そちらの方でも、対策を行っています」

「……分かった。考えておく」

ふう、これで任務完了。

私はそのまま寝室の窓から失礼して、簾に乗って出て行きます。

「さて、適当に着替えてアルビオン観光でもして帰りましょう。」

お嬢様、おみあげは何か良いですか？」

遠く、ガリアで暗躍(?)しているルーティアお嬢様に問い合わせた。

\*

ワシは、見慣れぬマジックアイテムに跨り窓から出て行った珍客が、一瞬だが魔女に見えてしまった。

「だ、旦那様!? もう起きられていたのですか?」

「ん? ああ、今日は早く起きてしまつてな……」

そう言えば、エアカッターで切れたはずの床の絨毯が元どおりになっている。どの様な魔法を使ったかは知らんが……もしかしたら、あのメイドもエルフなのかもしれん。

「……そう言えば、名前を聞いていなかったな」

「はい?」

「いや、独り言だ。それよりも着替えと朝食を用意しろ」

「「か、畏まりました!」」

ふう……後でこのマジックアイテムを渡しに行くか。……そうだが顔が少し代わるから、テファが姉の様に慕っているサウスゴードの娘も一緒のほうがいいかもしれんな。

そう思いつつ、ワシは寝室を後にした。

A n o t h e r   s i d e   e n d

\*

## 楽しく転生29（後書き）

今回は日常編＋クランさんのお使いと言うお話で……。

何気に、オリ主が出ていません（遍在はいたけど、独立型なので別人）。黒子帽子を被ったのは個人的な趣味です。

最近出てなかったルイズとカトレアさんをもっと出したかったけど、この時点で書く事がないので日常編はここでカット……。

オリ主のネタ兵器、劣化版で正式配備を進めることにしました。

「空を飛ぶだけが筈じゃない！」

と、頭の螺子が外れた感じの人が叫んだ気がします。

モード公が、いやにあっさりと説得された事に不満をもたれる方も多いでしょうが……テファさんと会ったと言えば、何とかなるかなーと言う感じに仕上げました。

モード公説得は一話でまとめましたが（特にやることが浮かばなかったのも）、ガリア組みはやってみたい事があったのでそれを仕込んでいこうかと……。

それではまた次回！ ノシ

## 楽しく転生 29話までの登場人物など（前書き）

き、気がついたらもう年を越していたZ E o r z

お茶濁しに、楽しく転生 29話までに登場したオリキャラなどを紹介します。

## 楽しく転生 29話までの登場人物など

### 登場人物など紹介

ルーティア・ルシエル・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ  
ルイズの双子の妹ことオリ主。現代世界からの転生者。

双子なのでルイズと良く似ているが、髪の色は白で長髪、瞳の色は紅く、アルビノなのか全体的に色が薄い（自称天使様の趣味）。

チート能力は、月衣に月匣の製作、夢幻書庫に宝玉の継承者（？）、蒼い宇宙眼（額に象眼なし）に能力限界解除（要訓練）……。チートアイテムとしてアイン・ソウ・オウルと七徳の宝玉を所持している。

杖としてブレスレットのアイン・ソフ・オウル。一般的なタクト状の杖。戦闘用にモンハンのスラッシュアックスを元にした機械剣斧“タケミカツチ”と契約している。

さらに七本の大剣“ソード・オブ・ガーディアン”と11本の長剣“コモンズ・ソード”が月衣の中に常時収納されている。他にも箒や銃火器、試作品や娯楽品など様々な物が月衣に収納されているが……クラン曰く『月衣って、あんなに物が入ったっけ？』と不思議がられている。

得意な系統は風、フォンフェイーヌ領の実質的な経営者である。

### クラン・ベル・ド・ベルナーブル

元々は領地持ちの貴族であったが、家が没落して道端で倒れていた所を幼いルーティアが発見。以後ルーティアの専属メイドとなる。ナイトウィザード世界からの転生者で、チート能力としてナイトウィザードの能力と魔法無効化能力、ハマノツルギを所持している。俗に言う戦うメイドさんなキャラである。一流のメイドさんなので、主が必要としていない時はステルス能力を十二分に発揮して隠れて

いる。最近、ルーティアへの突込みが激しくなってきた。

髪の色は亜麻色でセミロング、瞳も髪と同じ色。歳はルーティアより少し年上。

得意な系統は水である。

キティ・ド・アリシエル

ルーティアの最初で最後の家庭教師さん。

領地持ちではない貧乏貴族。弟さんがいる。

元々魔法学園の教師を目指していたが、メイジのクラスが低すぎて落選した。

ただし、根は真面目だったので魔法の実技以外の成績は良好。貧乏ゆえに平民差別が殆どなく、メイドが雇えないので必然的に家事全般もこなせる。

フォンティーヌ領で学校が開設された際に、フォンティーヌ第一学校の校長に任命される。

得意な系統は土（ラインに届きそうなドット）である。

アストレア

カトレアさんの使い魔をやっているリリカルなのは世界の杖。デバイス

ルーティアと喧嘩したルイズを仲直りさせるために使い魔の召喚を行った際に呼び出された現代世界からの転生者でもある。

初期形状は、GNソードのグリップをものすごく長くした槍のような形状をしていた。現在は、ヴァーチェの胴体に首からGNバズーカ、肩からGNキャノンを生やした様な杖の形を取っている。

リリなの魔法と00の兵装を使用できるが、使用者であるカトレアさんが不調であるため本来のスペックを十分に発揮できない可哀そうな人（？）である。

ヴァリエール家のメイドさん達を“ラブコメに出てきそうな理想のメイドさん”に再教育した張本人でもある。

自称天使様

オリ主をハルケギニアに転生させた人（？）。

外見はまじしやんず・あかでみいに登場するゴスロリ天使“ガブリエル”（ただし、この御方は羽まで真っ黒である）。

何かとオリ主に警告と言うか、助言をしてくれる。おそらく出たがり屋。

彼女の話では、他にも自分の様な存在がこのハルケギニアに転生者を送り込んでいるとの事。

イリン

フォンティーヌ第一学校でメイドをやっている翼人の女性。

セントマルガリータ修道院からやってきたガリアの双子さんたちを出迎えた。

最近、同じ学校で働く精霊魔法（座学）の先生（翼人の女性）に告白されたとか……。

ジェイル・スカリエッティ

某ドクターと同じ名前をもつロマリアのテロリスト。

ロマリア国内を中心に活動し、民衆を扇動して教会を襲撃。彼らが溜め込んでいた金品財宝を市井の民に略奪させた。

能力や経歴などが不明のキャラ。おそらくロマリアの転生者の一人。

ロマリア、フォンティーヌ領襲撃騎士団

強力な聖騎士と火竜、破壊工作員を引き連れたロマリアの異端審問団。ロマリアに転生した転生者も何人か所属していたようだ。

最終的に、破壊工作員達はプーチンにより鹵獲。聖騎士達はハプシエルにより性癖が変換された。

火竜達は、ルーティアのネタ兵器“アークビートル・カオス”により撃破、鹵獲された。



メンバーの内、名前が確認できたのは、ジョニー、マイク、あと隊長（？）。

最後は、王都トリスタニアの目の前で全裸で黒い薔薇を咲き乱れていた所を憲兵に取り押さえられ、後にロマリアに送還され処理された。

## プチーズ

ルーティアが作った擬似精霊を宿したアルヴィーズ。

今のところは、プチネウス、ライフサイズ・ホイホイさん、ライフサイズ・コンバットさん、ナビ・コミュニケーション、プチディジーさんの五種類。

プチネウス、ライフサイズ・ホイホイさん、プチディジーさんは主に清掃作業などを担当。ナビ・コミュニケーションは主に司令室のオペレーター、夜間の実働警備員としてライフサイズ・コンバットさんが担当している。

## ブルーム隊

マジックアイテム 魔女の箒を装備したフォンティーヌとヴァリエール合同の新設部隊。初期隊員は10名。

初期隊員の中には、色々ときな臭いモノを抱えている者が多い。原作を知っている転生者もいた様だ。

現在は、フォンティーヌ領民の就職先の最有力候補。

## ゲルマニアの転生者

アナハイムにクルスガワ、ヴィクターにグロリオサなどといったどこかで聞いた事のある巨大企業の名称を名乗る商会。ゲルマニアの転生者が運営している。

フォンティーヌ産の特産品を無印品として販売するためのルートとして利用。

アナハイム『歩兵強化も良いけど、ガンダム作らない？』

クルスガワ『マルチ作りたいんで、プチーズの技術教えて！』  
ヴィクター『こつちもモモ作りたいから教えて！』

グロリオーサ『ディジーをライセンス生産させてください！』

と言うのが彼らの声だったりもする。

## 楽しく転生 29話までの登場人物など（後書き）

本編の方は、もうちょっと待ってください。

が、ガリアでのオリ主の行動が上手く決まらない……スランプだ。  
? o r z

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7242m/>

---

ゼロの使い魔 楽しく転生

2011年3月7日15時10分発行